파3P60

/24

醫科大學教授濱田玄達著

産婆學

前編

穐香堂藏版

自序

凡そ婦人の身に在て喜の大なるは孕みて輕産を遂るの喜に若くものなかるべしまた憂の甚きは不幸にして重産に罹るの憂に過ぐるものあらざるべし抑も産の輕重は獨り母兒の安危に係るのみならず延て一家の禍福に關す宜哉其喜憂する所斯の如く夫れ大且つ甚なること蓋し其輕重喜

憂の分るゝ所多くは産婆の注意ならびに其取扱法の善なると善ならざるとにあり産婆の注意にして善ならんか重産も害を未然に防くを得べしといへども其取扱にして若し善ならざれば輕産もまた變して重産に陥らしむることあり是れ則ち人文開明の國に於て産婆の養成を重んずる所以なり我邦先に山崎元修氏の譯せる朱氏

産婆論榊順次郎氏の纂譯に係る産婆學ありおもふに比年産婆の歩を進めたる二氏の恵といふべし予また近來我教室内産婆養成所講師の任に當り其生徒の爲講せし所の稿本漸く卷をなせるを以てこれを校正して世に公にし以て聊我道の一端を盡さんと欲す若し二氏の書と相俟て此業に小補する所あらば予の喜また大なりとい

ふべし

明治二十四年九月九日

濱田玄達誌

凡例

一此書分つて前後の二編とし前編に於て人體および生理の概略、妊娠、分娩および產蓐の平常經過ならびに其取扱法等を記載し後編に於ては妊娠、分娩、產蓐等の異常經過ならびに其際產婆の爲すべき務を講明せり

一此書は成るべく術語を用ひずして普通語を用ひたり是れ讀者をして容易く理解せしめんが爲なりまた各章を分つて綱目となし綱に於て先つ其要領を知らしめ目に至て更にこれを敷衍詳述せり

一書中記する所の度量衡は固より皆本邦の式にして度は則ち曲尺なり猶附するに佛國のメーテル系を以てせり

一書中の挿圖は諸の參考書中より善なる者を撰んで轉載せし者多しといへども予の新案に出でし者また尠からず

一本書の著述に就て採用したるおもなる參考書を左の如し

エ、マルチン氏著産婆學　第四版
クレデー及レチポルト氏著同　第四版
ベ、エス、シュルチェ氏著同　第九版
榊順次郎氏纂譯産婆學
スピーゲルベルグ氏著産科學　第二版
ウヰンケル氏著同
シュロイデル氏著同　第九版
ツワイフェル氏著同
ベ、ミュルレル氏編輯産科全書
ヘルトウヰヒ氏著胎生學

著者識

産婆學前編目録

緒言

産婆の職務　一丁
産婆の性質および其心得　七丁

巻の一　人身の概略、婦人の骨盤および婦人の生殖器

第一章　人身の概略　十三丁
第二章　婦人の骨盤　二十八丁
〔甲〕大骨盤　三十六丁
〔乙〕小骨盤　三十七丁
第三章　婦人の生殖器　四十三丁
〔甲〕外生殖器 一名外陰部　四十四丁

〔乙〕内生殖器 一名内陰部　四十八丁

卷の二　平常妊娠および妊婦の養生

第一章　妊娠の概略　五十九丁
第二章　妊娠中母體に於る變化　六十二丁
〔甲〕全身に於る變化　仝上
〔乙〕生殖器に於る變化　六十四丁
第三章　卵の變化　六十九丁
〔一〕卵膜　七十二丁
〔二〕胎盤　七十三丁
〔三〕臍帶　七十四丁
〔四〕羊水　七十七丁
〔五〕胎兒　仝上

成熟嬰兒の概徵　八十一丁
成熟嬰兒の頭蓋　八十三丁
胎兒の位置、體向および體勢　八十八丁
第四章　産婆の診察法　九十二丁
〔一〕外診　仝上
〔二〕內診　九十八丁
第五章　妊娠の鑑定　百四丁
第六章　初妊と經妊との鑑定　百八丁
第七章　妊娠時期の鑑定　百十二丁
第八章　妊婦の養生　百二十四丁

卷の三　平常の分娩および産婦の取扱法

第一章　分娩の概略　百三十七丁

第二章　産出力　百三十九丁
第三章　分娩の經過　百四十二丁
第四章　胎兒の産道を通過する有樣即ち分娩機轉　百五十四丁
〔甲〕頭位一名頭産　百五十八丁
其一　頭蓋位一名頭蓋産　百五十九丁
其二　前顱位一名前顱産　百六十六丁
其三　顏面位一名顏面産　百七十丁
〔乙〕骨盤位一名逆産　百七十六丁
其一　臀位一名尾骶位又坐産　百七十七丁
其二　足位および膝位　百八十一丁
第五章　複胎分娩　百八十六丁

第六章　分娩初期の鑑定　百八十九丁
第七章　分娩經過中胎兒生存の鑑定　百九十丁
第八章　産婦の養生および其取扱法　百九十一丁
〔甲〕頭産の取扱法　百九十九丁
其一　頭蓋産の取扱法　二百六丁
其二　頭蓋産第二類および前顱産の取扱法　二百三十四丁
其三　顏面産の取扱法　二百三十六丁
〔乙〕骨盤産の取扱法　二百三十八丁
〔丙〕複産の取扱法　二百四十七丁
卷の四　平常の産蓐ならびに蓐婦および嬰兒の取扱法
第一章　平常産蓐の經過　二百四十九丁

〔甲〕　產褥中全身の變化　二百五十丁
〔乙〕　產褥中局所の變化　二百五十二丁
第二章　產蓐の鑑定　二百五十八丁
第三章　嬰兒の發育　二百五十九丁
第四章　蓐婦の養生および其取扱法　二百六十一丁
第五章　小兒の取扱法　二百七十八丁

產婆學前編目錄終

產婆學前編

醫科大學教授產科婦人科主任　濱田玄達　著

緒言

產婆學とは妊娠、分娩および產蓐經過の常と變とを知らしめ兼て妊婦、產婦および蓐婦ならびに小兒に對して產婆の宜く務むべき事を敎ゆる學なり

產婆の職務

妊娠、分娩および產蓐も共に自然の妙用にして疾病にあらず故に婦人孕むより產室を離るゝまで總て其經

過平常なるを例とせば然れども天は風雨雷霆の變ある如く其經過中にもまた時々異常あることを免れ難し故に妊婦および産婦に對して産婆の宜しく務むべき事も則ち先其經過の平常なるや否やをつくづく察するに在り

而して其經過の平常なるものに對しても固より産婆本分の取扱をなし且其養生法等を教へ以て母兒の健康を保護すべしといへども若し異常を認めたるときは母兒のまだ危からざるに先つて速かに

醫を迎へ其診察を乞はしむるを産婆の務とす

妊娠分娩および産蓐の平常なるものとは則ち其經過中母兒兩ながら少も障害なきものといふ然れども其經過中或は産婦自ら其養生法を誤り或は産婆の取扱法宜しからざるときはこれが爲め母體に於て後日難治の病原を醸するのみならず甚しきに至りては胎兒の生命を害しまた産婦を危くすることあり是れ則ち經過の平常なるものといへども熟練の産婆を招き其看護を受ざるを得ざる所以なり

妊娠分娩および産蓐の異常なる經過とは則ちこれがため母體若しくは兒體の健康を害し或は其生命を危くするが如き恐あるもの

をいふ而して一朝此變症を發したるときは其害實に極りなきものなり就中分娩時に於ては其害を及すことの速かにして且大なることいまだ焉より甚しきものはあらず然るに斯の如く恐るべき症を來すべきものといへども其未だ甚しきに至らざるに早く既に適當の醫療を施すときは毫も母兒に害を加へずして容易にこれを救ふことを得るものとす故に產婆たる者妊娠および分娩の經過中僅に異常を察したらば其未だ危に至らざるに先つてこれを醫者殊に產科醫に托して其處置を請はざるべからず母兒の己に危に迫りて始てこれを醫に訴るが如きは產婆の務を盡さゞるものといふべし如何となれば其已に危に迫りては假令幸にして母兒を救ひ得るの術あるもまたかならず多少の害を免れず況して遂にこれを救ひ得ざるの例尠からざるをや見よ產婆の其職を盡すと盡さゞるとは其利害果して如何なるを則ちよくこれを盡すときは母兒の危を未發に救ひこれと盡さゞるときはこれを危に陷らしむ實に死生の分は只產婆たる者の其職を盡すと盡さゞるに在りこれ產婆の尤も戒心恐懼すべき處なり故に曰く妊娠、分娩等の經過中に異常を察したらば速かに醫を招かざるべからずと如何となれば斯の如き變症に臨んで醫者の治療を施すにはかならず一定の時機あるのみならずまた產婦の容體と胎兒の狀態とに從ふて其處置一樣ならず而して其時機を察し其容體を詳かにし其狀態を明かにすることは醫學に富みたる醫者のみこれを明斷することを得ればなり然れども招きたる醫のいまだ產床に臨まざるに己に危險の恐あるときは產婆自ら其分に應せる取扱

となし以て一時の急を救はざるべからずまた醫の來りて產床に臨みたる後は謹んで其指揮を受け手捷にこれを助け善き助手たらざるべからず要するに產婆の職務は即ち平常の妊娠および分娩等に臨んでは應分の取扱をなし聊たりとも變症と認むるときは速かに醫者を招き其處置を請ふべきものにして決して自ら變症を取扱ふべきものにあらず

抑產婆たる者若し不學にして其業を脩めず怠惰にして其職を等閑にするときはこれが爲めに家々に悲哀の聲を起し一國の貧弱を來すべしといへども能く其業を脩め其職を盡すときは即ち不幸を未發に防ぎ家々に幸福の種子を蒔き一國に富强の實を收めしむべし實に敬ふべくまた貴ふべき職務といふべし

以上略述したる產婆の職を務めんとする者はかならず左に揭ぐる二項を學ばざるべからず

〔甲〕人身の概畧。婦人の骨盤。婦人の生殖器。妊娠、分娩および產蓐の平常經過ならびに其取扱法

〔乙〕妊娠、分娩、產蓐の異常經過ならびに其際產婆のなすべき務および初生兒に發すべき疾病の大意

產婆の性質および其心得

產婆たらむこと欲する者は則ち身體强壯完全にして能く勞動に堪へ耳目および手指の作用鋭敏なるを要す

產婆は晝夜と擇ばず速かに人の招に應ぜざるべからざるが故に其身の壯健を要することいふまでもなく跛蹩、傴背等の如き不具

者ハ假令健康なりといへども此業に不適當なりまた肺病、心臓病、癲癇、癩病、痛風等難治の病ある者ハ産婆に適せず就中梅毒、疥癬等の如き傳染病あるものハ其病の治するまでハ嚴に本業を中止せざるべからずまた耳目の作用健全にして且手および指の感覺鋭敏ならざるべからず故に成るべく疣、皸皮等の生せざるやう毎に注意に怠るべからず

産婆は品行端正、性質純良にして分別力と勇氣に富み耐忍の力強くまた自ら本業を好み慈愛の心深くして且寡言、温和、叮嚀、謙遜ならざるべからず

以上の性質心得ハ産婆に限らず誰人にも必要なれども特に産婆にハこれを要することも大なり品行云々ハ更にいふまでもなく分

別力と勇氣ともまた必要なり若し此力に乏しければ則ち産床不意の變症に對し忽ち迷惑狼狽して其取扱を誤ることあり然れども勇氣を要すればとて決して粗暴なるべからず所謂小心大膽なるべし殊に緊要なるハ耐忍力なり若しこれなければ則ち産床に臨み自然の經過を俟つに堪へずして動もすれば種々の事を企てく反て母兒を害することあり謹むべしまた産婆にして自ら其業を好まず且慈愛の心深からざれハ其目的とする所只報酬の一事にあるが故に動もすれば貧富に從ふて差別を爲し施業に精粗の別あるのみならず己れの學術をもまた上達すること能ハざるものとす固より産婆ハ一種の營業なりといへども已に産床に臨んだる以上ハ須く營業の心を離れてひたすら其務を目的とし貧富貴賤を擇ばず皆一樣に懇切を盡し産婦と共に喜び共に憂ひ懇に其

患者を慰め切に其氣力を勵ましひたすら慈愛の心を以てこれに接せざるべからず忘るなよ貧者一滴の感涙は富者千金の報酬に優ることをまた産婆は宜く寡言温和なるべし決して多言輕躁なるべからず殊に招かれたる家に於て同業者若くは醫者に關したることを善悪に拘らず喋々多言すべからず固より己れの自慢話等は決してなすべからず産婆にして若し此心得なきときは其品位を墜して識者に輕んぜらるゝのみならず忽ち世の信仰を失ふべし慎まざるべけんや就中招かれたる家の事情および其主の身體等に關したることは嚴にこれを秘すべし然れども醫者若くは同業者より其主の容體に關したることを質問せらるゝときは已れの見聞せる事件を詳かに告げざるべからず其他尚産婆は叮嚀謙遜ならざるべからず殊に積年實験に富みたる同業者および醫者

に對しては最も敬禮を表し常に醫の命令を守り聊たりとも我慢の心を出すべからず然れどもまた自ら其心を高尚にし決して卑屈諂諛の所業をなす勿れ

産婆も其學術を習ひ卒へて開業の許可を得たりともいまだ満足すべからず更に進んで其學術を上達せしむるの心懸なかるべからず

學校に入り教師に就き學び得なる學術は只産婆學の端緒にしていまだ其奥義に達せしものといふべからず而して其奥義に達せんには開業の後益々其學業を勉强し多くの妊婦、産婦および嬰兒等に就て己れの實験を積まざるべからず故に以前教師より傳授せられたる事件を忘れざるやう産婆書を反復讀習して其意味を

研究するは勿論また產床に臨んでは諸事細かに注意して其見聞せしことならびに自から爲したる取扱法を一々日記に書き留め或はこれを表に製り且其實驗日記に就て深思研究し疑はしきことあらば直にこれを產婆書に對照し而して猶疑ひ解し難きことはこれを產科醫に聞き質し聊かたりとも疑はしきことを不問に措くこと勿れ

產婆の業を營む者以上の心得を始終心肝に銘して忘れざれば自ら世の稱譽を得て長く人の信仰を保ち其業忽ち繁昌して自他の幸福を得むこと更に疑ふべからず

產婆學前編卷の一

人身の概畧、婦人の骨盤および婦人の生殖器

○第一章　人身の概畧

人身は概して硬部、軟部および流動物より成る硬部とは則ち骨にして軟部とは皮膚、筋、靱帶、脉管、神經、內臟等をいひ流動物とはおもに血液および淋巴液をいふ

●骨は相連結して人身の基礎を作り軟部をしてこれに附着せしむまた腔を作り其內に貴要の內臟を容れてこれを保護するものなり而して其骨と骨と相接合したる處を關節といふ動く處と動かざる處あり

●皮膚は全身の外面を被ふ者にして毛と爪は其附属物なりまた皮膚の下には脂肪組織といふ者あり俗に脂肉といふ是なり場所に従ふて多き処と少き処とあり

●筋は脂肪組織の下に在り俗に肉といふ是なり其色赤くして骨より骨に附着してこれを動かす用をなすなり而して其骨に附着せる部は白色にして光沢ありこれを腱といふ

●靭帯は関節の部に在りて骨と骨とを聯結してこれをして離れざらしむるの用をなす其色白くして帯のやうなる薄き線條なり

●脈管とは血管および淋巴管にして血液および淋巴液の流通する管なり而して血管に動脈管と静脈管との二種類あり動脈管は心臓より血液を受け取りてこれを全身に送る者にして静脈管は全身の血液を集めて再びこれを心臓に返す者なり爪毛

等を除くの外脈管の到らざる所は殆どこれなし

●神経とは白き繊維にして脳髄と脊髄とより出で丶全身に分布し運動を起し痛痒寒熱を掌り視、聴、嗅、味を辨ずる者なり

●内臓とは脳髄、脊髄、心臓、肺臓、肝臓、腎臓、脾臓、胃、腸、膵、卵巣、喇叭管、子宮、膣、膀胱等をいふ其他五官器もまた此部類に属す五官器とは則ち色を視る眼、音を聴く耳、香を嗅ぐ鼻、食を味ふ舌、痛痒寒熱を覚ゆる觸器(主に皮膚の中に在り殊に指の皮膚に多し)是なり

●血液は断へず体内を循環して人身を養ふべき用をなす所の赤き液汁なり　淋巴液とは人身の諸器械より湧き出て淋巴管に集まり遂に血液に混ずべき無色透明の液なり而して彼の消化を受たる飲食物より生ずる所の乳糜といふ液もまた此部類に属す」

以上の外人身中には猶軟骨ありまた腺あり　軟骨は骨よりも

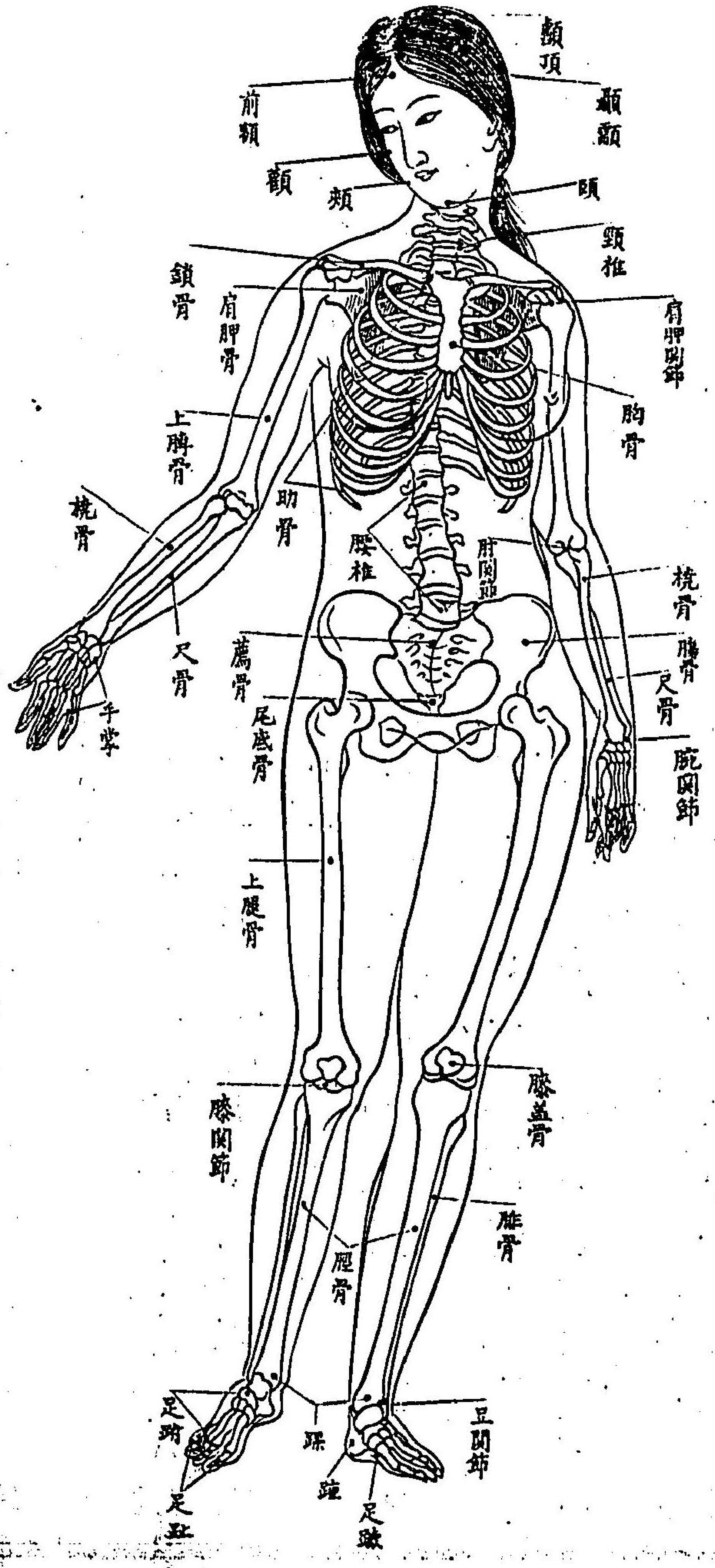
軟く肉よりも硬くして其色白く骨の元なり即ち骨は元來軟骨の變したる者なり而して生涯中骨に變せずして軟骨の儘に存在せる所は耳朶、鼻翼、氣管、關節部等に過ぎず　腺　は種々の液汁を製する器にして人身の諸部に散在す例へば涙腺の涙を製し唾腺の唾を製し乳腺の乳を製し汗腺の汗を製するが如く一々枚擧すべからず

人身を大別して頭顱、軀幹（胴とも云ふ）および四肢の三部とす皆前に掲げし硬部軟部および流動物より成る

〔一〕頭　顱　は人身の最上位を占むる者にして許多の骨より成り更に頭蓋と顔面との二部に分かたる

●頭　蓋　は六枚の骨より成り相縫合して一腔を作るこれを頭蓋腔といふ腦髓の位する處なり大人の頭蓋に於ては各縫合堅固にし

第一圖



て毫も運動せすといへとも嬰兒に在りては猶緩にして多少移動するものとす而して頭蓋の頂上を顱頂といひ前方を前額後方を後頭といひ耳の前上方を顳顬部といふ

●顔面は頭蓋よりも尚多數の骨より成り下顎を除くの他は皆固く聯合して毫も動搖せす顔面を小分して眼、鼻、頬、上顎、下顎、上唇、下唇、口、頤の諸部とす而して耳は頭蓋と顔面との間にあり

（二）軀幹 とは頸、胸廓、腹および骨盤を總稱せしものにして其後側には項窩より初まりて尾骶骨に終る所の脊柱あり是れ脊椎骨と名くる許多の輪状短骨累々相重りて成る者にして内に一條の長管あり上方頭蓋腔に通ふて腦と連續せる脊髓を容る而して最上七枚の脊椎骨を頸椎一名項椎といひ次の十二枚を胸椎一名背椎といひ下の五枚を腹椎一名腰椎といふ其次は薦骨および尾骶骨なり○胸椎には左右各十二枚の肋骨相接し運動すべき關節をなせり而して其肋骨の前端は更に肋軟骨に由て胸骨と接合し以て胸廓を搆成す胸廓上部の左右には左右の鎖骨および肩胛骨あり肩胛骨は上肢と相繋れりまた薦骨の兩側には髖骨あり下端には尾骶骨あり相合して骨盤を造成す髖骨の下部に圓き凹窩あり髀臼と名く下肢の繋る處なり

以上は軀幹の總體に就て其造搆を知らしめたるもの

まして以下は頸、胸廓、腹および骨盤の各部に就て其要處を擧ぐべし即ち左の如し

●頸　の前部を咽喉といふ咽喉の最上部に舌骨あり舌骨の下に喉頭あり聲音の生ずる處とす次に氣管あり氣管の後には食道の上部あり○頸の後方を項部といふ項部の最上部に凹き處あり項窩と名づく○頸の兩側には大なる動脈および靜脈あり

●胸廓　の前部を胸部と稱し後方を背といふ而して胸部の中央平坦なる所を胸骨部と名づく其左右に乳房あり上膊の下の凹みたる處を腋窩といふ腋窩の上は肩胛部にして下は胸脇部なり背の中線には脊椎あり其左右の上部には三角形の肩胛骨あり

胸廓内には大なる腔あり胸腔と名づく腔の左右に肺臟を容る兩肺の間に心臟あり肺は呼吸を營み心臟は其縮張に由て血液を循環せしむる者とす其後には食道の中部あり

●腹　の前上部三角形の處を心下といふ心下の兩側に季肋部あり臍の周圍を臍部といふ臍部の下方を小腹部といふ小腹部の左右にして腹の下端に方る處を鼠蹊部といふ季肋骨の下縁と腸骨櫛の間に在る軟かなる部分を側腹部といふ側腹部の後は腰部にして其中線に腰椎あり○腹壁はおもに筋肉より成り内に大なる腔あり腹腔といふ上は横隔膜に由て胸腔と隔てらる而して腹腔の右上隅にして季肋の後に肝臟あり左上隅に脾臟あり心下に胃あり胃の後に膵あり腎臟は腰椎の兩側に在り其餘腹腔は皆腸の占むる所なり而して以上の諸内臟は皆腹膜と名づくる薄き皮膜を以て被はる

●骨盤　および骨盤内の内臟は産婆において最も緊要なる部分たるが故に其詳細なることに至りてはこれを次章に讓り此には只

其外部に於る二三の要所を擧ぐるに過ぎず即ち骨盤の前側と恥部とを名く恥部の後方股の間に肛門部あり肛門坐す肛門と外陰部との間を會陰といふ骨盤後側の中線を薦骨部と名く其左右に臀部あり大に筋肉に富む骨盤の兩側を腸骨部といふ

〔三〕四肢

四肢は軀幹に繋り許多の筋肉ありて自在に運動す分つて上肢と下肢とす

●上肢は肩胛關節に由て肩胛に繋り肘關節および腕關節を以て上膊、前膊および手の三部に分たる上膊には一長骨あり上膊骨と名く前膊には二長骨あり尺骨といひ橈骨といふ手は多くの小骨より成り更に腕と五指とに區別す而して腕の內面を手掌といひ外面を手背といふ五指は則ち拇指、示指、中指、環指、および小指是なり

●下肢は股關節(一名臼關節)に由て骨盤に繋り膝關節および足關節と

以て上腿、下腿および足の三部に分たる上腿(股とも云)には大なる長骨あり上腿骨といふ膝關節の前側には膝蓋骨あり其形ち圓くして移動すべく後側に一凹所あり膝膕と名く下腿には二本の長骨あり脛骨および腓骨是なり下腿の後側肥豊なる部を腓といふ足關節の左右に隆起するものを踝といふ足は手に於るが如く多くの骨より成り足跗と足趾とに分たる而して足跗の後側を踵部といひ下面を足蹠といひ上面を足背といふ

以上の諸器械は生活中血液の媒介に由て斷へず其實質を新たにし此機能を名けて新陳代謝といふ即ち陳き廢物は謝して體外に出で去り新しき營養物入り來りて之れに代るなり而して此營養物とも食物に基き

成る所の者なり

食物は口中において細かに咀嚼せられ而して後咽頭食道を經て胃に入り胃液と混じて粥の如き物に變じ小腸に入りて此處にて肝より出づる胆汁膵より出づる膵液腸より出づる腸液とに混じて大腸に下る而して此經過中において其消化せられて乳の如き液に變せし部分を乳糜と名く是即ち營養物にして胃腸の壁に分布せる淋巴管および血管に吸收せらるれども消化せられざる部分は糞便となり直腸より體外に排泄せらるゝものとす而して其淋巴管に吸收せられたる營養物もまた遂に血管内に入り暗赤色の靜脈血に混じてこれと共に心の右室に至れば其收縮に由て更に大なる脈管を經て肺に射入せらるゝものなり○心の右室より出でて肺に入る所の此大なる脈管は肺中において恰も樹の枝を生ずる

が如く漸々無數の小枝に分れ毛細管と名くる頗る細き管となりて全肺に分布す而して血液は此毛細管において其已に廢物となりたる所の炭酸、水蒸氣等を肺内の空氣中に吐き出し其代りには空氣より營養に必要なる酸素といふ氣を取りて以て鮮紅色に變ず但し肺内の空氣は呼吸に由て鼻、口、喉頭、氣管を經て肺に出入する空氣なり○肺中において鮮紅色に變じたる新鮮活潑の血液はまた恰も無數の樹の根の集りて一根の幹となるが如く漸々大となれる脈管を通過し肺より出でゝ心の左室に入り其收縮に由て更に大動脈に出で全身の動脈管を經て終に其毛細管に分流すること恰も肺に於るが如し而して心臓より血液を射出する毎にかならず動脈に搏動を生ず脈搏即ち是なり大人の脈搏は一分時間に平均七十次とす○動脈より來りたる鮮紅色の血液は滿身到る所の毛細

管において其部の諸器械に營養分を與へまた其諸器械より己に廢物となりたる物質を吸收して以て暗赤色に變し漸々く流れて大なる靜脉に流れ集り乳糜を混じて再び心の右室に還り肺に入りて更に活潑の血液に變し以て全身を養ふことを往還終始環の端なきが如し是故に口、食道、胃および腸を總稱して消食器といひ心臟および血管を血行器といひ鼻、喉頭、氣管および肺を呼吸器といふ

血液は右營養の外腺の作用に由て種々の液汁を製出する元となる者なり而して此液汁には體中において大切の要をなす者と害となるべき廢物を體外に排出する者とあり例之唾液、胃液、胆汁、膵液、腸液、涙液、粘液等は則ち體中において緊要の働きをなす者にして尿と汗とは猶炭酸の肺より出るが如くこれに由て人身に害となるべき廢物を排泄するものとす但し尿は左右の腎臟に生じ輸尿管を經て膀

胱に溜り而して後尿道より排泄せらるゝものなり是故に腎臟、輸尿管、膀胱および尿道を總稱して泌尿器といふ

以上の諸器械も男女共殆んど同じことにて著しき差別なし只僅かに婦人の男子と異なる所は其體格嫰かにして長け短く筋骨の發育弱く肩いからず胸腔狹まくこれに反して腹腔および骨盤腔も廣く全身脂肪に富み上腿また大なりといふに過ぎず而して其判然男女を區別すべき處は只骨盤および生殖器の構造にあり

○第二章 婦人の骨盤

骨盤は軀幹の最下位を占むる所の骨管なり婦人に在ては生殖器の要部を維持保護するの用のみならず分娩の機轉に就きまた一大關係あるものにして其構造は四枚の骨より成る即ち薦骨、尾骶骨および左右の髖骨是なり

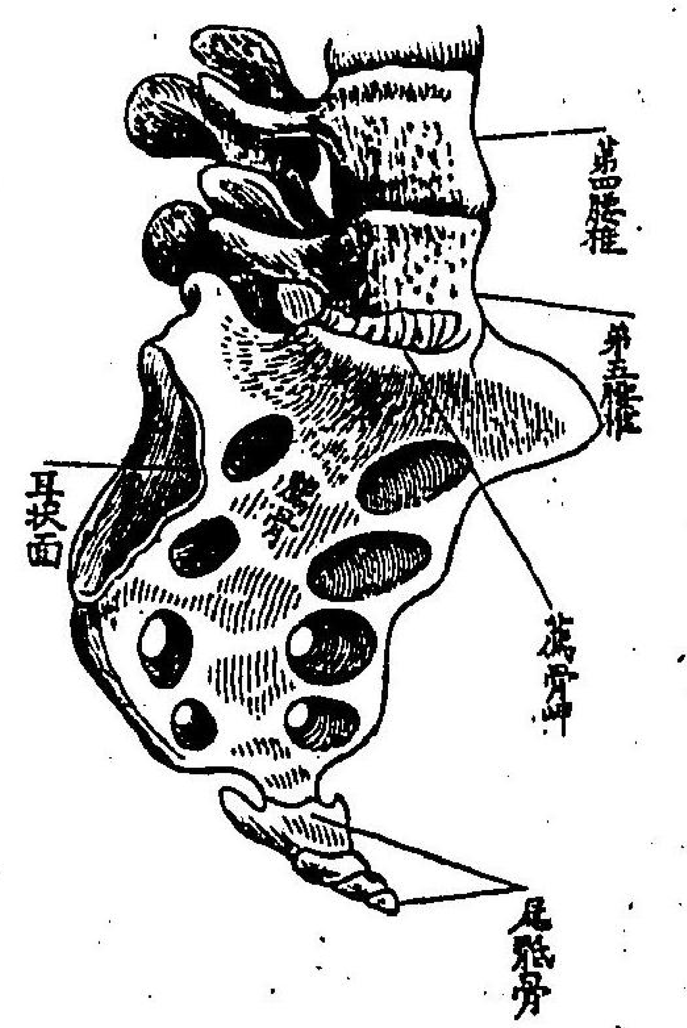
骨盤は婦人生殖器の要部たる卵巣、輸卵管、子宮、膣等を保護し且其位置を維持するの用あるのみならずまた分娩の機轉に就き最大の關係を有する者なり即ち其形狀大小等に於て著しき異常あるときは仮令胎兒および陣痛に少も變常なきもかならず分娩の機轉に著しき障害を來すものとす要するに異常の骨盤を有する婦人は平常の分娩となし難し依て平常の分娩は只平常の骨盤を有する婦人に望むべし

（一）薦骨 は骨盤の後壁を作り其形ち三角にして上端は廣く下端は尖る前面は彎凹して平滑に後面は凸隆して許多の突起あり兩面とも中線の左右に四對の孔あり側緣の上部に耳狀の面あり上端の第五腰椎に接して前方に突出せる處を薦骨胛と名く下端は尾骶骨に接し側緣は髖骨に接す

薦骨は元と五枚の椎骨にして後に癒合して一骨に變じたる者なり即ち其前面にある所の四條の低き横線は各椎癒合の遺跡なりまた

両面にある四對の孔ハ神經の出る處とす

第二圖



薦骨た第四第五の腰椎および尾骶骨と共に斜に右の方より見たる者

〔二〕尾骶骨も其形ちまた三角にして四枚の小椎骨より成り上端を廣くして薦骨と接し下端を尖りて前下方に向ふ

尾骶骨を搆成する四枚の椎骨ハ薦骨に於るが如くかならずしも相癒合せす且其薦骨との接合緩かなるが故にこれを前方より壓すれバ稍後方に退くと以て骨盤の下口は分娩の際少く擴張し得るものとす

〔三〕髖骨は左右相對して骨盤の兩側壁と前壁とを作り後は薦骨の耳狀面に接し前は左右の同名骨互に相接して所謂耻骨縫際を作る此骨小兒に在りては三枚の骨に分る故に元來三骨なりしに後癒合して一骨に變したる者なり其癒合部に圓き深窩あり髀臼と名く是上腿骨と關節する處なり而して其所謂三骨とは則ち腸骨、坐骨および耻骨是なり

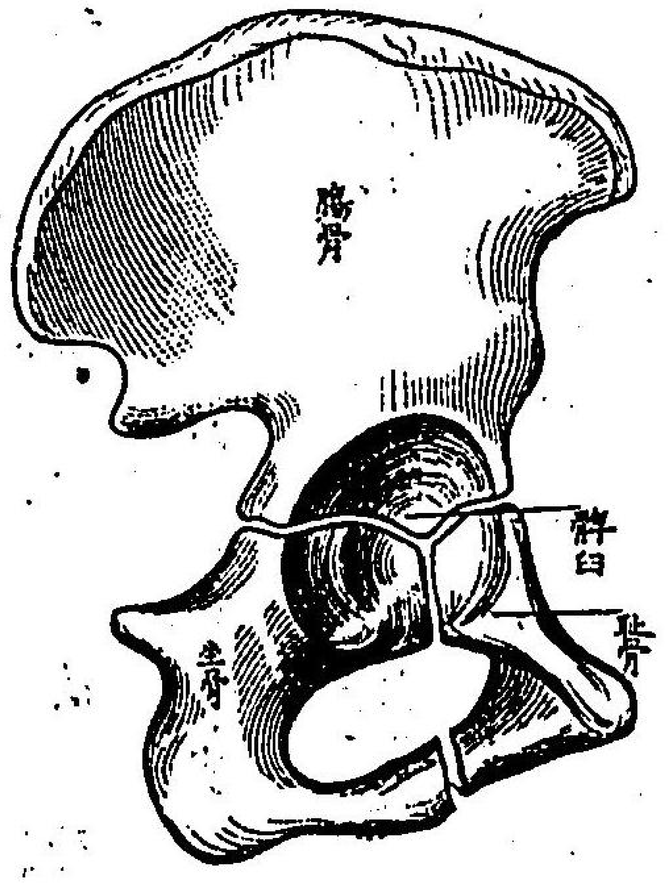
〔一〕腸骨ハ髀臼の上方に在り體と板との二部より成る體ハ下の

厚き部にして板は上の扁平なる部なり板の上線と腸骨櫛といふ櫛の前端突出せし處を腸骨の　前上棘といひ後端を後上棘といふ骨の內面に於て體と板との界に彎曲せる線あり無名線といふまた弓狀線ともいふ線の後端に耳狀面あり薦骨の耳狀面と相接す

第三圖

右の髖骨內面を示したる者

第四圖



右の髖骨を三個に離しその外面を示したる者

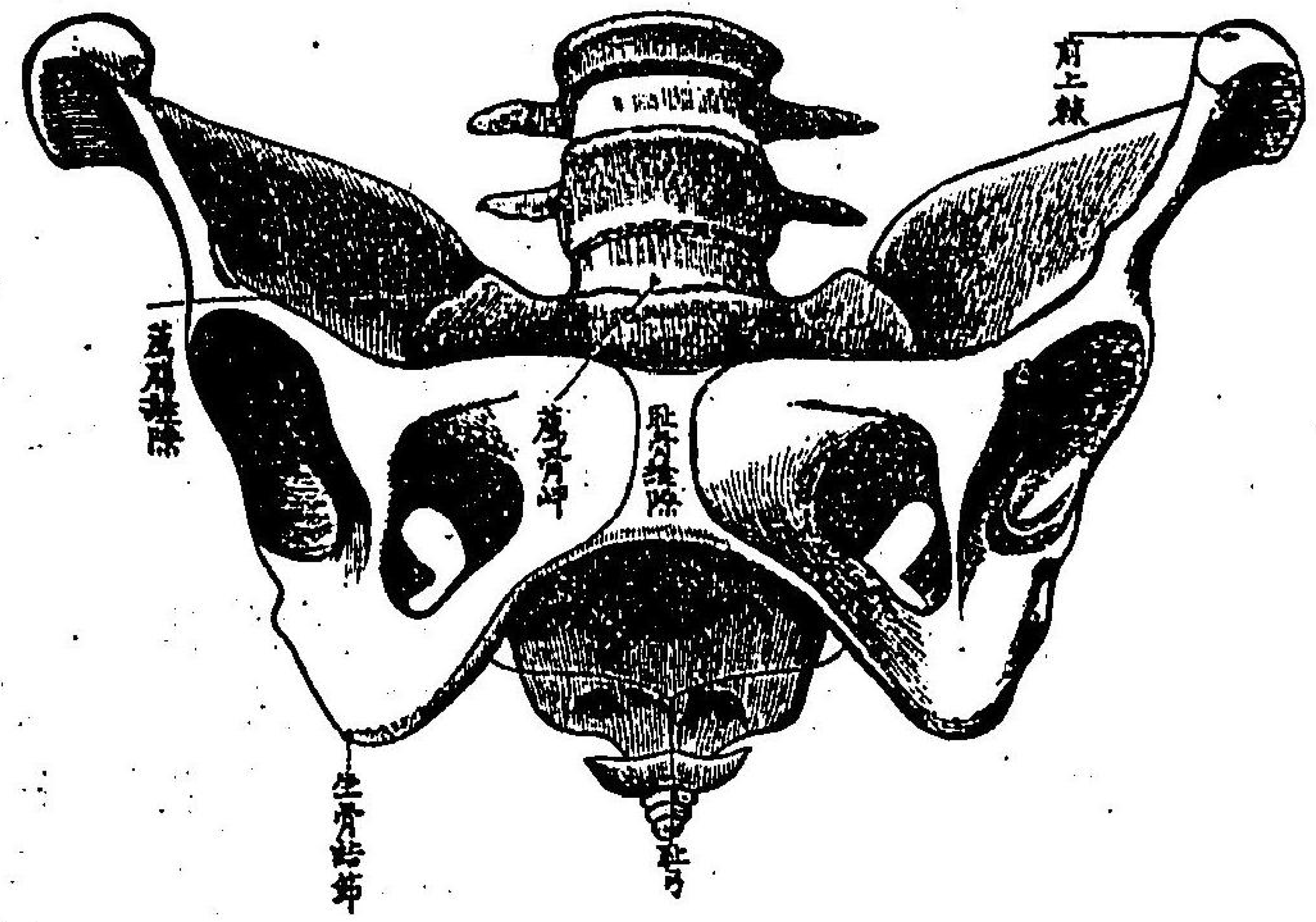
〔二〕坐骨は髀臼の下方にあり體と二枝とより成る二枝中其後方に在る者を下行枝といふ下行枝の後線に在る所の尖りたる突起を坐骨棘といふ下方の厚き處を坐骨結節といふ坐骨結節より起りて前上方に進む者を上行枝といふ則ち上行して恥骨に達す

〔三〕恥骨は髀臼の前方に在り身體の中線に於て左右相接し以て骨盤の前壁を作る而して其左右接合せる處を恥骨縫際といふ縫際より起りて後外方に退く者を地平枝といふ其上線に鋭き線あり恥骨櫛といふ腸骨の無名線と連れりまた縫際の下部より出で丶下外方に下る者を下行枝といふ坐骨の上行枝と結合し以て　恥弓を作る恥弓の上隅を　恥弓頂　といふ

以上の諸骨は四箇處に於て互に相接合し以て骨盤と名ける一條の骨管を搆成す

四箇處の接合は則ち前に記載せし如く恥骨縫際に於て一個、薦骨と髖骨と接合せる處即ち薦腸縫際に於て左右二個、および薦骨と尾骶骨の間に於て一個、以上四個の接合是なり而して此四個の接合中薦骨と尾骶骨との接合を除くの外は皆軟骨および靱帯を以て固く結び合ふて毫も運動せず且薦骨と髖骨との間には薦腸縫際の外尚二骨の

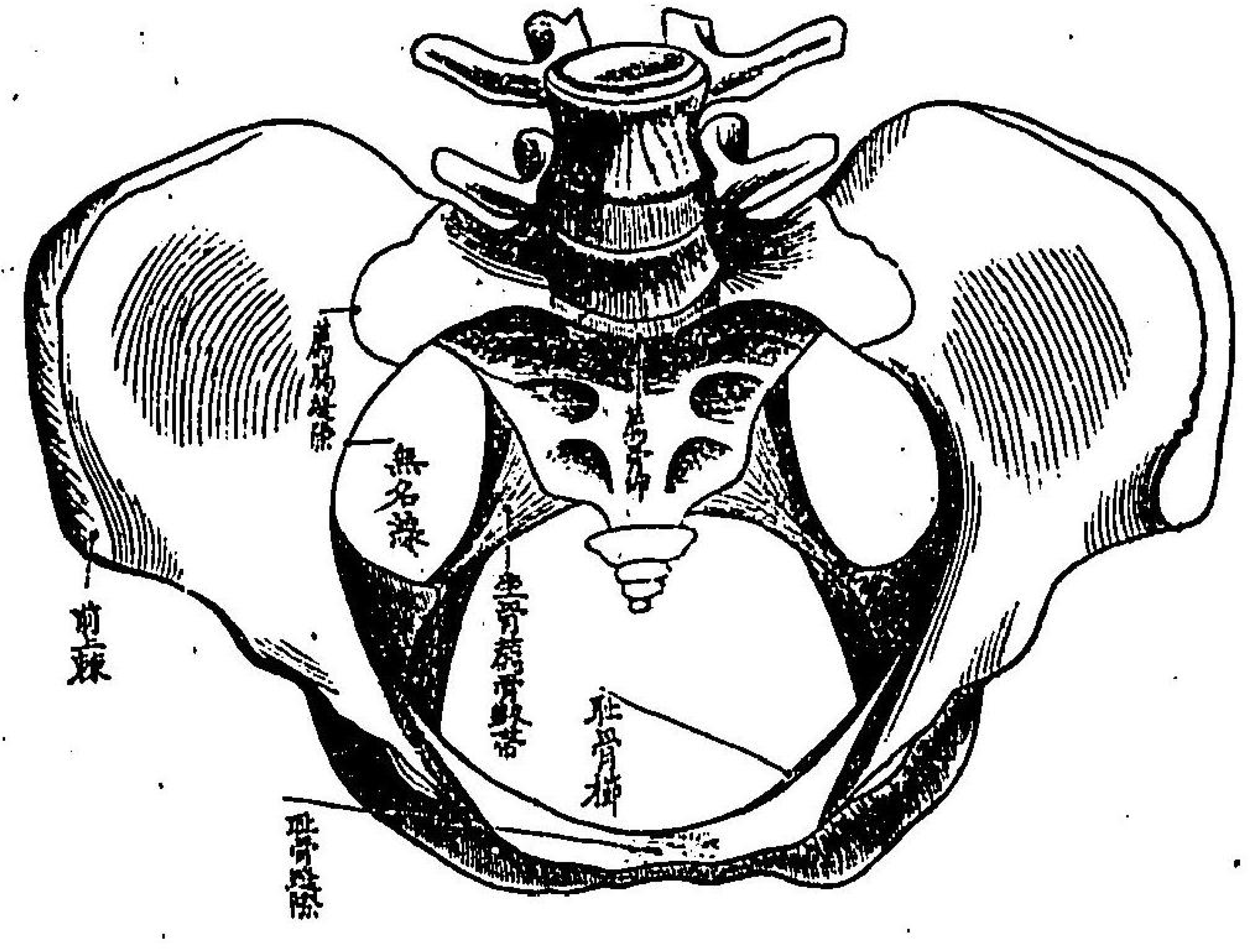
第五圖



婦人の骨盤を前方より見たるもの

結合を一層堅固にすべき一條の強き靱帯ありこれを坐骨薦骨靱帯と名け坐骨棘と坐骨結節とより起りて薦骨の側緣に附着す而して此靱帯はまた薦骨より作くられたる骨盤後壁の不足を補なふ

第六圖



婦人の骨盤を前上方より見たる者

骨盤管は各處大小一樣ならすといへども殊に其上半分と下半分とは其差最も著しき故に分つて大小の二

部とす

大小二部の境界を劃するものは則ち薦骨岬より腸骨の無名線を通して恥骨縫に畫きたる一輪の線なり(第六圖を見よ)此線より以上の部を大骨盤といひ其以下を小骨盤といふ

〔甲〕大骨盤

大骨盤は第四および第五の腰椎と腸骨板と前腹壁の下部とに由て圍まれ其形ち漏斗の如く上方は廣く下方は狹し

大骨盤は分娩に就て大なる關係なしといへども其大小に準して分娩に最も大關係ある小骨盤の廣狹を大畧推測し得べきが故にこれを測るの法を知らざるべからず即ち其測法は左右腸骨の距離を其櫛と前上棘との二箇處に於て測るに在り而して平常の骨盤に在ては左右前上棘の距離は大約七寸三分(二十二センチメーテル)にして左右腸骨櫛の最も隔たりたる點に於ては其距離大約八寸三分(二十五センチメーテル)とす

〔乙〕小骨盤

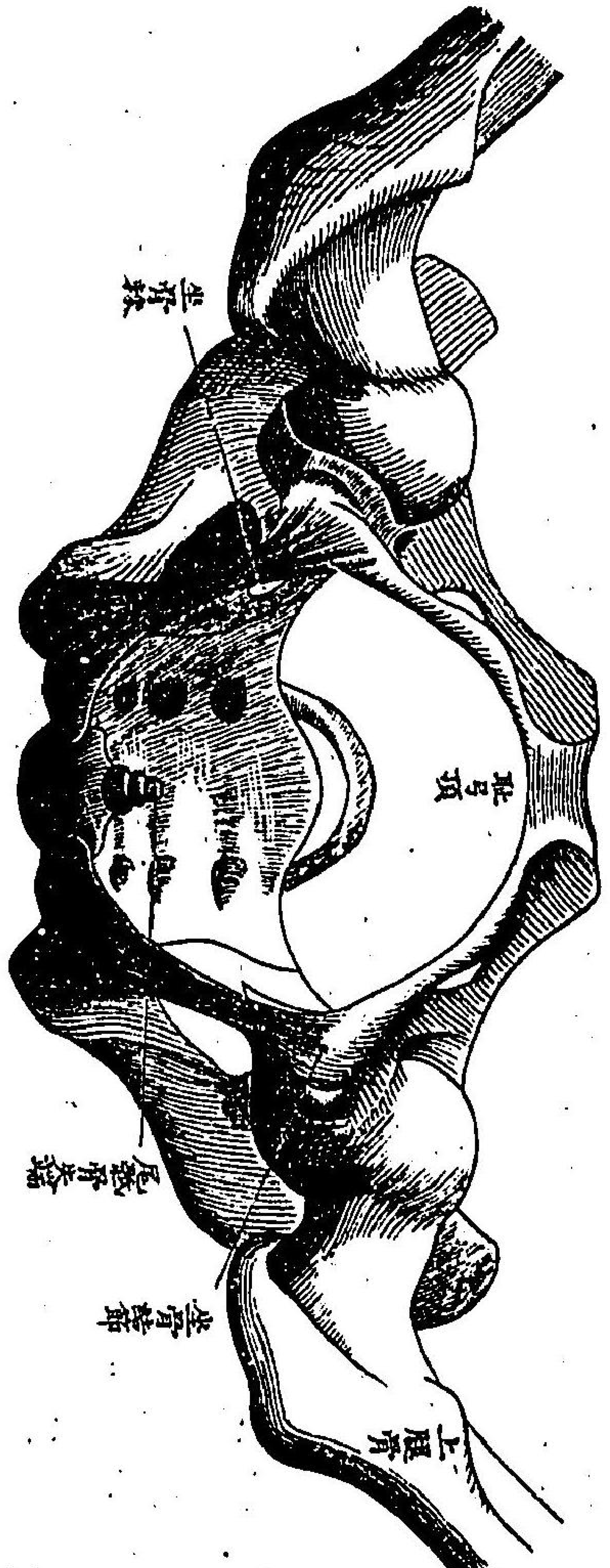
小骨盤は薦骨、尾骶骨、坐骨、恥骨、腸骨體および坐骨薦骨靭帶を以て圍まれ分娩時に方り大關係あり故に通常骨盤といへば則ち小骨盤のことなりと知るべし而して其廣狹、形狀は上方より下方に至るまで同じからざるが故に更に分つて上口、内腔および下口の三部とす

● 骨盤上口は則ち大小骨盤の境界に當る處にして最も緊

要なる部とす如何となればこれを一目して以て骨盤全體の有様を大畧判斷し得べければなり其形ち平常の骨盤に於ては殆ど圓形なれども後は薦骨岬に由て凹み前は恥骨縫際に於て稍尖るが故に其實は榊順次郎氏が形容せし如く炎葉の形ちをなすものなり而して其縦徑は薦骨岬の中央より恥骨縫際の上線に至るまでの距離にしてこれを眞結合線と名け長さ大約三寸六分(十一センチメーテル)横徑は左右無名線の最も相隔たりたる距離にして長さ三寸九分(十二センチメーテル弱)斜徑は一方の薦腸縫際より他方の恥骨腸骨癒合点に至るまでの距離にして四寸一分(十二センチメーテル半)とす而して此斜徑には左右の別あり右の斜徑は右の薦腸縫際と左の恥骨腸骨癒合点との距離にして一名第一斜徑といふ左の斜徑は此反對にして一名第二斜徑といふ

●骨盤腔は上口より下口に至るまでの腔にして其廣さ上下一様ならず上の廣き處を骨盤濶といひ下の狹き處を骨盤峽といふ骨盤濶の縦徑は第二および第三の薦骨椎の癒合部より

第七圖



婦人の骨盤を下方より見其下口を示したるもの

耻骨縫際の中央に至るまでの距離にして長さ三寸七分餘(十一センチメートル半)横徑は縦徑の中点を横ぎりて左右の髀臼壁に至る距離にして三寸五分(十センチメートル半)とす　斜徑は其兩端軟部にあるが故に固より一定せずといへども常に右縦横の二徑よりも長し　○骨盤峽は耻弓頂と坐骨棘と薦骨の尖端とを以て圍まれ骨盤管中最も狹き處なり

●骨盤下口は耻弓と坐骨結節と尾骶骨の尖端とを以て圍まれ　縦徑は尾骶骨の尖端より耻弓頂に至るの距離にして長さ三寸(九センチメートル)なれども分娩の際尾骶骨の後方に退くときは尚六七分延長することを得べし　横徑は左右の坐骨結節の距離にして三寸五分餘(十センチメートル半餘)とす而して其斜徑の一定せざることは猶骨盤濶に於るが如し

小骨盤の四壁は前後左右に於て其長短大に異なり前壁は側壁より短く側壁はまた後壁よりも短し

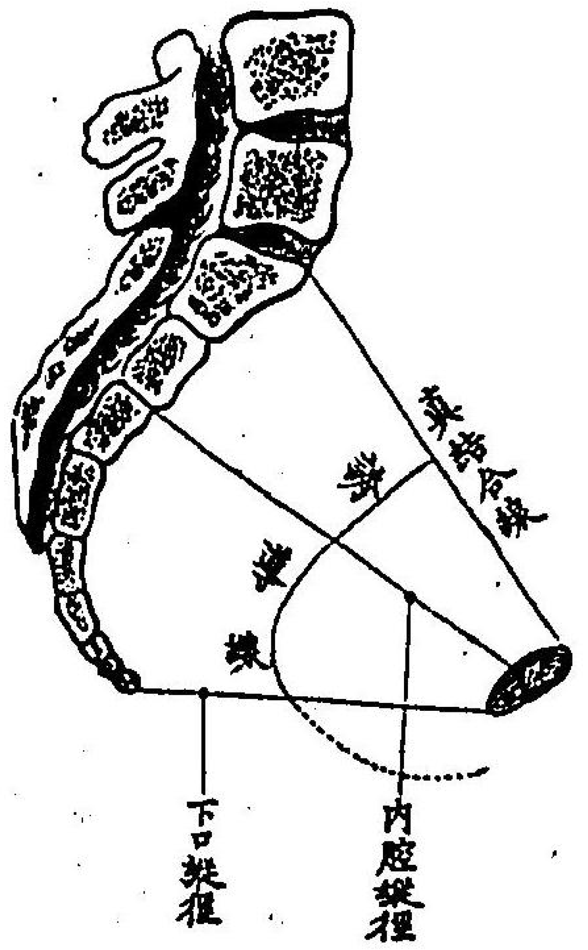
小骨盤の前壁は則ち耻骨縫際にして其上縁より下縁に至るまで僅に一寸二分に過ぎざれども左右の側壁は腸骨の無名線より坐骨結節に至り殆ど三寸にして前壁に倍し後壁は薦骨岬より尾骶骨の尖端に至り四寸三分にして殆ど四倍せり

骨盤傾斜および骨盤軸

骨盤の方向は全身長軸の方向を外れて前方に傾くのみならず骨盤腔自らもまた直ならずして前方に彎曲す

骨盤の方向は頭部より足に直行せる全身長軸の方向を外れて前方に傾けり此傾を名けて骨盤傾斜といふこれに依て人の直立せる時骨盤の上口は直に上方に向はずして著しく前方に向ひ從ふて薦骨岬は恥骨縫際より高く前壁は後壁よりも低し故に胎兒の骨盤を通過する際には其前方に向ふ部分は後方に向ふ部分よりも常に下方に在るものと知るべしまた骨盤腔自らも上口より下口に直行せずして前方に彎曲せり即ち前に記したる眞結合線の中点より骨盤內腔の中点を貫きて下口の中央に通過する所の

第八圖



骨盤の左半分を右側より見諸縱徑および誘導線の方向を示したる者

一曲線は則ち其彎曲の形を示したるものにしてこれを骨盤軸といひまた骨盤の誘導線ともいふ胎兒の骨盤を通過するにも產婆の手を骨盤內に送入するにも皆此線の方向に據らざるべからず

大小骨盤壁の內外面を皆軟部を以て覆ふ而して只上口の腹腔に連る處と下口の肛門陰門および尿道口を以て外方に開く處を除くの外其骨壁に在る所の諸孔隙も悉く此軟部殊に筋肉を以て閉鎖せらるゝものなり

○第三章　婦人の生殖器

生殖器とは人類の蕃殖を掌る器關にして婦人に於ては其位置を骨盤の內外に占むるが故に分つて外生殖器と內生殖器とに

(甲)外生殖器一名外陰部

外生殖器は則ち骨盤外に在るものにして更に分つて乳房と耻部とす

(一)乳房　は胸壁の前側に在りて產後乳汁を製造すべき乳腺許多の脂肪に包まれて左右一對の半球形を呈するものなり

乳房の中央に在る所の圓き斑點を　乳暈　といふ處女に於ては

欠

MISSING

●會陰は陰唇繋帶より肛門に至るまでの軟部にして甚だ延長し得べき生質を具へ其皮膚の下には皺層の筋肉あり

●小陰唇一名內陰唇は皮膚の皺襞にして大陰唇の內側にあり常にこれに由て掩はるれども既に子を擧けし婦人に在てはまた間間其間より突出す其形ち大陰唇より小にして且薄し前端は、內外二葉の小皺襞に分れ外方にあるものは挺孔の包皮を作り內方にあるものは挺孔繋帶を作る

●挺孔は小陰唇前端の二葉の皺襞間に位せる小隆起物にして感覺鋭敏これに觸れば勃起すべし但し其皺襞の挺孔包皮となりまた挺孔繋帶となること前に既に記載せるが如し

●尿道口は挺孔の後方四五分の處にあり厚き環狀の緣を備へるが故に指頭を以て容易に其所在を觸知し得べし

●膣口は膣の入口なり尿道口の稍後方に在り処女に於ては輪状若くは半月状の粘膜皺襞を以て其大部を閉鎖す此皺襞を「処女膜」といふ最初の交接に由て三四の小片に綻裂するを常とすれども又他の原因によりて破るゝことあり故に此膜の欠損を以てのみ其破瓜と否を判断すべからす

〔乙〕内生殖器一名内陰部

内生殖器は則ち骨盤内に在る所の膣、子宮、輸卵管および卵巣是なり

〔一〕膣は其性延長すべき膜様の管なり膣口より始まり骨盤誘導線の方向に従ふて前方に彎曲し尿道と直腸との間を上行して子宮に達す其長さ大約三寸とす

膣は其入口に於て最も狭く上部に至り漸く広し而して其最上部の広き処を穹窿部と名く此部には子宮の下端栓状をなして挺出するが故にこれに由て穹窿部と前後左右の四部に区別す○膣壁の内面は則ち粘膜にして処女に於ては前後の二壁に許多の横襞あるが故に凹凸不平なれども既に子を挙けし婦人に於ては其横襞弛緩消失して殆ど平滑なり

〔二〕子宮は一個の堅き肉質器なり骨盤の誘導線中に於て膀胱と直腸との間にあり其形ち茶筅を倒にしたるが如くにして且稍扁平なり長さ大約二寸六分上部は大にして下部は小なり前面は平坦にして後面は稍凸隆す上部の最も広き処を子宮底といふ其幅大約

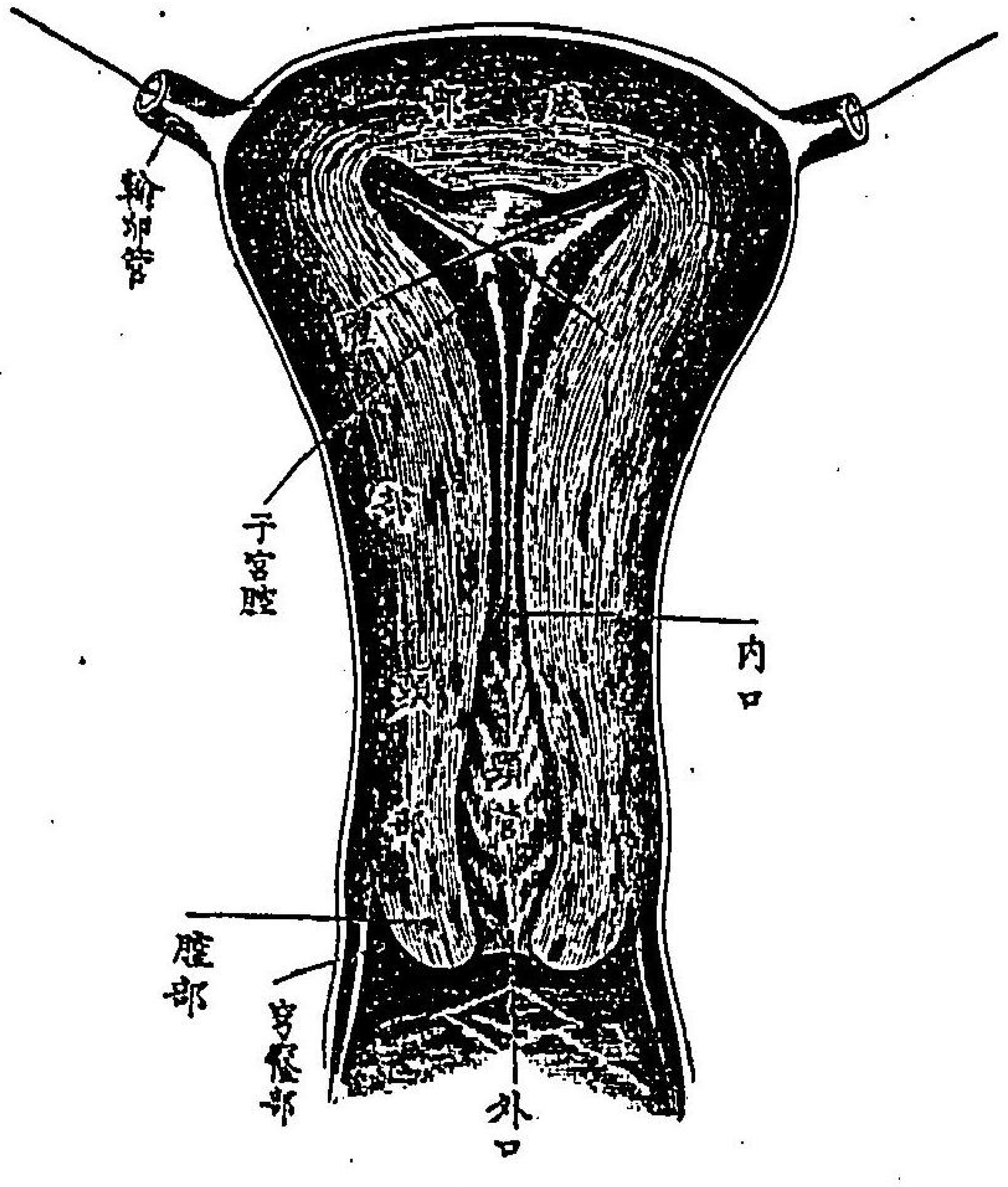
一寸六分下部の小にして圓柱形なる處を子宮頸といひ頸と底との間を子宮體といふ體の內にも子宮腔あり頸の內にも頸管あり底と體とも腹膜を以て被はれ兩側に廣靭帶あり前方に圓靭帶あり以て子宮の位置を維持す

●子宮頸の下半分は栓狀をなして膣の穹窿部に挺出すこれを子宮膣部といふ(第十圖および第十一圖を見よ)處女に於ては稍扁平にして滑かなり其下端には橫に裂けたるが如き孔あり子宮外口といふまた單に子宮口ともいふ外口の前後に二唇あり前唇といひ後唇といふ前唇は後唇よりも長くして厚し然れども已に分娩したる婦人に於ては膣部滑かならずして且多少肥大し唇は瘢痕の爲

に凹凸不平となるが故に外口の形ちもまた從ふて不正なり

●子宮體の內に扁平の一腔あり子宮腔と名く形ち三角にして其基底は子宮底に向ふ其左右の二隅に小孔あり輸卵管に通す輸卵管口といふ下隅は體と頸との界にありこれを子宮內口といふ而して頸管に通

第十圖



處女の子宮を前後に縱斷して其後の半分を示したる者

す　頸管は頸の内にある所の一條の管にして中央に於ては廣く上下兩端に於ては狹し此上下兩端の狹き處は則ち内口および外口なり○子宮腔および頸管の裏面は粘膜を以て覆はるゝも健全の子宮に於ては其製出する粘液の量甚だ少にして只腔管を滋潤するに過ぎず故に子宮腔の前後二壁は常に相附接するものなりまた月經時には子宮腔の粘膜腫脹充血して腔内に血液を漏し所謂經血となりて體外に排泄せらる

● **廣靭帶**は元來腹膜の廣き皺襞にして子宮の左右に於て其兩側に附着し以て緩かに子宮を骨盤腔の中央に維持するものなり即ち前腹壁の内面を被ふ所の腹膜は下方に延びて骨盤の前壁と膀胱とを被ひ膀胱の後壁より轉して子宮の前面に移り其底部を越へて後面に至り下りて膣の後壁の上部に達し更に其方向を轉じ上行して以て直腸および骨盤後壁を被ふ（第十一圖および第十二圖を見よ）而して其子宮の前後兩面を被ふ所の腹膜は子宮の兩側に於て相密着して廣き皺襞となれり即ち廣靭帶是なり故に此廣靭帶は前後の二葉より成れり而して其上縁は輸卵管を包み後葉はまた卵巣を包めり

● **圓靭帶**は左右一對にして圓き肉質の線條なり子宮底部の兩側より起り斜に前外方に走り腹壁を穿つて陰阜の内に終る

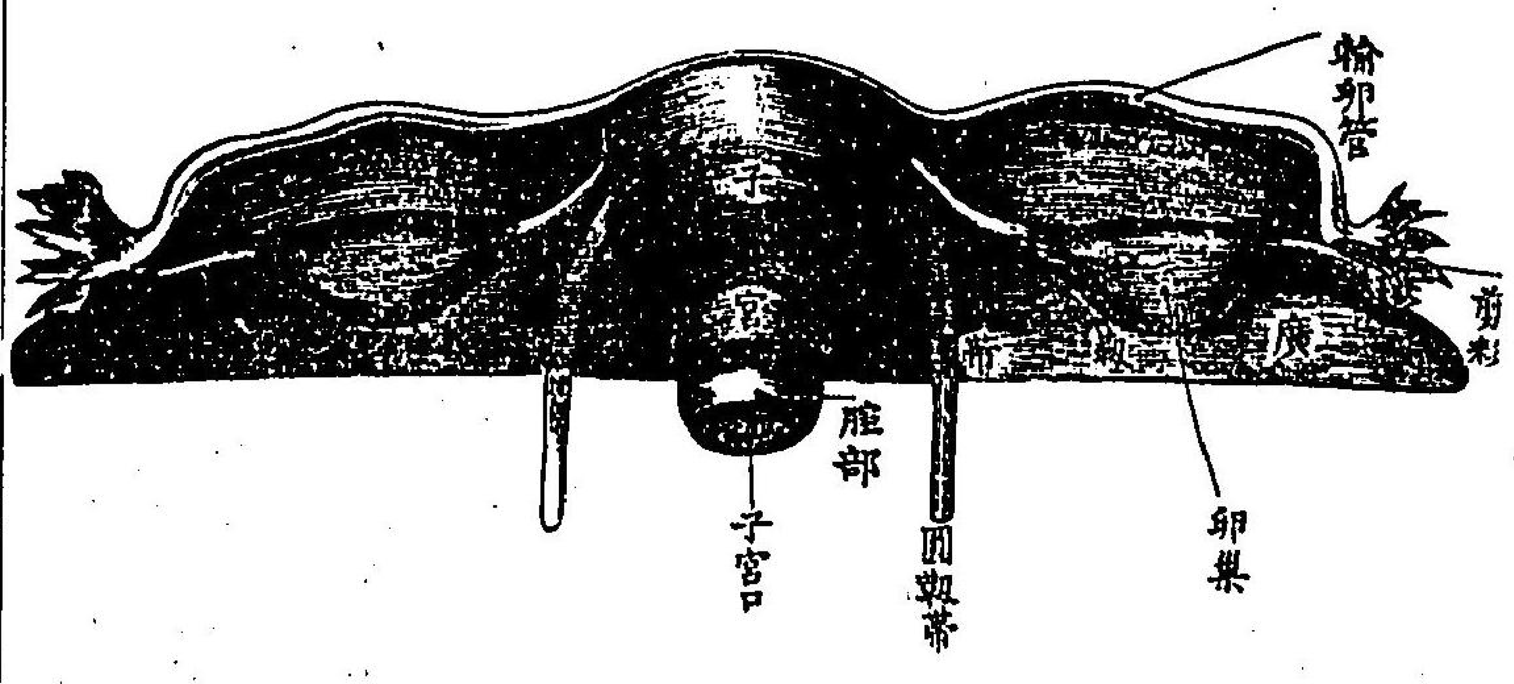
其他子宮は尙其頸部に於て膣の穹隆部と膀胱とに附着しまた以て其位置を維持す

〔三〕**輸卵管**　一名喇叭管といふ是子宮底の兩側より起り廣靭帶の上縁に沿ふて外方に走る所の左右一對の膜樣管なり内端を輸卵管口を以て子宮腔に通し外

端も腹腔に開く長さ大約三寸大さ箸の如し、

喇叭管ハ男子の精液を卵子に向ふて運びまた卵子と子宮内よ送るの用をなすものにして其裏面ハ粘膜を以て被ハれ管の廣さは部位よ從ふて一様ならず即ち其子宮腔に開く處最も狹く中央部において

第十一圖



處女の子宮たよび其附屬物を後より見たるもの

は最も廣く外端の腹腔よ開く處は喇叭狀よ擴がり且其末端は剪彩の形をなす故に此處を喇叭管の剪彩といふ

〔四〕卵巣 も一對の器にして子宮の兩側に相對し喇叭管の稍後下方に在りて廣靭帶の後葉ゐ包まる其形および大さとも扁桃の如く内よ無數の小胞を含めり

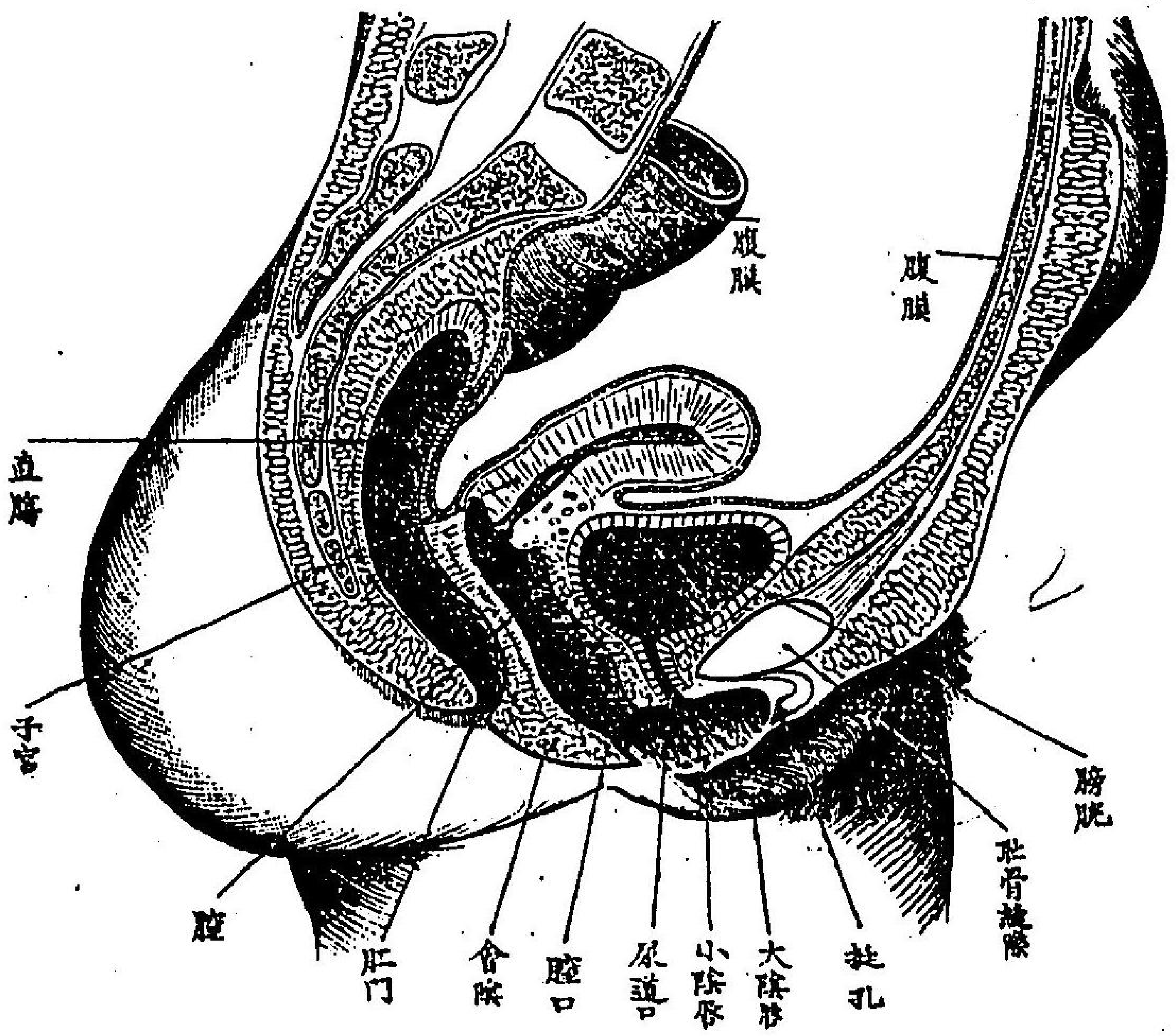
卵巣内含む所の小胞は其大さ甚だ不同よして小なるものは眼よて視るべからざれども大なるものは殆ど豌豆に比すべし胞内よは各各一個の卵子を含み罕に其二個を含むことあり而して此小胞は其熟するに從ふて漸く增大し增大するに從ふて其壁益〻薄くなり遂よ破裂して含む所の卵子を腹腔よ出す此機能を名けて排卵機といふ而して其胞外に出たる卵子は罌粟子より尙小にして腹腔より剪

彩に受けられて喇叭管に入りこれを通過して以て子宮に到る○卵子若し此通路に於て男子の精液に會ふて胚胎すれバ則ち漸々發育して以て後來人體に化すべきものなれども然らざれバ直に其生活を失ふものとす○排卵機は生殖器の成熟せる時即ち春氣發動期を以て始まり生殖器の衰へる時機を以て終り即ち月經と始終を共にするものとす大約十四歳にして始まり四十五六歳にして終り其間平均三十年なり然れどもまた十一二歳を以て始まり五十以上に至るも尚終らざるもの尠からず而して其間妊娠および授乳時を除くの外病あるにあらざれバ月經の閉止することなし

〔附言〕骨盤内にも生殖器の他尚膀胱尿道および直腸あり共に産婆に於て緊要なり宜しく其大概を知らざるべからず

〔一〕膀胱は三口を備へたる膜様の嚢なり恥骨縫際の直後にあり空虚なるときは小骨盤内に潜めども尿の滿つるときは顯はれて小腹部に出づ其後下部に二口あり是左右の輸尿管より尿を受

第二十圖



婦人骨盤の左半分を其軟部と共に右方より見たるもの

くる處なり前下方は漏斗の如く狭くなりて尿道に移る

〔二〕尿道　は膜様の管にして大さ小筆の軸の如し膀胱より起りて恥骨縫際の後を走り膣の前壁に附着して稍前方に彎曲し陰門に於て膣口の前方に在る所の尿道口に開けり

〔三〕直腸　は子宮および膣の後にあり骨盤後壁に沿ふて前方に彎曲し其端を肛門に開けり

尿道および直腸は猶膣子宮等の如く共に前方に彎曲するが故に若し導尿管或は灌腸器等を挿入するときはかならず先器械の方向を後方に向け而して後これを前上方に轉すべし決して最初より其方向を上方に取るべからず

前編巻の一終

産婆學前編巻の二

平常妊娠および妊婦の養生

〇第一章　妊娠の概畧

妊娠とは卵の胚胎して母の體内に宿る間をいふものにして受胎に始まり分娩期に至りて終る其間平均四十週即ち二百八十日とす

胚胎とは交接に由て婦人の生殖器内に入りたる男子の精液と卵巣より出でたる卵と相合体するをいふ斯く合体すれば婦人は則ち受胎す而して卵の胚胎する處は通常喇叭管若くは卵巣の近傍にして

子宮内に於てすること罕なり蓋し其胚胎ハ何れの處に於てずるとも卵ハかならず子宮内に於て發育するを常とす○妊娠の持續を二百八十日と定めしハ則ち最終月經を見し日より起算して分娩に至るまでの日子と平均せし數にして決して一定の數にあらず故に間前後一二週間の差異あること敢て怪むに足らざるのみならず罕に倘前後三十日餘の差異あることこれなり然れども通常二百八十日とすれバ大なる差ひなし而してまた便利の爲め二百八十日たる四十週間を十期に分ち二十八日たる四週間を以て一期となしこれと妊娠の一箇月とす彼の舊歴の一箇月を以て妊娠の一箇月とし其十箇月を以て妊娠の全持續とするが如きハ抑誤れり大陰歴の一箇月ハ則ち二十九日乃至三十日なるが故に其十箇月ハ則ち二百九十五日にして妊娠の平均日數より多きこと恰も十五日なりとす

平常妊娠とは則ち子宮に宿りたる所の卵の發育にもまた其母體にも共に些少の障害なきものをいひ其單胎と複胎とに拘らず

子宮内に宿る所の胎兒一個なるときハこれを單胎といひ二個以上を複胎といふ複胎にして二個なるときハ孖胎一名雙胎といひ三個を品胎といひ四個を要胎といふ蓋し五個以上のものハいまだ曾てこれあらず而して其單胎たり複胎たるに關せず胎兒および其附屬物たる卵膜、胎盤等の發育に障害なくまた妊婦の精神および身體の健康に關して異變なきときハ共に平常の妊娠とす

母體は妊娠中卵を養ふに適すべく月滿ればこれを産むに應ずべき變化を起すものなり卵もまた其罌粟

子の如きものより化して完全の人體となるまでには固より種々の變化を經ざるべからず次章に於てこれを詳かにす

○第二章　妊娠中母體に於る變化

婦人孕めば直に其全身および生殖器に變化を起すものとす左にこれを甲乙の二段に分ち順次記載すべし

〔甲〕全身に於る變化

全身の變化は甚だ不定にして豫めしがたし多くは妊娠の初期に起り三四箇月の後に至れば自ら去るを常とすれども罕には全經過中持續することあり或はまたゞ末期に至りて始めて來ることあり

全身の變化はおもに精神、神經、消食器、血行器、泌尿器、皮膚等に於て其作用の常ならざるより起るものなり即ち平素愉快なる質の人も精神鬱々として樂まず泣き悲むことあり怒り罵ることあり或は反て平素よりも愉快活潑になることあり其他齒痛、頭痛、腰痛、眩暈、衂血、寒熱往來、心悸亢進、惡心、嘔吐、流涎、便秘等あり就中著しきものは惡心嘔吐にして殊に毎朝空腹の時に於て水の如き物を吐くこと多しこれを惡阻といふ其他また平素好める食物を嫌ひ反て慣れざるものを好み時として壁土、線香、木炭等の如き異物を食することあり以上の變化多くは妊娠の初期に來り三四箇月にして自ら去るを常とすまた尿意頻數或は時に咳嗽、噴嚏、屈身等の際尿失禁することあり皮

膚に發すべき變化は則ち輕度の浮腫、顏面および胸部等の褐色斑、腹部中線の着色、下肢靜脈の怒張、腹壁、乳房上腿等の皮膚に妊娠線と名くる許多の赤色線を呈する等是なり筋肉および脂肪は腹壁、腰部、臀部、上腿等に於ては平素よりも強く發育すれども上肢、頸部および顏面等は時として痩ることあり

然れども妊娠は固より病にあらざるが故に斯る變化を發したればとてこれが爲妊婦の健康を害すべきものにあらざるまたかならずしも人毎にこれを發すべきものにもあらざる時としては全經過中毫に違和を覺へざるのみならず或は平素よりも反て營養進み身體強壯となり精神もまた愉快活潑となることも尠からず

〔乙〕生殖器に於る變化

生殖器の變化もおもに其實質の增殖增大すること其部に充血することにあり實質の增殖增大するが爲に器壁肥厚し從ふて其形狀を變すまた血管の擴張增殖して充血するが爲に器壁暗赤色を呈し溫度高まり粘液增し器質弛緩して大に柔軟となる而して其變化も子宮に於て最も強く且全身の變化に反し月を重ぬるに從ふて益〻著し

●乳房は妊娠二箇月の頃より漸〻腫大し四五箇月に至れば益〻著しく且乳頭突出し乳暈黑く染みて輪狀に併列せる十數個の小結節を生す試みに乳房を搾れば乳頭より薄き液を漏すべしこれを初乳と名く透明にして水の如くなれども間〻黄點を混することとあり

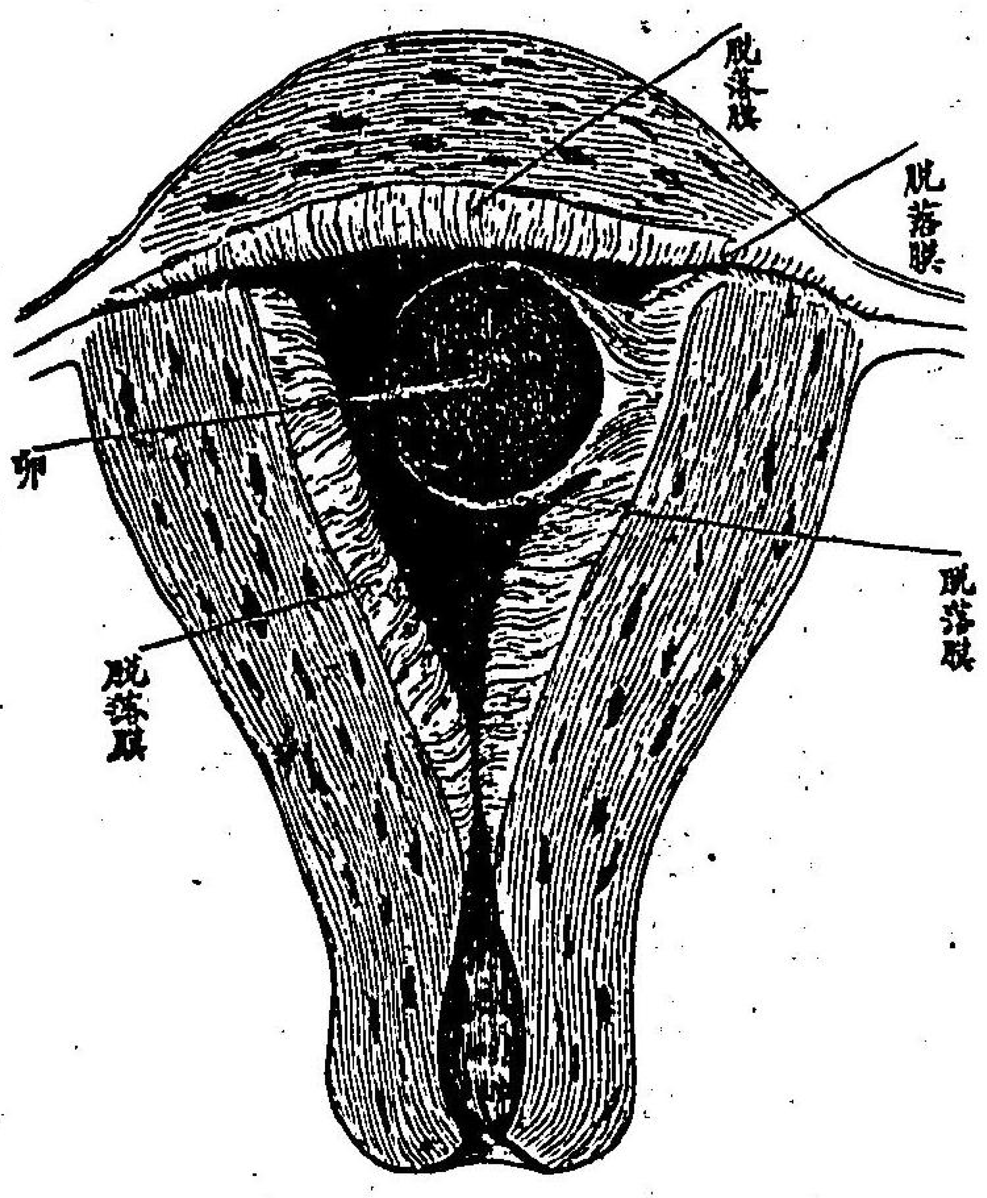
●外陰部および膣に於てハ陰唇稍ゝ浮腫し靜脉擴張し膣ハ廣くして長く且軟かにして紫色を呈し温度高まり粘液増す

●子宮 ハ變化の最も著しき處にして先づ其粘膜増殖して凹凸不平となり厚く軟かにして大に血管に富めり而して斯く増殖肥厚せし粘膜ハ分娩の際子宮壁より脱離して卵と共に出るを以て名けて脱落膜 といふまた其表面に無數の小孔を呈し一目恰も篩を觀るが如くなるを以て篩狀膜ともいふ此膜ハ則ち卵を子宮に停めまたこれを養ふの用をなすものなり抑胚胎せし卵の子宮内に停まるや先づ此軟かなる脱落膜の凹凸不平の間に挾まるものとす而して後脱落膜ハ急に其周圍より増生延長して以て卵を包み圍むこと猶手の物を掴むが如し次に卵の表面に絨毛と名ける無數の毛の如きものを生しこれを以て卵ハ脱落膜の實質内に挾まること恰も樹の

根の地中に入るが如し

これに由て初て母體と卵との結合成り此に據て卵ハ其血液に富みたる脱落膜より營養分を取り以て漸く發育することまた樹の根の地より水を引きて成長するに異ならず○妊娠中子宮に於る變化ハ只其粘膜の右の如く肥厚するのみならず血管、淋巴管および筋繊維もまた非常に増殖肥大するが故に子宮の全壁甚しく發育し平素ハ其

第十三圖



脱落膜に包まれたる妊娠第三週の末に於る卵の自然大

厚さ僅に三分餘重さ八匁に過ぎざりしもの分娩後直にこれを測れば其底部に於て厚さ殆ど一寸（三センチメートル弱）にして重さ百八十匁（七百五十グラム）に至る而して此非常なる増大はおもに筋纖維の發育に由來するが故に分娩時に方り其收縮力の强大なることもまた敢て怪むに足らざるなり〇子宮は斯く増大するに隨ひまた其位置および形狀を變するものなり即ち妊娠三箇月以後に至れば子宮膣部漸々後上方に轉じて骨盤の後壁に近づき外口は後方に向ひ體は前方に傾くものなりまた子宮の形は三箇月以後に至れば變じて球の如く七箇月以後には更に變じて鷄卵の如し其他子宮口は圓形に變じ子宮膣部は漸々軟かく且つ短かくなり初妊の人に在りては妊娠の末期に至れば既に膣內に突出せずして殆ど平坦となるに至る然れども嘗て子を擧けたる經妊婦の子宮膣部は大にして其縮むこともまた斯の如く著しからず或は分娩期に至るも尚栓狀をなすことあり其子宮口もまた依然として不正の舊形を存することも多し且其脣は前卷第二章に述べたるが如く凹凸不平にして妊娠四五箇月に至れば外口已に開き產前三四十日の頃に至れば頸管內口共に開き以て指を挿入して卵膜に達し兒體を觸るゝことを得べし

妊娠中は排卵の機能中止するを以て月經の閉止すると常とすれどもまた時に依然月經來ることあり然れども甚だ罕なることにして固より例外とす且其出血多くは不順なるが故に決して眞の月經にはあらざるべし

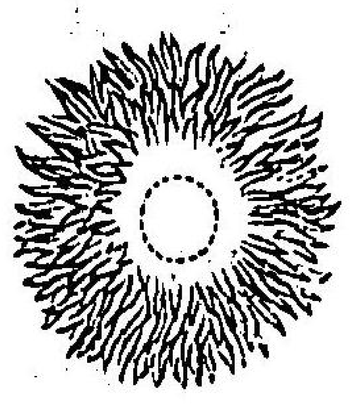
○第三章　卵の變化

卵の胚胎するや須臾にして卵膜、羊水および胎兒の三

者ゑ分る而して妊娠二箇月の末若くは三箇月の初ゑ至ればまた胎盤と臍帯とを生し以て速かゑ成長そ

卵の胚胎して子宮腔内ゑ入り其脫落膜に包み圍まるゝや須臾にして嚢の如き内外二層の卵膜と羊水と胎兒とに分る外層の卵膜を外卵膜といふ其表面に無數の絨毛を生するを以て其外形ハ恰も栗の毬の如くまた覆盆子の如し故に外卵膜を名けてまた絨毛膜ともいゑ絨毛膜を剝げバ内ゑまた一層の嚢あり羊膜といふ羊膜の内ゑ水滿てり羊水といふ水中に浮ぶものあり其形ち蟻の如し是即ち胎兒なり而して卵ハ妊娠の最初に於てハ外卵膜の絨毛ゑ由て子宮粘膜即ち脫落膜より其營養分を取ることを已ゑ前

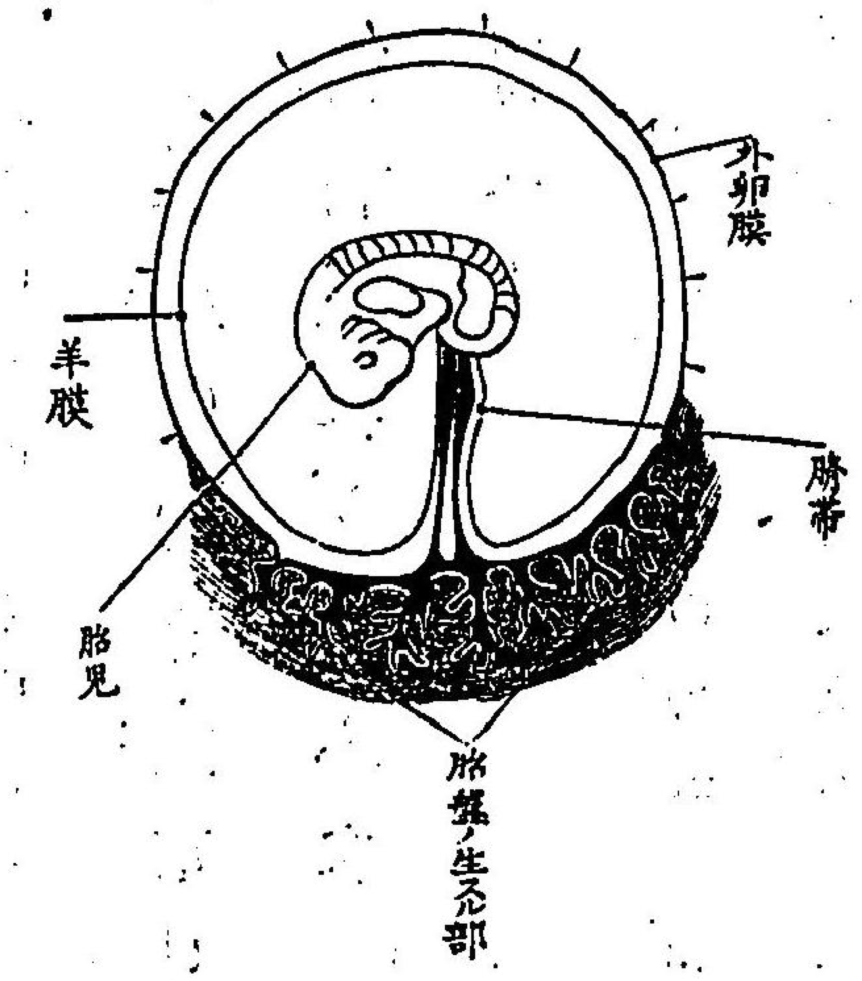
第十四圖



妊娠の最初期ゑ於て外卵膜の全面に絨毛を生したる卵

章に述べしが如し已にして妊娠二箇月の末ゑ至れバ絨毛漸々消失して外卵膜の大部ハ殆ど平滑となれども其一小部に於る絨毛ハ反て盛に發育して深く脫落膜中に入り且其部の脫落膜もまた頻に增殖し二者相合して以て所謂胎盤を造成す此時に方りまた胎兒の腹より出でゝ胎盤に附着する所の一條の紐を生すこれを臍帶といふ臍帶の內ゑハ大なる血管あり胎兒より出でゝ胎盤に入り其絨毛の中に潛り毛細管に小分すこれ

第十五圖



妊娠第二箇月の末ゑ於ける卵を縦斷せし想像圖

に由て胎兒ハ更に母體より營養分を取り以て速かに成長するものとす此故に卵ハ妊娠二箇月の末若くハ三箇月の初より以後ハ則ち卵膜、胎盤、臍帶、羊水およひ胎兒の五部より成るものとす

〔二〕卵膜　は口のなき二層の薄き嚢なり妊娠の末期に至れば二層互に相密着すれどもふたゝび容易にこれを剝ぎ離すことを得べし

卵膜の外層を　外　卵　膜　といふ卵の外表に在り其已に成熟して出產せし卵に在てハ全く平滑なれども外面の處〳〵ハ尚斷續せる脫落膜附着す○卵膜の內層ハ即ち　羊　膜　なり時として此內外二層の間若くハ外卵膜と脫落膜との間に多少水の溜ることありこれを仮羊水といふ是產前若くハ產時に方りて子宮外に漏るゝが

故に或ハ誤て破水と認ることあり注意すへし

〔三〕胎盤　は其質疎にして海綿の如く形ち扁平にして或は圓く或は稍ゝ長形なり其外面即ち子宮に附着せし面は凹凸不平なれども胎兒に向へる內面ハ羊膜に被はれて平滑なり而して臍帶の附着部より周緣に向ひ許多の血管蜒走せるを以て內面より見るときは其狀恰も蓮の葉の如し

胎盤ハ卵の子宮內に入りて最初附着せし所の部位に生するものなり即ち妊娠三箇月の初に至り其部の粘膜と其粘膜內に嵌入せる絨毛との盛なる增殖に由てこれを造成すること大畧前項に述べたるが如し尋で漸〳〵增大し其已に成熟せし卵に在てハ重さ平均百三十

匁(五百ガラム)幅五六寸(十五乃至二十センチメートル)をなり厚さハ中央に於て七八分(二三センチメートル)なれども周縁に至るに隨ふて漸く薄し而して胎盤の子宮内において占むる所の部位ハ前後左右一定せざれども其下縁ハ大抵子宮内口の上方一寸五分乃至三寸の處に達するを常とす○胎盤ハ胎兒の營養發育に關し最も緊要なる器械にして其作用ハ猶吾人の呼吸器および消食器に於るが如し胎兒これに依て其營養分を取りまた其老廢物を排泄す即ち胎兒の腹より出でゝ臍帶の内を走る所の所謂臍帶動脈の暗赤色なる血液ハ胎盤に入りて毛細管に分流し此に循り流るゝ所の母の血液より酸素ならびに其他の營養分を取りまた老廢物を去り更に新鮮活潑なる鮮紅色の血液に變じ臍帶靜脈に集りて胎兒に還り以てこれを養ふ者とす

〔三〕臍帶ハ其形ち糾へる繩の如し大さ示指に比すべく長さ大約一尺六寸(四十八センチメートル)胎兒の臍より出でゝ胎盤の内面に附着す

臍帶ハ三條の血管と膠樣質と臍帶鞘より成れり三條の血管とハ則ち二條の臍帶動脈と一條の臍帶靜脈是なり動脈ハ血液を胎兒より胎盤に輸るものにして搏動を呈し靜脈ハ胎盤より血液を集めて胎兒に還るものにして搏動せず而して此三條の血管ハ膠樣質に由て結束せられ更にまた薄き臍帶鞘を以て包まる臍帶鞘ハ元來羊膜の一部にして胎盤に於てハ羊膜に移り臍部に於てハ胎兒の皮膚に連れり但し臍帶の胎盤に附着する部位ハ大約其中央若くハ中央の近方に於るを常とすれどもまた時に其緣に附着することも尠からず而して臍帶の大小長短ハ人々に於て一樣ならず短きものハ一二寸に足らず長きものハ四五尺にいたるべし然れども通例胎兒の長けと

同一にして大約一尺六寸とす膠樣質の量にもまた異同あり此質に富むものハ臍帶肥へ乏しきものハ瘦す故にこれに富むものを肥大臍帶といひ乏しきものを瘦小臍帶といふまた一局處に膠樣質の堆く積み重りて以て瘤狀をなすことありこれを假結節といふ蓋し眞結節に對して然か名けし者なり而して其所謂眞結節とハ則ち臍帶の眞に結ばれしものにして偶ゝく胎兒の運動に由てかく成れるものとす○臍帶ハ胎兒の生存に須臾も缺くべからざる血液の往來する道路なり故に若しこれを壓迫して其往來を斷つこと五分時以上に至れバこれが爲に胎兒窒息して死すべきこと猶吾人の口と鎖し鼻と塞ぎて以て呼吸を斷てる時に於るが如し

以上卵膜胎盤および臍帶ハ共に胎兒の出産後に出づるを以てこれを總稱して娩隨といふ

〔四〕羊水 は羊膜の内に滿る所の液なり其量一定せざれども定規分娩時に至れば平均五合（一リーテル弱）とす

羊水ハ最初透明にして淸水の如くなれども妊娠五箇月以後に至れバ稍濁て一種の香を發し且末期に至りてハ豆腐の滓の如きもの點點混淆す是胎兒の皮膚に生せる胎脂と名けるものゝ剝げたるなりまた分娩時に方り時として黃色若くハ綠色に變して不快の臭氣を發することあり是羊水中に胎糞の混せしものにして胎兒將に危からんとするの兆なり

〔五〕胎兒 ハ妊娠八九週即ち三箇月の初より以後に至れば其臍帶を以て胎盤に聯絡する處を除くの外全く遊離して羊水中に在り而して序を逐て成長變化せ

る故に其變化の有樣を十期に分ち順次其要點を示さんこと左の如し

● 妊娠四週即ち一箇月の末に至れば卵の大さ鳩卵の如く胎兒の長け大約二分五厘八ミリメートル弱形ち蟻の如く頭部と軀幹との二胞より成り四肢いまだ生せず

● 二箇月の末には卵は鷄卵の大さにして胎兒の長け大約八分二センチメートル半に達し四肢已に生す

● 三箇月の末には卵は鵞卵の大さに至り胎兒の長け大約二寸六分八センチメートル重さ八匁三十グラム餘にして已に人間の形をなし手の指足の趾を生じ鼻、目、耳、口、具はる然れども尚男女を辨じ難し

● 四箇月の末に至れば胎兒の長け即ち顱頂部より踵部に至るまで大約五寸十五センチメートルにして已に男女を辨じ得べし

● 妊娠の中期即ち五箇月の末には胎兒の身の長け八寸二十四センチメートル其運動稍活潑にして妊婦初めて胎動を覺ゆるに至る但し經妊婦に在りては已に此一二週間以前よりこれを感ずること尠からずまた試みに耳を妊婦の小腹部に接すれば恰も時辰器の戞々と響くが如き音と聽き得べし是即ち胎兒の心音なり

● 六箇月の末には身の長け九寸六分二十九センチメートル皮膚深紅色を呈し初めて指頭に爪を生じ全身には毳毛と名ける軟かなる細毛を生ずまた皮下に初めて脂肪を生ずれども其量小なるが故に尚皮膚は皺襞あり此時に於て出産せし胎兒は稍吸氣をなし僅に手足を動かせども須臾にしてかならず死す

● 七箇月の末に至れば胎兒の身の長け一尺一寸三十三センチメートル半餘眼瞼開き皮膚赤色にして胎脂と名ける牛酪の如きものの全身に附着す

皮下脂肪尚不充分にして皮膚に皺襞あり此時に於て出産せし胎兒ハ悲き聲を出して啼き可なりに手足を動かせども尚生活すべき力なし假令看護法の宜きを得るも數時間若くハ一二日間にして死するを常とす故に妊娠二十八週以前に生れたる胎兒を名けて未成嬰、兒また未熟嬰兒といふ

●八箇月の末にハ身の長け一尺三寸四十センチメートル皮膚ハ尚赤くして痩せたり故に顔面に皺襞ありて容貌老人の如し此時において生れたる胎兒ハ看護其宜きを得るときハ或ハ生長し得べしといへども尚死する者多しとす故に此時より以後妊娠第三十八週即ち九箇月半に至るの間に生れたる胎兒を名けて可成嬰兒また早期嬰兒といふ

●妊娠九箇月の末に至れバ胎兒の長け一尺四寸五分四十四センチメートル皮

下の脂肪著しく發生せるを以て皺襞盡く消失して身體稍肥へ容貌已に愛すべし固より成熟嬰兒に比すれバ死すること甚だ多しといへども看護其宜きに適へバ成長するを常とす

●妊娠十箇月の末即ち臨月の末に生れし胎兒ハ總て成熟嬰兒の性質を備へたり但し産兒の已に成熟せるや將た尚未熟なるやを辨することは必要の事件たるを以て産婆たる者宜しくこれを辨別し得べき知識なかるべからず

○成熟嬰兒の概徴

成熟嬰兒は身の長け平均一尺六寸四十八センチメートル重さ七百五十匁二千八百五十グラム全身豐滿して皮肉堅實し皮膚淡赤色にして胎脂附着し毳毛殆ど消失して其殘り存する處

も只項背および肩胛部に過ぎず頭蓋も堅實にして各骨殆ど密着し頭髪五六分に延び鼻耳稍堅く爪も延びて指頭を越へ大陰唇は左右密接して小陰唇を隱し陰嚢内に睾丸己になり嬰兒若し健康なれば直に眼を開き高聲を發して叫び胎糞を下し尿を漏らし擁きて胸に接すれば呱々乳を求むる氣なり

以上は成熟嬰兒の概徴にして固より多少の異同は免れざる者なり身の長け一尺六寸は其平均數にして或はこれより稍長ドたるもあり長せざるもまたあるべし然れども其差異は甚僅にして體重に於るが如く著しからず爪の如きもまた手の指に於ては指頭を越ゆるを以て常とすれども足の趾に於ては然らざるもの甚だ多しまた大

陰唇の互に相接せずして其間に小陰唇の突出すること尠からず然れども總體に於て成熟嬰兒の性質を備へたるときは假令一二の徴候に於て缺くる所あるも聊妨げなし但し以上の諸徴候中最も注意すべきものは則ち身の長けおよび身の重さならびに頭蓋の性質にあり就中頭蓋の性質はこれに依りて啻に嬰兒の熟未熟を辨別するのみならず產床に臨んで胎兒の位置、體向等を診斷し以て豫め產の難易を判斷するにもまた緊要の部分なるが故に產婆たる者特に其性質に明かなることを要す

○成熟嬰兒の頭蓋

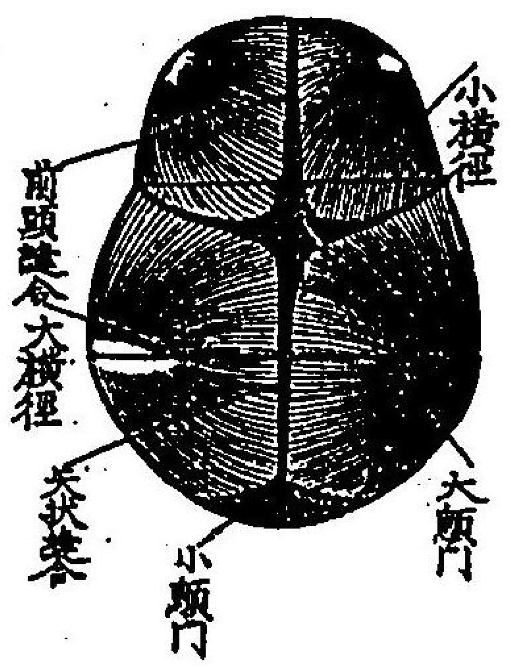
頭蓋は嬰兒の身體中其周圍最も大にして最も硬くまた分娩機轉に最も緊要の關係ある處にして左右の前

頭骨、左右の顱頂骨、左右の顳顬骨および一枚の後頭骨都合七枚の骨より成る而して以上の各骨いまだ癒着せず纔ヵに皮肉に由て相縫合し且其縫合の相會する處には只皮肉を以て覆はれたる顋門こ名くる空隙あり此に其縫合および顋門を枚擧すれば則ち左の如し

(一)前頭縫合 は左右前頭骨の間に在り鼻根より起り前額の中線を走りて大顋門に終る

(二)冠状縫合 は前頭骨と顱頂骨の間にあり左右の顳顬部より起り上行して大顋門に至る

第十六圖



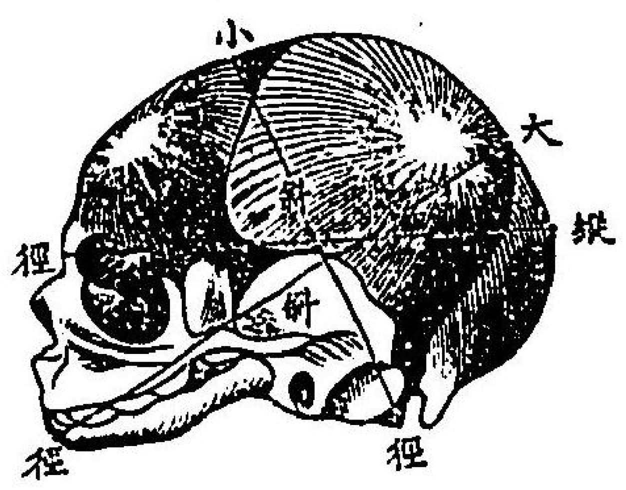
嬰兒の頭蓋を上方より見たるもの

(三)矢状縫合 は左右顱頂骨の間に在り大顋門より起りて小顋門に終る

(四)後頭縫合 は顱頂骨と後頭骨の間にあり一方の耳の後上方より起り上行して小顋門を越へまた下行して他方の耳の後上方に終りて所謂山形をなす而して其頂は則ち小顋門のある處なり

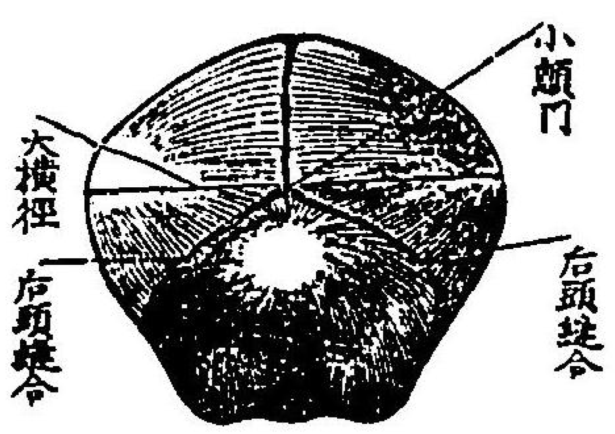
(五)大顋門 は前頭縫合と冠状縫合と矢状縫合との相會合せる

第十七圖



嬰兒の頭蓋を左方より見たるもの

第十八圖



嬰兒の頭蓋を後方より見たるもの

處にある大なる空隙にして形ち菱の如し而して其前頭縫合に移る所の隅角は最も長くして最も尖れり

〔六〕小顖門は矢状縫合と後頭縫合との間にある小空隙なれども指頭を以て皮上よりこれを按すれば觸るゝ處只一小窩たるに過ぎず

嬰兒の頭蓋は以上の縫合および顖門あるに由てこれを壓すれば各骨多少移動す故に分娩の際母の骨盤を通過する時に方り骨と骨と互に齟齬重疊し以て著しく小さくなることを得る者とす故に其各骨の縫合堅固ならずして移動し易き頭蓋は骨盤を通過することもまた從ふて容易なり

嬰兒の熟未熟を知るには頭蓋の大小ともまた測らざるべからず但

し成熟せる初生兒の頭蓋は左の諸点に於て左の大さある者とす

〔一〕縱徑は眉間より後頭骨の最も突出せる處に至るまでの距離にして大約三寸六分十一センチメーテルとす

〔二〕大横徑は左右顱頂骨の最も隔りたる處に於る距離にして長さ三寸九センチメーテルとす

〔三〕小横徑は左右顳顬部の距離にして長さ大約二寸六分八センチメーテルとす

〔四〕大斜徑は頤部より小顖門に至るの距離にして大約四寸三分十三センチメーテルとす

〔五〕小斜徑は項窩より大顖門の中央に至るの距離にして長さ三寸九センチメーテルとす

〔六〕頭蓋の周圍は眉間より左右の顱頂骨を廻りて後頭骨

に至る所の最も大なる周圍にして一尺一寸(三十三センチメートル)とす

○胎兒の位置、體向および體勢

胎兒の子宮内に在るや其有樣種ゝなりといへどもまた自ら一定の通則なるものなり而して仔細にこれを知らんと欲せばかならず先胎兒の位置、體向および體勢の三つのものを詳かにせざるべからす

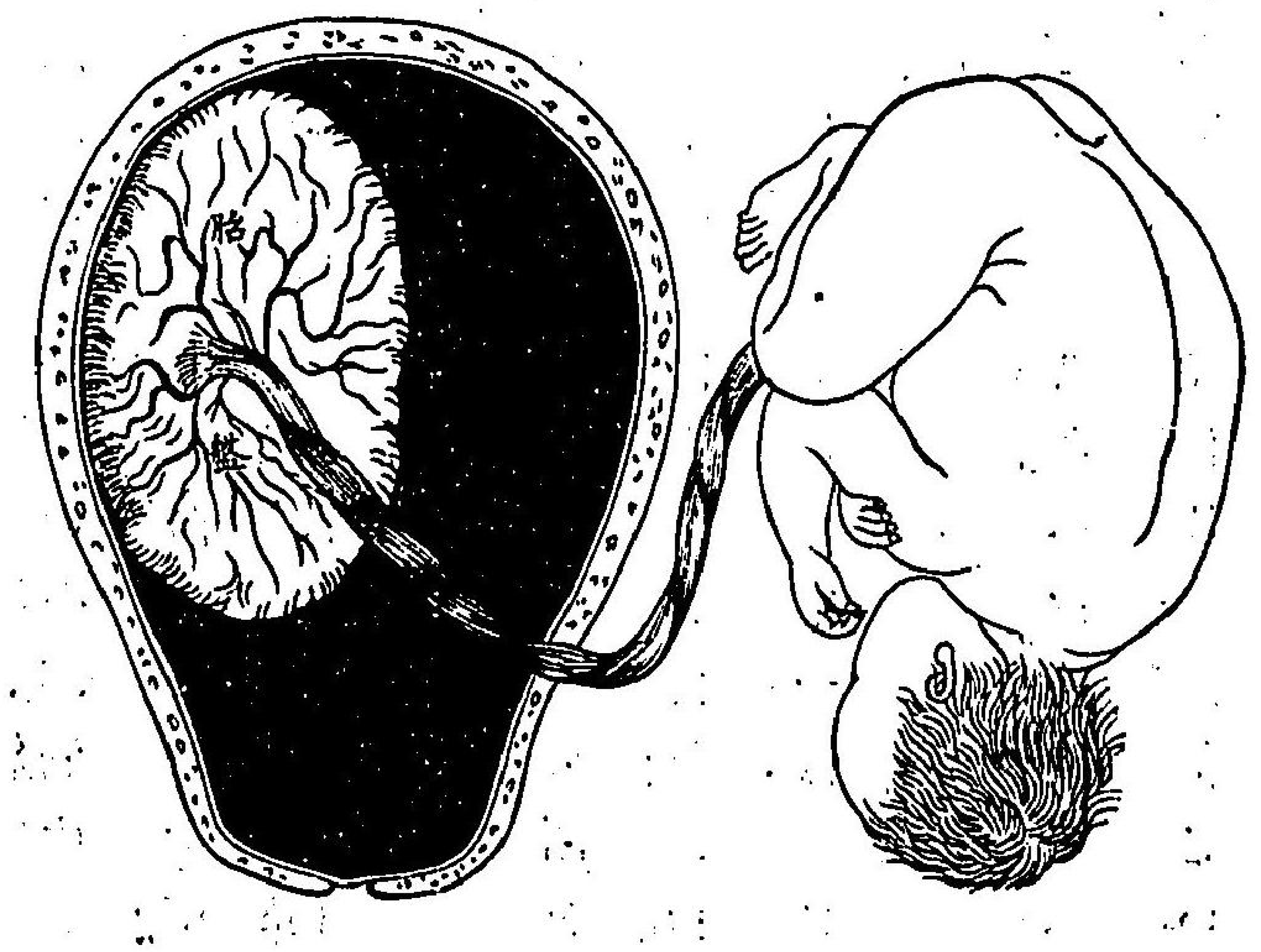
●胎兒の位置　とは則ち胎兒の長軸と子宮長軸との關係をいふものにして語を換へていへば即ち胎兒の子宮内にあるや其位縱なるや斜なるや將た横なるやといふ義なり通常其位置縱にして且兒頭下方に向ふものなれどもまた逆に其骨盤下方に向ふもの罕にこれあり而して兒頭の下方に向ふものを頭位といひ骨盤の下方に向ふものを骨盤位といふ然れども妊娠の全經過中かならずしも一定の位置を固占すべき者にあらずして時ゞこれを變ずるものなり啻に妊娠中然るのみならず罕には分娩時に至りて尚これを變ずることあり

●體向　とは則ち兒背の方向といふ者にして語を換へていへば則ち兒背は母體の左に向ふや右に向ふやまた前に向ふや後に向ふやといふ義なり而して其左に向ふものを第一體向といひ右に向ふものを第二體向といふ是故に若し兒頭下方に向ふて兒背左に向へばこれを頭位の第一體向といひ右に向へば頭位の第二體向といふべけれども通常これを畧して第一頭位第二頭位といふ

●體勢（一名體狀）とは則ち毫も母體に關することなく只胎兒各部の關係をいふものにして俗に所謂身搆なり即ち其位置、體向の如何に

拘らず胎兒はまた其頭部、四肢等を俯すこともあり仰ぐこともあり屈むることもあり伸ばすこともあるべし而して其或は俯し或は仰ぎ或は屈め或は伸ばすことを俗に所謂身構即ち體勢なり○體勢もまた固より種々なりといへども其平常なるものは則ち背を屈め頭を俯して頤を胸に近づけ肘を

第十九圖



胎兒平常の體勢を以て卵圓形をなし子宮もまた卵圓形をなしたる者

曲て上肢を胸に着け膝を折り股を屈めて下肢を腹に附するもの是なり而して其腹に於て上肢と下肢との間に餘す所の一空地は則ち臍帶の蜿まる處なり是故に胎兒の全形は殆ど卵圓形となり以て子宮腔の卵圓形に相適合す即ち子宮および子宮腔は前章に於て述べたるが如く妊娠五六箇月までは圓形なれども七箇月以後に至れば變じて卵圓形となり上部は廣くして下部は狹し胎兒の形もまた其臀部と足とを合したる一端は大にして頭部のみよりなる他の一端は小なり故に其大なる部分は上方に位し小なる部分は下方に位す是頭位の多き所以なり然れども胎兒の位置の時々變ずるが如く其體向および體勢もまた妊娠中變化常なきものなり但し妊娠の前半期に於ては子宮腔圓くして且充分の餘地あるを以て其變化もまた從ふて甚しといへども胎兒の發育するに從ひ漸々其餘地を縮め兼

てまた子宮腔および卵共に卵圓形に變じ胎兒の形もまたこれに適合するが故に妊娠の末期に至るに從ふて位置等の變化もまた漸く減す

○第四章　産婆の診察法

産婆の妊婦産婦および蓐婦に就て其身體の有樣ならびに子宮內外の變化を檢查する法を名けて産婆の診察法といふこれを外診および內診の二法に分つ

(一)外診　とは則ち耳目および手を以て外部より檢查するの法にしてこれに依て全身の形容ならびに乳房、腹部、子宮、胎兒の有樣および骨盤、外陰部、下肢の景況等を知るものとす

●全身の形容　に據りて其人の壯健なるや將た病身なるやを知り得べきのみならず骨盤造搆の善惡をもまた大畧推察し得るものとす故に妊婦、産婦を診するは宜しく先づ其體格のよく婦人に適合せるや(卷の一第一章の末項を見よ)全身の形ち直なるや步行の姿常なるや否やに注意すべし而して此等の點に於て異常なきときは骨盤の造搆もまた大略惡しからざるものなり然れども妊娠月を重ね子宮增大して前方に傾くに至りては仮令骨盤の造搆に於て異常なきも身體の權衡を保たんが爲自ら多少背を反らするものとす注意すべし而して己に全身の容體を檢查し了れば産婆は自ら其手を清らかに洗ひ尋で乳房を檢查すべし

●乳房　は弛緩して垂れ懸るや或は緊實して胸壁に固坐するや大なるや小なるや乳暈は着色せるや乳頭は突出して授乳に便なる

や否や等を見了り次に乳房を搾りて初乳の出るや否やを検すべし

●腹部　を診するにハ其婦人をして仰臥せしめ帶を解き腹を出だして先其形を見兼て中線の着色、妊娠線の有無、臍の形、胎動等に注意すべし但し經妊婦に在りては其妊娠線に赤きものと白きものとあり赤きは新に生せし新しきものにして白きは以前の妊娠中に生せし舊きものなりまた臍は月を重るに從ひ漸〻く平坦となり末期に至れハ外方に突出するものとす○已に此等のものを見了れバ其婦人をして脚を曲て膝を立しめ産婆ハ其右に坐するも左に坐するも常に検査すべき婦人の顔に對して坐し温めたる兩手を靜かに腹に加へて腹壁の弛緩せるや緊張せるやまた厚きや薄きや等を診し尋で子宮の大小、形狀、位置、硬軟、移動等に注意し兼て其　底　部ハ何れの處にまで達せるや等を検すべし次

に胎兒の大小、位置、體向、運動等を觸知するにハ則ち兩手を以て徐〻に子宮の左右、上下を按トて頭部、背部、臀部、四肢の在る處を診すべし但し球の如く圓く硬くしてこれを打てバ多少振動して恰も水中に游べる物を打つが如き感覺をなす者ハ則ち頭部なり臀部もまた多少圓くして聊か振動するとあれども頭部に於るが如く著しからず且頭部に比すれバ稍〻軟かにして其形もまた頭部の球の如くなる類にあらず加之ならず頭部ハこれを按トて漸〻く軀幹に至らんとすればかならず頸に觸るゝものなれども臀部にハ固より斯る著しき境界なし然れども診察を叮嚀にせざれバ間〻これを誤ることあり注意すべしまた臀部の側らに在りて硬くして小なる部分は則ち下肢なり時〻打つが如き運動を觸ることあり而して下肢の反對側には背部ありと知るべし○斯く按腹するの際子宮は時〻收縮して硬

くなることあり然るときは姑く其手を弛め子宮の再び軟かなるを待て更に按腹を始むべし而して已に子宮および胎兒の有樣を明かに診定し了れば次に骨盤、外陰部および下肢の檢査に移るべし

●骨盤を檢するには産婆の雙手を延ばしてこれを仰臥せる婦人の腰部に廻はし而して腰部彎曲の強弱、薦骨の幅および其穹窿の度ならびに尾骶骨の方嚮等を檢査し以て骨盤の傾斜および其彎曲の大畧を推測すべし而して後片手を腰部に止め置き他手を引てこれを恥骨縫際の上に貼け以て大骨盤の縱徑を目測し尋で兩手を左右の腸骨部に加へて以て其横徑の大畧を合点すべし此際また恥骨縫際の形狀に注意し其形ち鈍圓なるや或は尖りて強く前方に突出するや否やを檢すべし次に外陰部の位置、變色、浮腫等の有無に注意し下肢に就ては其形ち直なるや皮膚に浮腫なきや

靜脉の怒張せるや否やを檢すべし但し外陰部は必要止を得ざるときにあらざれば孜めてこれを目視すべからず按腹するときにもまた必ずしも腹を裸呈するを要せず襦袢、布片等の上より施して可なり然れどもこれを審らかにするには裸呈するを良とす

終に臨み布片若くは襦袢を以て腹を覆ひ其上に耳を貼けて胎兒および母體より發する種々の音を聽き取るべし而して通常聽き得べきものは胎兒の心音、運動音、子宮の雜音および腹内の大動脉音なれども時にはまた臍帶の雜音、腸内の雜音等を聽くことあり但し胎兒の心音、運動音、臍帶の雜音は胎兒より發し子宮の雜音、大動脉音および腸内の雜音は母體より發すること更に言までもなし○胎兒の心音は恰も時計の戛々響が如き音にして其調子は母の脉搏よりも大に早く一分時間に百三四十次とす而して此心音は胎兒の背部に

於て最も明かなるが故にこれに由て胎兒の位置を推知することを得べし○胎兒の運動音は固より心音の如く斷へず發するものにあらず腹を聽く際時々打が如き音をなすもの是なりこれおもに下肢の運動に基くものとす○臍帶の雜音は吹が如き音にして其調子は胎兒の心音と同一なり是臍帶が胎兒の身體に纏ひために些少の壓を受けたる處に發するものにして通常胎兒の背部に於て聽ものとす○子宮雜音は吹くが如き音なり其調子は姙婦の脈搏に同じ是子宮の血管內に發するものにして小腹部の外側鼠蹊部の上方に於て最も明かに聽取るべし而して只片側に發することあり或は兩側に發することありまた兩側ともに發せざることあり○腹內の大動脈音は打つが如き鈍き音にして母體の手の脈と其調節と同ふす○膓內の雜音は雷

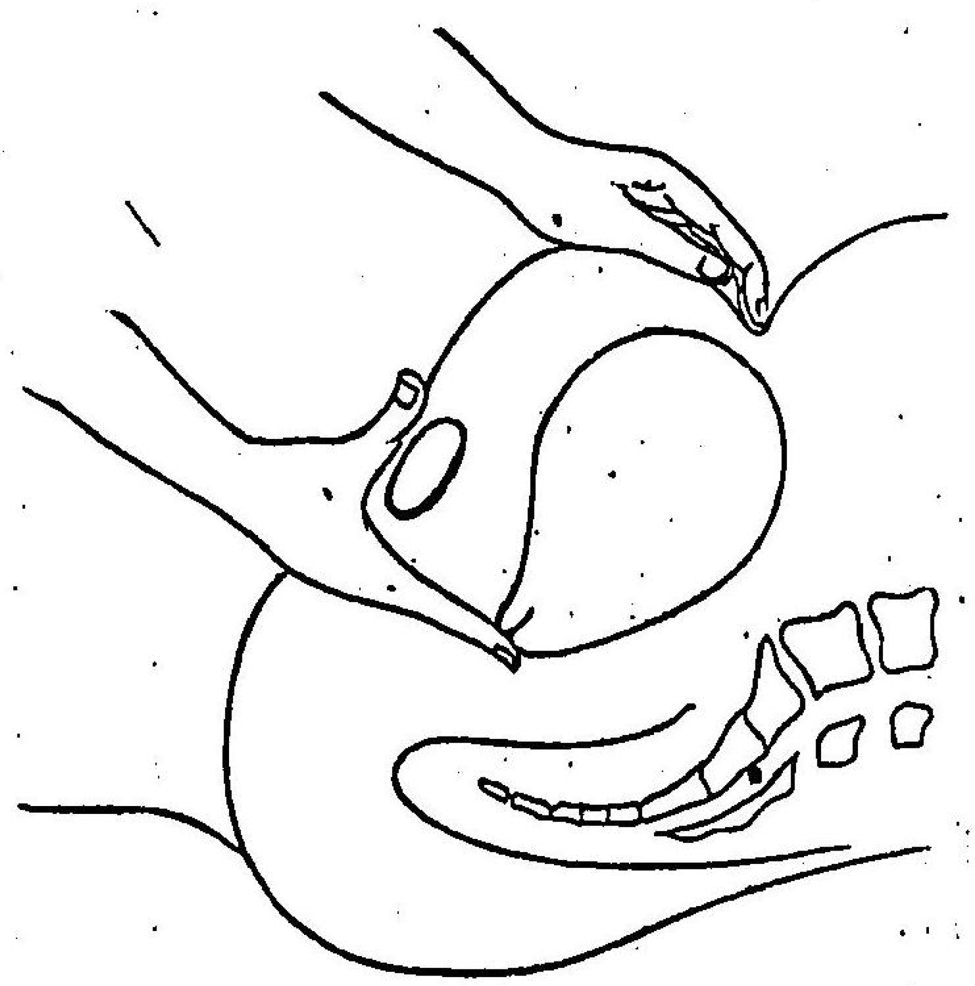
鳴の如き音にして腸管內に在る所の空氣の運動に基くものとす

(二)內診とは指を膣內に挿入し以て膣、子宮膣部、子宮口、子宮體等の有樣を明かにし胎兒の位置、體向等を詳らかにし兼て骨盤腔の大小、形狀を察し直腸および膀胱の虛實を知るものこそ

內診するに臨めば產婆は先其手を石鹼にて淸らかに洗ひ爪の延びたる者はこれを切り去りて其緣を圓め爪の垢を洗ひ去るべし若し其前に不潔のものと取扱ひたらば孜めて內診せざるを良とすれども止を得ずしてこれを爲すときは肘より指頭まで叮嚀に反復洗ひ淸め更に五十倍の石炭酸水若くは千倍の昇汞水中に於て再び其手を五分時間許り洗ふべし而して檢査すべき婦人の位置は仰臥にし

て脚を曲げ膝を立て兩足を開かしめ兼て少く腰を擧げしむるか或は腰下に枕を敷き以て檢査に便ならしむべし而して後產婆は婦人の顏に對して其右側に坐し右の手を以て檢査するを便とすれども臥床の位置に由ては其左側に坐して左の手を使用せざるべからざることあり故に左の手もまた每に心懸けて運用に習熟せしむべし蓋し產婦と診するには多くは示指および中指の二指を用ふれども姙婦には示指のみを以て診するを常とし止むを得ざるときにあらざれば中指と加ふることなしまた内診の際は宜しく無用の人を遠ざけ且常に衣服若くは蒲團の類を以て姙婦の腹より以下を被ひ其被ひ物の下に手を入れて檢査を行ふべし決して陰部を露はすべからず」斯く準備已に終れば產婆は其洗ひ清めたる示指に石炭酸油若くは石炭酸ワセーリンを塗りこれを股間に運び先づ其外側緣を縱に陰門に加へ指頭を轉トて陰唇繋帶に沿ひ膣口に挿入すべし此時他の三指は曲てこれを掌に收め拇指を陰阜に接す〔第二十圖を見よ〕而して後膣口に挿入せし示指と膣の後壁に沿ひ誘導線の方向に從ふて進んで穹窿部に達せしむべし此際注意すべきものは先 膣口 の大小、方向ならびに其性の能く延長し易きや否や 膣 の長短、廣狹、温度、乾濕、膣壁の硬軟ならびに 直腸、膀胱 の空虛なるや

第二十圖



内診する時の指の運用を示したる者

盈實なるやを検するにあり若し直腸に燥尿滯ふるときは膣の後に磊落たる硬塊を觸るゝものとす試みにこれを壓せば則ち指痕を遺すを以て容易に他物と辨別することを得べし膀胱に尿滿つるときは前穹窿部に於て軟かきゴム球の如きものと觸るべし然れども膀胱の虚實を知るは通常外診に據るを易しとすまた妊婦の尿道は殆ど小指大の索状をなして恥骨縫際の後に觸るゝものなり〇次に骨盤の側壁を探れば尖りたる骨と觸るべし是則ち坐骨棘なり坐骨棘より指を中央に轉すれば恰も子宮膣部に中るべし是に於て子宮膣部の大小、長短、硬軟および其方嚮を診し子宮口は鎖せるや將た開けるや其形ちは如何なるや其縁は平滑なるや或は不平なるやを検し若し子宮口開くときは其縁の厚きや薄きやまた延長し易きや、切痕あるやなきや、指頭の幾分を頸管に挿入し得べ

きや、或は胎兒の一部を觸れ得べきや而して其觸るゝ所のものは果して胎兒の何部なるやを診定すべしまた子宮體に就ては即ち其壁の厚さ硬さは如何なるや知覺過敏の處はなきや能く移動し得るや否やに注意すべし〇妊娠の後期に至れば假令頸管に指頭を挿入し得べからざるも膣の前穹窿部より能く胎兒の下向部と觸るゝことを得るものなり此際若し他手を以て外方より胎兒を下方に壓せばこれを觸るゝこと益々易し而して判然これを觸れ得たるときはまたかならず其胎兒の何部たるやを明かにすべし〇次に骨盤後壁に沿ふて指頭を深く後穹窿部に運び試みに薦骨岬を探るべし但し通常の骨盤に於ては假令二指を以てするも容易にこれに達すべきものにあらず故に若しこれに達すること容易ならば骨盤上口の縦徑は則ち短小なるものと知るべし次に尾骶骨運動の如何を

檢し了りて膣内より指を去る時に臨み尚恥弓の廣狹會陰の性質に注意すべし

内診するに方りては再三これを行はざるやう其檢査すべき要点を充分明めたる後にあらざれバ指を去るべからず然れども陰部内外を規則なく妄りに探るべからず若し心に不明のことあらバ決してこれを曖昧に附し去ることなく直に產科醫に托して其診察を乞はざるべからず

○第五章　妊娠の鑑定

妊娠の鑑定は本卷第二章および第三章に記載せし母兒變化の各證候を以てこれを爲すべきこと勿論なれども其證候中には妊娠に限らず他の病にもまたこれを發するものあり或はおもに妊娠中に發するものあり或は只妊娠に限るもののあり故に妊娠を鑑定するに就き各證候の價値に大なる差異あるを以て其價値の大小に從ひこれを大別して不確證、疑證および確證の三證とす

●不確證　は妊婦の全身におよび精神の變化にして例之精神變陶、頭痛眩暈、惡心嘔吐、食氣の變嗜尿意頻數、皮膚の變色、輕微の浮腫靜脉の怒張等の如き是なり斯の如きは固より妊娠に限らず種々の病にもまたこれあるのみならず男子にも能くこれを發することあるが故に妊娠の鑑定には格別價値なきものとす然れども再三子を擧けたる婦人は右の證候に由り已に妊娠の最初期に於て其受胎せし

ことを自ら察し得ることあり
●疑証とは則ち生殖器の變化なり例之月經の閉止、外陰部膣およ
び子宮の變色ならびに其增大軟化、子宮口の圓形、子宮雜音、乳房の
變化等是なりまた腹壁に顯はる、妊娠線は固より生殖器の變化に
あらざれどもおもに妊娠に由て發するが故に此証に算入すべき價
値あり而して此諸証はこれを一々に分離すれバ妊娠に限らず他の
病にもまた能く發することあるを以て確と妊娠を鑑定すべき價値
なけれども右の諸証を同時に殘らず發見するか若くは其多數を發
見したるときは則ちこれを以て妊娠と鑑定するもまた大なる過ち
なきものとす
●確証は胎兒に基く者なり例之胎動を發見し胎兒の心音若く
は臍帶雜音を聽取し胎兒の各部を觸知する等是なり是固より妊娠

に限るものなるが故に右の諸証中只其一を得れバ以て妊娠と確定
するに充分なりとす然れども胎動の如きは單に其婦人の訴のみを
以てこれを定むべからず產婆自らこれと觸るゝか或はこれを聽得
たる後にあらざれバ確實ならず如何となれバ妊婦は其腹内の腫物
若くハ腹水の運動、腸痙攣等を誤り感して以て胎動と認むることあれ
バなり胎兒の心音もまたこれと妊婦の脈と已れの脈とに比較して
共に其調子の異なる者にあらざれバいまだ確實ならず如何となれ
バ妊婦の腹部大動脈音若くは己れの脈音を以て胎兒の心音と聽誤
ることあればなり蓋し右の確証中胎兒の各部を觸知するの一事は
妊娠の鑑定に最も緊要なり如何となれバ胎兒の心音、臍帶雜音およ
び胎動等の如きは若し胎兒の死したる場合に於てはこれを得るに
由なければなり

以上の確證ハ皆妊娠六箇月に至りて初めて顯るゝが故に其以前に於てハ妊娠を確定するに由なきが如くなれども稍習熟せし以上ハ三箇月乃至四箇月に至れバ再三の檢査に依り疑證を以ても殆ど確實に鑑定し得るを常とす若しまた産婆自ら其鑑定に苦むときハ宜しくこれを産科醫に乞ふべし

○第六章　初妊と經妊との鑑定

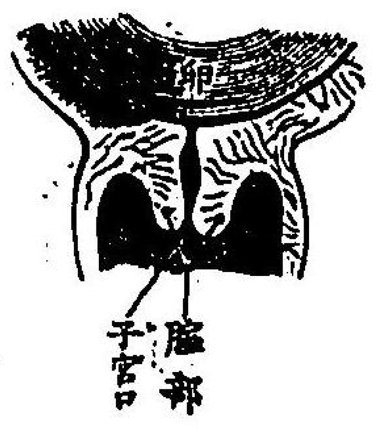
妊娠および分娩の時に生ぜる身體上の變化ハ産後盡く消滅せずして其痕跡を遺すものなり故に經妊と初妊とハ則ち其痕跡の有無に由てこれを鑑定す

初妊婦の乳房ハ緊實にして胸壁に固坐すれども經妊婦にありてハ弛緩して垂れ懸り且乳頭ハ延びて長し經妊婦の腹壁ハ弛緩して白

色の舊き妊娠線を呈す而して斯く腹壁の弛緩せるが故に子宮底部ハ著しく前方に傾き以て初妊婦の第九箇月の末に於るが如き最高点に達することなしまた經妊婦にありてハ其陰唇繫帶間ハ消失し尿道口と挺孔頭との間に白色の瘢痕あり處女膜ハ初妊婦にありてハ尚輪狀をなせども經妊婦にハ片々に破裂す蓋し初妊と經妊との鑑定に就き最も緊要なるものハ子宮膣部および子宮口の變化如何にあり即ち初妊婦の子宮膣部ハ硬軟平等一樣にして表面平滑其尖端より次第々々に柔軟となり六七箇月より以後漸々短縮して妊娠の末期に至れバ全く消失し以て其子宮口緣ハ薄きこと殆ど紙の如きに至るといへども經妊婦の子宮膣部ハ硬軟不同にして表面不平八九箇月に至れバ稍短縮すれども初妊婦に於るが如く著しからずして已に分娩期に近くも尚多少栓狀をなして全く消

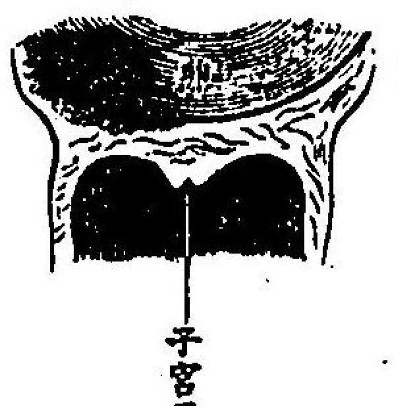
失することなしまた初妊婦の子宮口は圓く滑かにして纔かに指頭を加ふべき小窩となるも妊娠の末期に至るまで指を挿入すべき大さに開大することと稀にして分娩時に至りて初めて潤大するを常とすれども經妊婦の子宮口は其周縁に切痕あるが故

第二十一圖



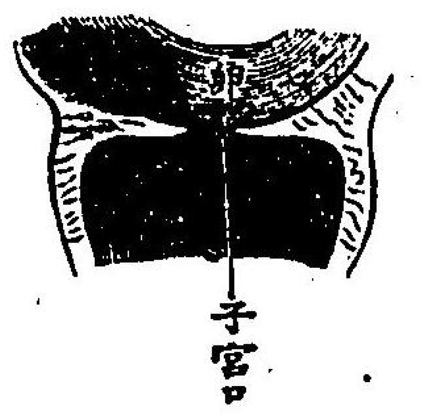
初妊第五箇月の子宮腟部を示したるもの

第二十二圖



初妊第九箇月子宮腟部著しく短縮せし者

第二十三圖

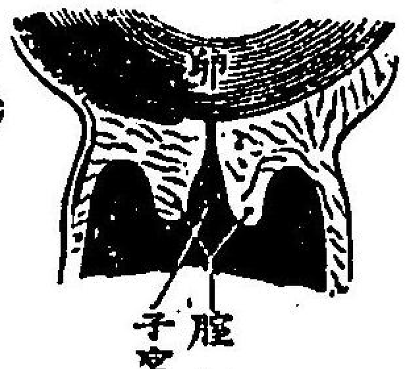


初妊第十箇月子宮腟部殆ど消滅したる者

は圓く滑かならずして不正不平なり且頸管の下端は五六箇月より以後已に漏斗狀に潤大して指頭を挿入すべく分娩前三四十日頃に至れば頸管内口共に開大し指を入れて卵膜に達し胎兒を觸知し得るを常とす

以上初妊と經妊との變化の差別はかならずしも右に記載せる如く判然たる者にあらず經

第二十四圖

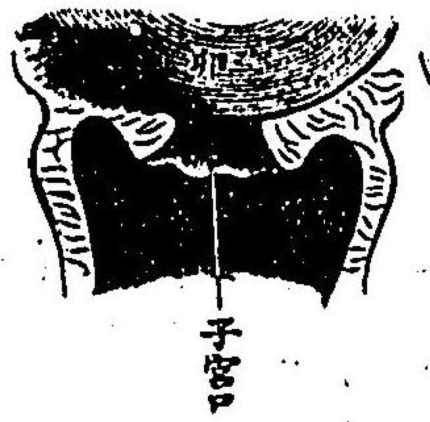


經妊第五箇月子宮口已に潤大したるもの

第二十五圖

經妊第九箇月子宮内口已に開きたるもの

第二十六圖



經妊第九箇月子宮腟部未だ消滅せざる者

妊といへども其既往のもの或は流產若くは早產なりしか或は產後數年を經過したる者ならバ其變化洵に僅小にして殆ど初妊と辨別し難きことありまた初妊婦にても其以前肥滿せることあるか若くは腹水等に由て曾て腹壁の擴張せしことあらバ經妊婦に於るが如く腹壁弛緩して且舊き妊娠線等を呈すること尠からずまた外陰部の瘢痕、處女膜の破裂の如きおもに分娩に基くといへども他の原因に由てもまた同一の變化を生ずることあり然れども前に列記せし變化の多數を發見するか若くは子宮膣部の差別著しきときは以て初妊と經妊とを鑑定するに充分なりとす

○第七章　妊娠時期の鑑定

妊婦に就き其受胎時と分娩時とを大約鑑定するに數法あり。一は最終の月經時より算出するものの一は受胎せしと想像せる交接時より算出するもの一は妊婦の初めて胎動を感ぜし時より算出するもの一は產婆の診察によりて鑑定するもの是なり

(一)最終月經より算出するものは則ち其月經の初日より以後二百八十日にして分娩を豫期するものなり

最終月經の初日より一日二日と指を屈して二百八十の日子を計算することは洵に煩雜に堪へざるべし然るに大陽暦の九箇月に七日を加へたるものは大約此日數に相當するが故に豫め分娩の時日を知るには則ち最終月經の初日より以後の九箇月に尚七日を加ふるを以て便利なりとす固より年に閏月あり月に大小あるを以て九箇月に七日を加へたるものいまだかならず二百八十日に相當すべきも

のにあらずといへども元來此法は分娩時の大概を豫知すべきものなるが故に假令豫算に二三日の相違あるも聊か妨げなし例之一妊婦あり其最終月經の初日を六月三日とすれば其以後九箇月目は則ち翌年の三月三日なりこれに七日を加へたる三月十日は恰も最終月經後の二百八十日にして即ち此日に於て分娩すべきものと豫期すべしまた一妊婦あり其最終月經の初日を十二月二十日とすれば翌年の九月二十日にて九箇月となるべしこれに七日を加へたる九月二十七日は則ち大約二百八十日にして分娩すべき日なりと考ふべし但し最終月經より九箇月を先きに向ふて進み算することといまだ煩雜を免かれず尙簡便ならんことを欲せば宜しく最終月經より後の方に三箇月退き算すべし其成績は共に同一なりまた分娩の日よりして此算を反對に施すときは最終月經の初日即ち想像の受胎

時を知ることを得べし例之三月十日に成熟嬰兒を擧けたる一婦人あらば其日より九箇月を退けば六月十日に至るべしこれより尙七日を減したる六月三日は則ち其最終月經の初日なりしと知るべし」

右の算法は洵に簡便なりといへども抑婦人の受胎するや或は最終月經の直前に於てすることありまた最終月經後三四週の間に於てすることあり或は受胎後尙一二箇月間月經の閉止せざることあり或は前回の產より次回の妊娠に至るまで其間一回も月經を見ざること等あるが爲此法固より精密なるものにあらず然れども此算法は兼て充分の檢査を行ふときは諸他の算法よりも大に確實なるものとす

〔二〕受胎せりと想像する交接時より算出するの法 則ち其日より以後太陽曆の九箇月にして分娩を豫期す

るものなり
受胎せし交接とて別に異なる者にあらざれバ妊婦のこれが訴を為し得べき者甚だ稀なり故に此法を用ふることまた極めて尠し若し其妊婦の男子に接することを甚だ稀なるか或ハ只一回に過ぎざれバこれと應用することを得べしといへども斯る訴ハ一々信ずべからす

〔三〕妊婦の初めて胎動を感ぜし時より算出するの法は則ち其日よりして大陽暦の四箇月半後に於て分娩を豫期するものなり

妊婦初めて胎動を感ずることを通常分娩前大陽暦の四箇月半に當るの時なれども胎兒の強弱、羊水の多少、妊婦の注意不注意等によりて

一様ならずまた經妊婦ハ初妊婦より早くこれを感ずるが如き種々の差異あるが故に胎動の初覺ハ以て妊娠時期を鑑定するに其價値甚だ小なるものとす

〔四〕診察によりて鑑定するの法は則ち序を逐ふて進行する所の母兒變化の程度を產婆自ら其習熟せる手を以て診察するものなるが故に彼の妊婦の訴を以て鑑定むる者に比すれば頗る確實なり而してまた妊婦の訴ふる所と產婆診察の成績と相符合するときハ其鑑定愈ゝ精密なり此に初妊婦に就き毎月の母兒變化の程度を枚擧すれば即ち左の如し

●妊娠第四週の末即ち一箇月の末よりハ子宮膣部稍肥大し其尖端少

く柔軟にして子宮口は圓形に變ず但し此時の變化は總て月經時に於けるものと大同小異なり

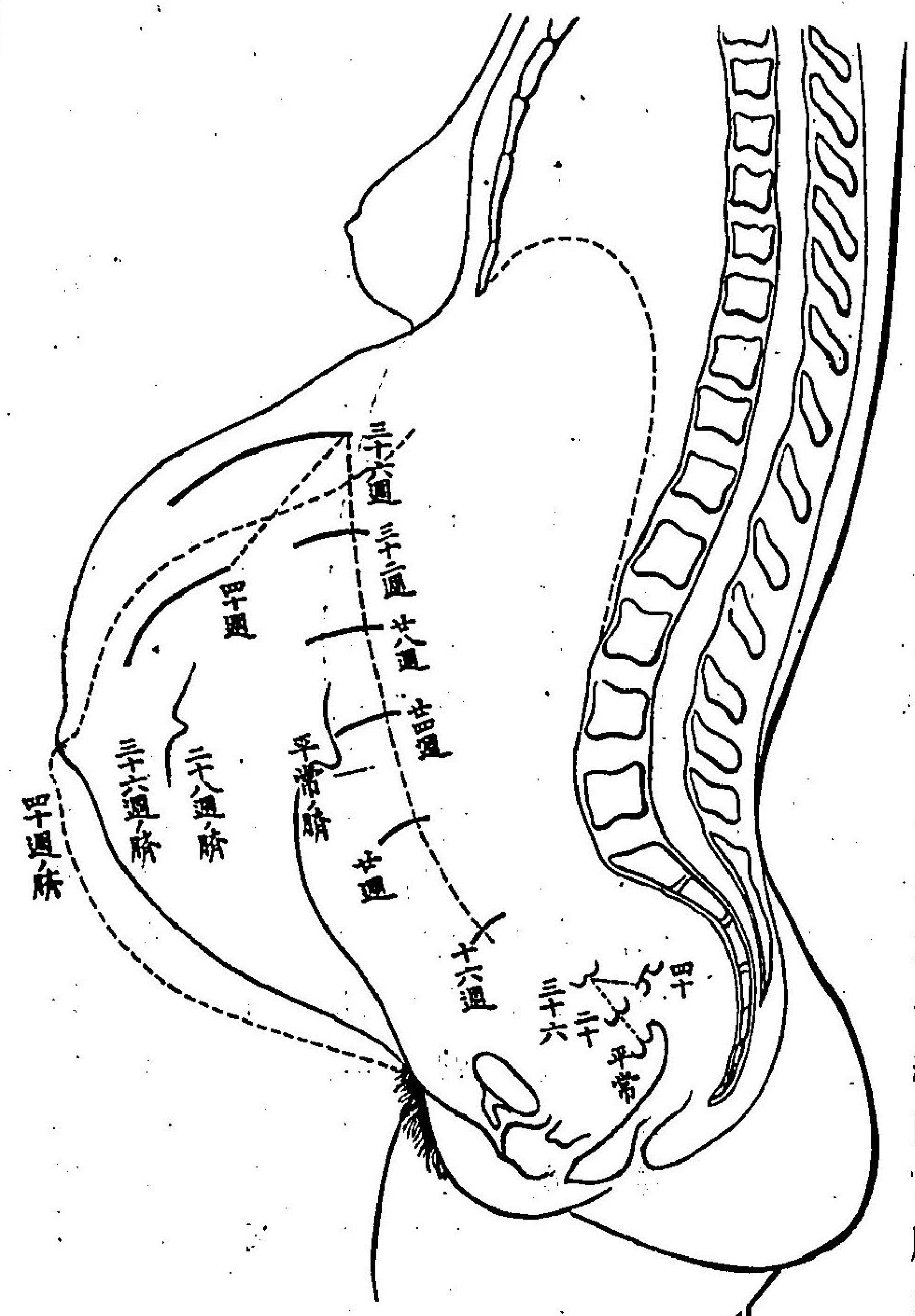
●第二箇月の末には子宮膣部の變化は猶前月に異ならざるも子宮は著しく增大して大さ中等大の茄子の如し試みに一指を膣部に加へて他手を以て恥骨縫際の上部を下方に壓せば前穹窿部に於て增大せる子宮體を明かに觸知し得べし且乳房稍腫大して緊實となる

●第三箇月の末には子宮膣部は前よりも尚軟かにして稍上方に轉し後方に向ふ從ふて子宮體は著しく前方に傾き以て前穹窿部より容易にこれを觸知することを得大さ殆ど拳子の如く其質柔軟なり此時に至れば外陰部もまた漸々腫大して稍暗色を帶ぶ

●第四箇月の末に至れば子宮膣部は一層上方に轉じ子宮底部は半球形となして恥骨縫際の上に顯れ腹壁よりこれを觸るゝこと容易なり試みに耳を小腹部に貼すれば既に子宮雜音を聽き取ること間間これあり乳房の變化もまた漸く著し

●第五箇月の末に至れば子宮底部は恥骨縫際と臍との中央に達し

第二十七圖



妊娠の各時期に於て占べき子宮底部子宮膣部および腹壁の位置を示したるもの但し上方の一の字形は子宮の底部にして下方の八の字形は膣部なり

大抵子宮雑音および胎動を聴くことを得べし時にまた微かに胎兒の心音を聴き注意深き妊婦は自ら胎動を感ずることあり

●第六箇月の末には子宮膣部更に上後方に轉して著しく短縮し子宮底は臍に達す外診によりて胎動を觸れ心音を聴くことを得べし

●第七箇月の末には子宮膣部一層短縮上轉して指を以てこれに達し難く子宮底部は臍上一寸四五分の處に達し腹壁および膣内より胎兒の部分を著しく觸るゝことを得る但し妊婦の運動産婆の手壓に由て其位置を變することも尚容易なり

●第八箇月の末に至れバ子宮膣部益〻上轉して愈〻短縮し長さ僅に二三分に過ぎず子宮底は臍と心下の中央に達す此時臍窩は延びて全く平坦となると多し

●第九箇月の末にハ子宮膣部の後上方に轉することも最も甚じく長

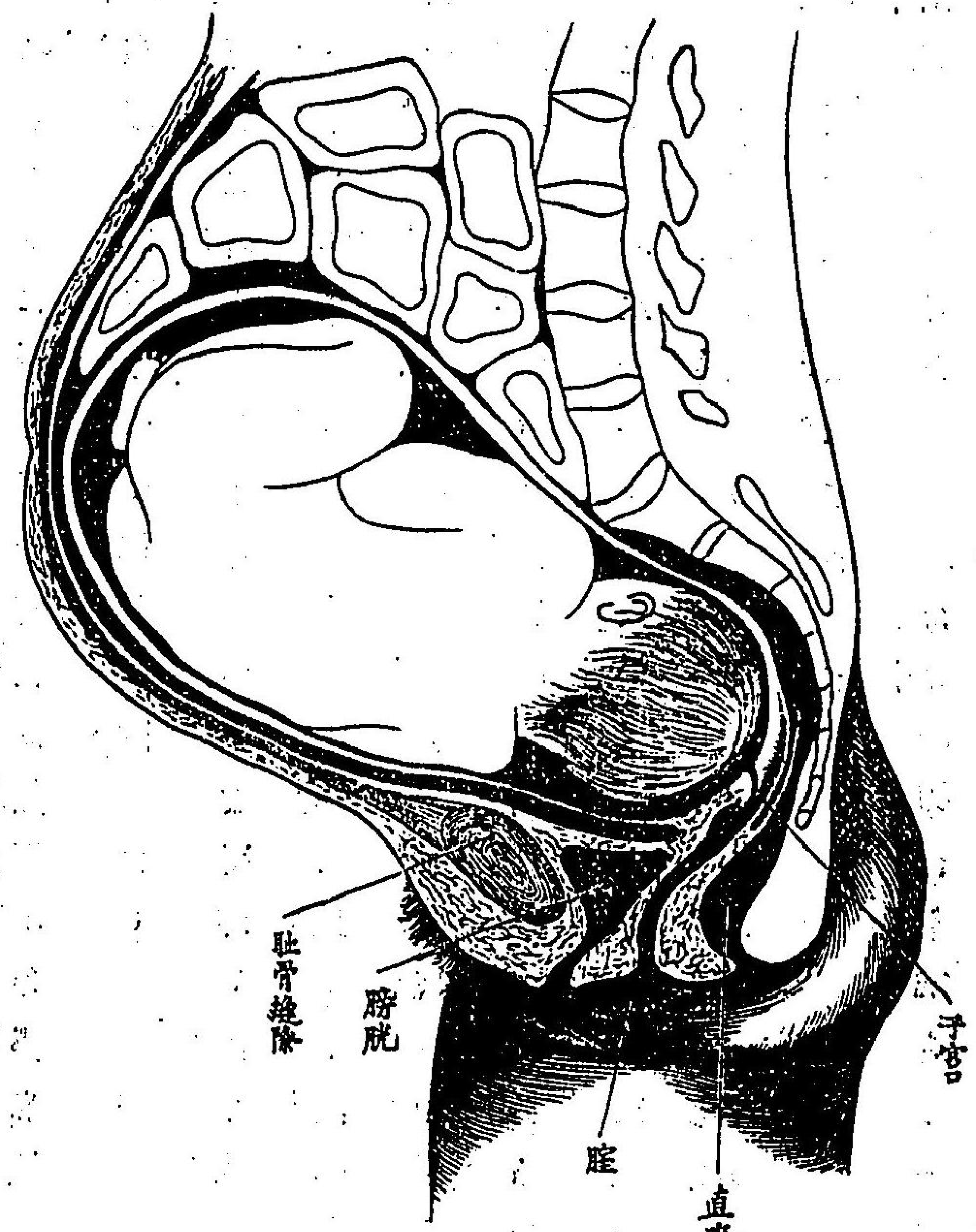
さ僅に一分餘軟かなること綿の如し子宮口は尚閉鎖して小窩となり或は稀に開大して其縁の薄き圓孔となることあれども尚指を挿入すべき大さに至らず子宮底は妊娠中の最高位に達して心下に至り稍右方に傾き呼吸動作共に困難なり

●第三十七週より四十週に至るまで即ち第十箇月中には子宮膣部再び下降すれども甚しく後方に轉し且全く消滅して只後上方に子宮口の淺き小窩を觸るゝに過ぎず子宮底は下降して且稍前方に傾き此月の末に至れバ其高さ第八箇月の末に於るが如し是故に心下再び弛みて復た緩かに呼吸することを得臍は前方に突出す胎兒の位置もまた已に定まりて其下向せる頭部は骨盤内に固定せらるゝが故に妊婦頻に尿意を催をす

以上總て初妊婦に就き其毎月の變化を知らしめたるものにして經

第二十八圖

妊婦にありては大にこれに異なれり即ち其子宮膣部は不正不等にして妊娠の末期に至るまで消滅せず子宮口は反て早くより開大し



第十箇月に於る初妊婦の腹を左右に縦断しこれを其左より見たる者

子宮底部は腹壁の弛緩せるが為初妊婦の第九箇月に於るが如き最高位に上らずして強く前方に傾くことを已に前章に於て述べしが如し斯の如く子宮底部は強く前方に傾き甚しきは前下方に垂れ懸りて所謂懸腹をなすに至るべきが故に胎兒の頭部は初妊娠の末期に於るが如く固定せず或は已に產時に迫るも尚能く移動すること多し

妊娠を鑑定するに就て各証の價値同じからざるが如く妊娠の時期を鑑定するにもまた其証候の價値に於て大に高下あり而して此に最も緊要なるものは則ち胎兒および子宮の大さにして之れに亞ぐものは子宮膣部の變化なり胎兒の大さは腹壁若くは膣内より手を以てこれを察すべく子宮の大さは其基底の位置を以てこれを定むべし然れども胎兒の大さは人毎に相同じからず子宮底部の位置も

また胎兒の大小、羊水の多寡、妊婦體格の大小、骨盤の異狀等に由て相異なるが故に上に述べたる毎月の變化は何れの場合においてもかならず適當すべきものと思ふべからず然れども通常の場合において妊娠時期を鑑定するに臨み上に述べたる毎月の變化に據るときは決して大なる過ちなし若し其鑑定にして前後共に一週間以上を外れざれば之れを以て己に上乘の鑑定と爲さゞるべからず

○第八章　妊婦の養生

妊婦は固より病者にあらずといへども纔に其養生を誤ることもこれが爲其害を受るゝこと常人よりも甚しきが故に嚴にこれは注意せざるべからず但し常習を改むるも何ごとも適宜にするを以て其法とす

妊娠は病にあらざるが故に別に他病を發せざる限りは固より醫藥を要すべきものにあらず然れども已に内部の諸器械に許多の變化あるを以て妊娠にあらざる婦人には瑣細の患に過ぎざるか或は毫も患なき事物にても妊婦には著しき害をなすことあり且其害たるや獨り妊婦に止らず延いて胎兒におよぼし或は分娩産蓐の時におよぶが故に始終養生を怠るべからず而して其養生たる別に煩はしきものにあらず只害なき限りは平常習慣せる生活法を改めず且萬事萬物總て適宜即ち善き加減を以てするに過ぎず假令ひ道理上善良なる事物にても或は其度に過るか或は常習を急變するが如きは反りて大害あるものと知るべし然れども從來の習慣にして若し養生の法に適せざるものあらば速にこれを改めざるべから

す

妊婦は精神を安静にし適宜の運動をなし清潔を専一とし衣服は緩かにして温かなるを着し飲食は從來慣れたるものにして營養分に富み消化し易きを良とし

●過劇の精神感動は其快樂なると不快なるとに拘らず妊婦には大に害あり故に妊娠中は稗史、小說、演劇、淨瑠璃、講談等これを見聞して以て喜怒、哀樂、恐懼、猜忌の感情を激するが如き事件は勉めてこれを避けざるべからず概して婦人は事物に感じ易きものにて殊に妊娠中は其感情甚だ鋭敏なるが故にこれを激することも劇しきときは爲めに精神病を起しまた胎兒に害を及ぼすこともあり初妊婦は間々分娩を恐怖して非常に心配するものなれば產婆は宜しくこれを慰め

て其決して恐るべきものにあらざることを納得せしめざるべからず勿論己れの曾て見聞せし他人の難產等を吹聽すべからずまた家事の爲め始終妊婦の心を勞するが如きことあらば宜しく關係のなき處に一時轉居せしむべし

●適宜の運動は妊婦に緊要の事件なり故に通常の家事を爲すことは勿論殊に晴天に乘じて家外に出で閑靜なる處を逍遙するが如きは最も賞すべきことにて是食機を勵まし便通を整へ精神を爽かにするの効あり然るに妊婦にして若し運動を怠り家內に籠居して安逸と事とし午睡を貪るが如きことあらば忽ち精神沈鬱、食氣不振、便秘、不眠等を來すべし然れども過度の運動は反て害あり例之山に登り、坂を越へ、高低多き道に遠く步を運び、砂礫の上に長く車を軋らせ、風雨を犯して外に出で、遊戲に耽りて夜を深かし或は頻りに階子を

昇降し或は強く身體を屈伸し或は重きを提げ荷を擔ひ馬に騎り舞を演ずる等總て身體を振動し腹に力を入るゝが如き運動を禁せざるべからず斯る運動は爲に子宮の充血を起しまた其位置を轉し以て墮胎早産の原因となることあり故に交接もまた其度に過るか若くは粗暴にこれを行ふときは爲に同一の害を來すの恐あり愼むべし殊に妊娠の末期に於てはこれを禁するを良とすまた仮令輕易の運動たりとも身體の疲勞するに至るまで持長すべからず

●清潔は人の養生に緊要の事件たること勿論なれども妊娠中は殊に注意せざるべからず故に屢室内を掃除し空氣の流通を善くし劇場、寄席、演説會、説教堂等多人數群集する處に入るべからず斯る處の温かなる不潔の空氣中に長坐すれば忽ち精神不快を覺へ眩暈卒倒することあり衣服もまた屢々洗濯し襦袢臥床等は殊に清潔にせざるべからず就中怠るべからざるものは則ち身體を清潔にすることにて毎日一回づゝ入浴することは勿論外陰部等は尚日々二三回づつ温湯にて洗ひ始終粘液の爲に滋潤せられざるやう注意すべし然れども脚湯は時として妊娠に害あり行はざるを良とすまた入浴の際は寒冒せざるやう注意すべし故に冬の寒きときなどには浴後直ちに身體を拭き乾かし速かに衣服を着すべし決して長く風に吹かるべからずまた乳房も不潔にして滋潤する時は動もすれば糜爛、裂創等を生ずることあり故に妊娠八九箇月以後に至れば毎日朝夕二回づゝ水若くは微温湯を以て叮嚀に洗ひ清め乳頭の凹みたる處などに附着せる不潔物は一々これを除き去るべし若しまた其皮膚薄くして軟かなれば授乳するときに方りて動かすれば損傷することありこれを防ぐには産前五六週の頃より燒酎、葡萄酒の類を以て毎日

これを洗ふを良とすまた乳頭扁平にして突出せざるものは産後小兒の哺乳に適せざるを以て時々これを撮みて引き延ばすべし而して尚充分突出せざるときは日に一時間許りづゝ乳頭の基根をゴムの輪に挾み置くべし若しゴムの輪なければ布片にてこれを纏絡するも可なり

●衣服は緩かにして且温かなるを良とす決して窮屈なるべからすまた薄衣すべからす殊に胸腹を緊縛することを禁す然らざれば呼吸および血行を妨げ胎兒および母體の發育を害するの恐あり故に妊娠の後半期に至れば廣き帶を緊く纏絡するを禁じ洋服を著する人は狹きコルセットならびに彈力の强き靴下等を禁すべし然れども腹帶は以て腹部を温かにし子宮および胎兒を善き位置に支持し懸腹を防ぎ妊婦の運動を容易ならしむる等の利益あるが故に妊娠

五六箇月以後に至ればこれを纏ふを良とすれども從來慣用せる腹帶の如き幅の狹きものを緊く纏絡すれば反て大害あり宜しく恥骨縫際より心下に至る程の廣きフランネル若くは麻布、綿布等を以て緩かに纏ふべしまた身體を冷却することの害あるは言ふまでもなきことながら妊婦に於ては就中下肢、陰部等を冷やすべからす故にフランネルの長き襦袢を纏ひ或は廣き股引猿股の如きものを穿つを良とす

●飲食物は從來慣れたるものにして榮養分に富み消化し易く風氣を釀さず神經を刺戟せず血液を熱せざるものを擇んでこれを適宜に用ふべし決して飽食すべからす就中妊娠の末期に至り飲食其度を過ぐるときは分娩に大害をなすことあり愼むべし然れども强ひて減食すべからす如何となれば妊婦は獨り其身を養ふのみならず

兼てまた胎兒を養ふに多くの滋養分を要すればなり故に多からず少なからず所謂適宜なるを良とす○飯は米を第一とし麥粟なども害なし麵麭もまた善し魚肉は鯛、鮒、比目魚、鱸、牛尾魚、鱵魚等の如き淡泊なるものを良とす鰻、鯡、鰮等の如き脂肪多きもの烏賊、章魚、鹽引、乾物の類は消化し難し食すべからず鳥獸の肉にても勉めて脂肪少なく且軟かなるものを擇ふべし野菜菓實の類にては大根、蕪根、番南瓜、豆、芋等の如き風氣を醸し易きもの芹、獨活、冬瓜、水瓜の如き小便を增すもの梅子、橙子、柚子、蜜柑等の如き酸味の強きものを多く食すべからずまた胡椒、山椒、蕃椒等の如き強き香料は害あり其外餅、團子の如きものは風氣を醸し消化し難し食すべからず飲料には清水を第一とすれども常の冷水よりも白湯、麥湯等を良とす燒酎、泡盛、ブランデの如き強き酒類また茶、珈琲の濃きものは害あり然れども常に酒茶

等を飲み慣れたるものはこれを禁すれば反て害あり只其分量を減じ且強くして濃きものと禁すべし其他總て妊婦の嫌ふ物またこれを食して曾て酸敗、惡心、嘔吐、頭痛、腹痛、下利若くは便秘等を起したる飲食物は仮令如何なる營養品たりとも再びこれを與ふべからずまた食物は何品に限らず口中にて細かに嚙み徐に食すべし仮令消化し易きものにても急で丸吞みにすべからず就中野菜、菓實等に於て然りとす

産婆はまた妊婦の大小便の通利に注意すべし妊婦若し適宜の運動をなし毎朝一椀の清水若くは一椀の牛乳を飲み或は熟したる無害の菓實を食するときは通常便秘を患ふることなし若しまた秘結に苦むときは牛乳若くは石鹼を和したる微溫湯を以て適宜の灌腸を行ふべし然れども決して自ら下剤を用ふべからず如何となれば妊

婦は下剤の類によりて動もすれば下血をなしまた子宮の收縮を促がし以て墮胎するとあり而して其種類を擇ぶと醫にあらざればこれを爲し得ざればなりまた妊婦にして尿意を催さば長くこれを忍ぶべからず假令頻々たりとも速かに利するを良とす

産婆若し妊婦の外形に由て骨盤に異常あるべきを察せば速かにこれを檢査すべし而して若し異常を認むるか若くは經妊婦にして其外形に異常なきも屢々難産を遂げたることを聞かば直に妊婦に勸めて醫の診察を受けしめざるべからず

若し妊婦に亀背、鳩胸、跛躄等の如き不具の外形あるか或は腹部、下肢等の形ち常ならざるときは其骨盤にもまた屢々異常あり故に産婆は斯る不具の妊婦に接せばかならず先其骨盤を叮嚀に檢査すべし而して若し其診察により果して骨盤に異常あることを發見せば速かに産科醫の診察を受けしめざるべからずまた經妊婦にして屢々難産に罹りたるものは假令其外形および骨盤には産婆に於て發見すべき異常なきも他に難産の原因たるべき變化これなしとすべからず故に是また醫の診察を受けしむるを良とす然れども此際勉めて妊婦を驚かしめざるやう注意すべし

前編卷の二終

産婆學前編卷の三

平常の分娩および産婦の取扱法

○第一章　分娩の概畧

分娩とは即ち産道を通過して卵が母體を辭し去る機能にして其經過の摸樣によりこれを自然産、人工産、平常産および異常産に區別し其時期の早晩によりて更に定期産、早産、流産および晩産に區別す

分娩をまた出産或は單に産ともいふ是母の體內に宿りし所の胎兒が其附屬物たる胎盤、臍帶、卵膜、羊水等と共に産道を通過して母體を辭し去ることをいふものにして即ち母に在ては其姙娠を終る時期

なり而して所謂產道とは硬部たる骨盤管と軟部たる子宮頸管、膣およひ外陰部よりなりて固より胎兒および娩隨の產出する自然の道路なれども其產出するに方てはまた反て多少の抗抵を爲す者なり

●自然產とは人の助を藉らずして天然の力により自ら出產するものをいひ人工產とはこれに反して人の助に據るものをいふ然れども自然產かならずしも安產ならず人工產かならずしも難產ならず其場合により人工產も害なくして自然產も反て害あることとこれあれども概して自然產は人工產に比すれば安くして且害の少きことと無論なり

●平常產とは母兒に害なく且天然の力によりて出產するものをいふこれを名けてまた健全產、順產、正規產或は常產ともいふ異常產とはこれが爲產婦若くは小兒の健康を害し或は其生命を危くすべき分娩をいふ故にまた名けて難產、不順產、變產ともいふ語を換へていへば即ち平常產は妊娠の定期を經過したる後に於る母兒に害なき自然產にして異常產は妊娠時期の早晚に關せず母兒に多少の害をなし且多くは人工を要すべき產なり

●定期產とは妊娠四十週を經へ即ち月滿ちて分娩するものをいひ早產とは妊娠二十九週より三十八週の間即ち八箇月の初より九箇月半に至るまでの間に於る出產をいひ流產とは妊娠二十八週即ち八箇月以前に於るものをいふ而して妊娠の定期即ち四十週以後に至りて分娩する者を晩產といふ

○第二章　產出力

產出力とは則ちこれが爲產道の抗抵力を排して胎兒および娩隨を產出すべき自然の力をいふ是れもまた陳

痛と名くる所の子宮收縮に由て起り扶くるに腹壓を以てす

陣痛とは反復して起る所の子宮の收縮なり蓋し其收縮する毎に産婦常に疼痛を覺ゆるを以て然か名けたり而して此收縮は常に發しては歇み歇みてはまた發するものにして一陣々々に來るなり故に其發したる時を陣痛の發作といひ歇みたる時を間歇といふ發作間歇共に不隨意にして産婦の意を以てこれを促すこと能はずまたこれを制すること能はず而して其發作する毎に先腰部および薦骨部に輕く疼痛を發して小腹に廻り延ひて耻部および上腿に及ぼし次第に強くありて其極度に達すれば更にまた減して漸々歇むものなり此際子宮は其收縮に由り次第に硬くなりて發作の極度に至れば殆ど石の如く且前方に突墜して球の如き形に變すれども陣痛の減

ずるに隨ひ漸く弛んで再び舊形に復す○斯く子宮の收縮する毎に其腔内に在る所の卵を下方即ち子宮口に向ふて壓迫するが故にこれが爲子宮口は漸々開大して遂に胎兒の通過し得べき大さに至るものなり已にして胎兒の下向部子宮口より膣内に出でたる後に於ては此不隨意の陣痛に加ふるに腹壓を以てして大に産出力を扶くるものとす所謂腹壓とは即ち呼吸を止め腹に力を籠めて努力すること猶大便を排出する時の如き働をいふ而して此働は陣痛に反し元と隨意の働なるが故に産婦の意を以て能くこれを加減することを得れども已に其期に迫れば知らず識らず殆ど不隨意にこれを發するものなり蓋し腹壓は子宮口の已に十分開大せし後に於ては陣痛を扶くるに極めて緊要の働なれども其い

まだ然らざるに先つてこれを營むか或は已に開大せし後たりとも
これを營むこと過劇なるときは反て害あり
產婆は姙婦に於て腹痛の往來反復するものを認めて悉く陣痛と思ふ勿れ腸加答兒および便祕等にて腸に風氣を充滿したるときは疝痛と名けて同しく往來反復せる腹痛を發するものなり但し眞の陣痛は疼痛と共に子宮硬くなりて前方に突出するを以て彼此容易に辨別し得べし

○第三章　分娩の經過

分娩の經過を分つて三期となす即ち其第一期は產の初より子宮口全く開ひて胎兒のこれを通過し得べき大され至るまでをいひ第二期は子宮口の十分開大し

たる時より胎兒の出產し了るまでをいひ第三期は胎兒の出產したる時よりして娩隨の產出し了るまで即ち分娩の全く終るまでをいふ故にまた第一期を開口期といひ第二期を產出期といひ第三期を娩隨期といふ

產の初即ち姙娠より分娩に移る、所の境界は經姙婦に於ては判然これを辨別し得ることあれども通例甚だ不明なるものなり如何となれば　前驅陣痛　と名けて姙娠の末期三四週間の頃より已に子宮の、收縮するを常とすればなり但し此收縮の發作は最初甚だ稀にして一日乃至二日を隔てゝ一回するに過ぎざれども分娩期に近くに從ふて漸く其度數を增し且强くなるものなり此際經姙婦に

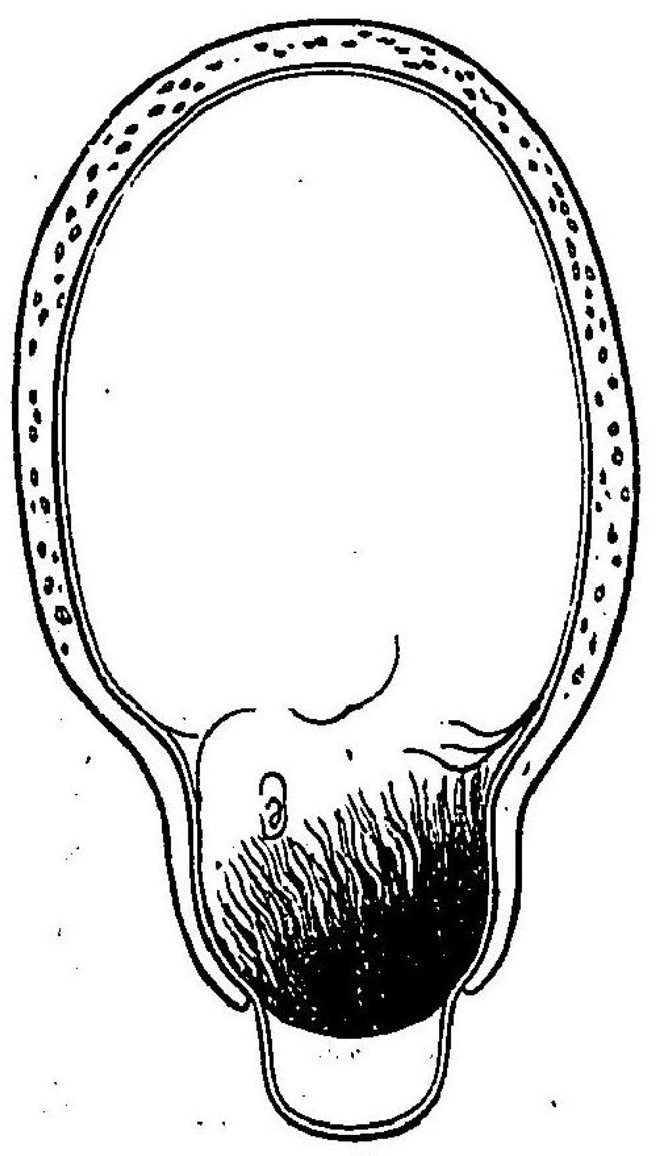
於ては疼痛を感することと罕にして偶手を腹に加ふる時に方て纔に子宮の硬くなるを覺ゆるに過ぎざるも初姙婦に在ては已に多少の疼痛を感すること多も是初姙婦に於て姙娠と分娩の境界を明かに辨し難き所以なり而して初姙婦に於ては此前驅陣痛の爲其僅に殘り存したる子宮腟部全く平坦となり經姙婦に於ては其已に開ひたる子宮頸管漸々短縮するものとすまた其初姙たり經姙たるに關せずこれに由て粘液の分泌漸々増加するが故に腟は其温度高まり滋潤して甚だ柔軟となり外陰部もまた延びて軟かくなるものなり斯の如く陣痛は已に姙娠中よりこれあるを以て分娩第一期の初を判別すること甚だ難きが如くなれども抑も此前驅陣痛たる其發作の來る甚だ緩慢微弱にして且規律正しからず次に述ぶる所の開口期の陣痛とは自ら異なる所あるを以て少しく熟煉したる産婆若く

は經姙婦に於ては彼此を辨別して以て分娩第一期の初を大略判定することと左まで難き業にあらざるなり(本巻第六章を參照せよ)

●分娩第一期即ち開口期は産道開くの期にして其發作間歇共に規律正しき陣痛を以て始まり其疼痛および子宮收縮共に前驅陣痛に比すれば甚だ強く發作時もまた長くして産機の進むに随ひ益々強劇頻數となり随ふて間歇時は愈々短縮して長きも尚十五分時間を超ることとなし而して陣痛の發する毎に子宮口縁は緊張して渉くなるのみならず漸々上方に牽かるゝが故に子宮口もまた次第に開大するものなり而して斯く子宮口の開大するに随ひ卵膜の下部と子宮壁より剝がれて以て脱落膜の小血管破らるゝが故に此際流れ出づる所の粘液中にはかならず多少の血液を混ず是産の已に初まりたるを知り得べき確徴の一とす○子宮口開大して已に二錢銅貨の

大さに至れば其子宮壁より剝がれたる卵膜の下部は恰も護謨球の如き形をなして口外に膨出すこれを　胎　胞　といふ是胎兒の下向部と彼の剝がれたる卵膜の間に羊水の一部滿つるを以て成るものにして陣痛の際は緊張して護謨球の內に風を吹き入れたるが如く間歇時にはまた縮小して護謨球より風を吸ひ出だしたる時に於るが如し但し胎胞の一張一縮するは以て子宮口を嫩かに開大するに頗る緊要の作用とす故に若し期に先

第二十九圖



胎胞の緊張したる形を示す

つて此胞の破裂することあらば爲に疼痛を增して開口期の經過滯

かならす○胎胞は右に述べたるが如く最初は陣痛の發作間歇毎に一張一縮すれども子宮口已に十分開大して其周緣殆ど指頭に觸れざる時に至れば發作間歇の差別なく緊張したる儘にて破裂に垂とし次に起る所の陣痛に由て終に破れて以て羊水の一分即ち胎胞內に在る所の羊水を漏らすこれを　破　水　といふ此に於て分娩の第一期即ち開口期終るなり其時間初產婦に於ては六時乃至十時とす但し破水は第一期の終若くは第二期の初に於てするを常とすれども往々期に先つことありまた後るゝことこれあるが故に第一期の終は決して破水の期を以て定むべからず宜く子宮口の開大し盡きたる時を期してこれを定むべし○開口期に於る陣痛はこれに由て胎兒の下降することを殆どこれなく只產道を開ひて胎兒產出の準備をなすに過ぎず故に名けて準備陣痛ともいふ

●第二分娩期即ち産出期は胎兒を産出するの期にして所謂産出陣痛を以て始まり子宮の收縮更に劇烈頻數にして大約二三分時毎に發作反復し且腹壓を加へてます〳〵其壓力を強むるものあり即ち産婦は陣痛の起る毎に知らず識らず手足を伸ばし或は屈めてこれを物に支へ呼吸を鎖し力を籠めて強く腹筋を努力するもの是なり而して此産出陣痛は啻に強劇にして且續々反復するのみならず其時間もまた開口期陣痛に比すれば長く持續するものとす然れども此期に至れば産婦自ら其將に産の終らんとするを感ずるが故に敢て苦痛を憂ふるの色なく大に勇氣を皷舞して愈々努力するものなり○産出期の初に於て胎兒の下向部は其全く開大せる子宮口内に在れども須臾にして骨盤底に下り陣痛毎に肛門およぴ會陰はこれに衝かれて球狀に突隆す尋で下向部は陰門を排し

て陰唇の間に顯はるこれを下向部の排臨といふ此時に方ては陣痛更に其度を高め且膣口および外陰部の非常なる緊張に由て疼痛頗る甚しく顏面紅を潮し眼光射るが如く全身に汗を發して戰々振慄す故に此時の陣痛を名けて戰慄陣痛といふ此際胎兒の下向部は陣痛の發作毎に下方に進み肛門開ひて往々大便を漏らし會陰は烈しく緊張して破裂に垂〳〵とすれども陣痛歇めば下向部再び退き會陰また弛緩すること猶第一分娩期に於て彼の胎胞の一張一縮するが如し而して下向部の陰門に於て斯く一進一退する毎に常に血液を混したる少量の羊水を漏出す已にして遂に軟部の抗抵力を排し去れば胎兒の下向部は陰門に箝まりて間歇時といへどもまた再び退くことなし而して後續き發する所の陣痛に由て下向部終に産出すこれを下向部の撥露といふ此際軟部の緊張最も甚しき

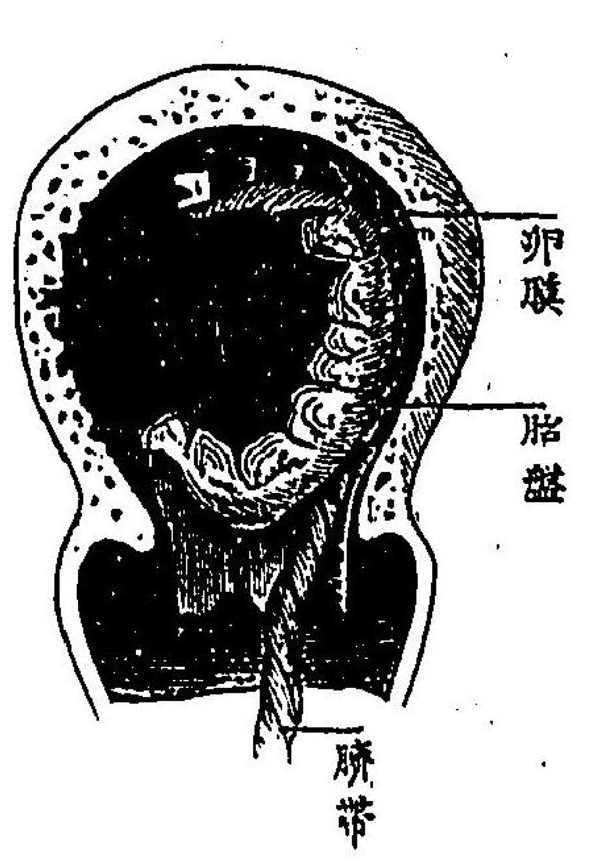
が故に産婦は其疼痛に堪へずして多くは聲を發して叫び膣口若くは會陰に多少の裂創を生ずるものとす而して胎兒の他部は下向部の撥露と共に同時の陣痛に由て産出することあれども多くは撥露の後多少の間歇をなし次に來る所の陣痛によりて産出せらるゝものとす此際また殘の羊水および血液を漏らす但し此出血は外陰部の破裂に基くといへどもまた娩隨の子宮壁より脱離するにも由るなり蓋し娩隨の一部は則ち第二分娩期終末の陣痛に由て已に子宮壁より離るゝものとす是に於て産出期全く終る其間長短一樣ならずといへども初産婦に於ては通常一時間乃至三時間なるべし

産出期に於て胎兒の産道を通過するに方り其下向部は劇しく周圍より壓迫せらるゝが故に皮膚に皺襞をおして漸々腫起し以て通稱産瘤と名くる所の腫物を生ずるに至る而して此瘤の頭蓋に生じたるものを頭腫といひ面部に生じたるを面腫といふ是下向部中其最も下方に位せる部分即ち産道の前壁に向ふたる部分に於て殊に著しく且産出期の經過愈々長きときは産瘤もまた益々大なるが故に初生兒に就き此瘤の所在大小を視て以て其生れたる時の位置と産出期の長短とを容易に鑑定し得べし但し産出期の經過甚だ短かきときは殆どこれを生ずることなし

●第三分娩期即ち娩隨期は胎盤、卵膜および臍帶の一部を排出するの期にしてまた分娩終末の期なり而して此娩隨を排出するは同く子宮の收縮および腹壓の力にして此子宮收縮を娩隨期陣痛といふ胎兒産出の後大約十二三分時を經て始まり産出期の陣痛に比すれば甚だ微弱にして時としては産婦自らこれを感ぜざることあり殊に初産婦に於て然りとす然れども手を産婦の腹に加ふれば子宮の

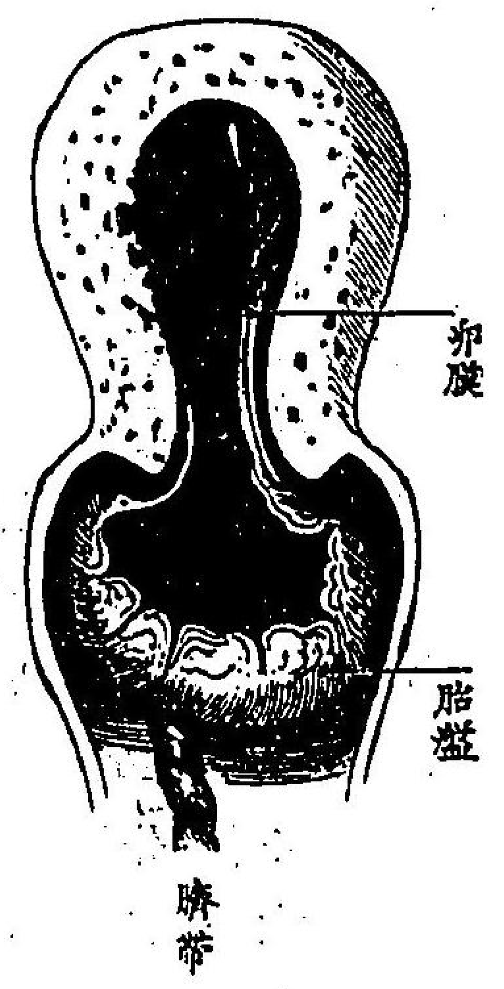
硬くなるに由て容易にこれを觸知すべしこれに由て彼の產出期の末期に於て半ば子宮壁より剝がれたる胎盤は今や全く脫離して膣內に出で尋で腹壓若くは按腹に由て膣外に排出せらるゝものとす」抑も胎盤の剝離するや共に許多の血管破斷せられて子宮壁と胎盤との間に出血するを以て此出血の爲胎盤は壓されて漸く卵膜の囊の內に突入し卵膜と共に翻轉す

第三十圖



胎盤離れて卵膜の囊の內に翻轉する形を示す

第三十一圖



娩隨翻轉して膣內に出たる形を示す

ることと其恰も足袋手袋の類を表裏に翻すが如し故に娩隨の陰門を出づるときは表裏轉倒して胎盤の內面は外方に向ふて先に顯れ羊膜は外卵膜の外に翻り出づるを多しとす然れども亦往々斯の如く翻轉せずして出づることあり是其出血胎盤と子宮壁との間に溜らずして直に外に漏るゝときに於て然りとす故に斯る場合に於ては娩隨期陣痛の起る毎に可なり多量の血液を膣外に漏らすものあり○斯の如く胎盤の子宮より剝離するときはかならず許多の大血管破るゝが故に或は恐るべき大出血を來さゝるを得ざるが如くなれども通例其事なきものは實に子宮の劇しき收縮を以て直に其血管を壓迫閉塞するが故なり○子宮は其いまだ娩隨を排出せざる前に於ては尚大にして其底部殆ど臍上に達すれども已に娩隨の出でたる後には著しく縮小して大さ拳子に比すべく硬きこ

と石の如く形球の如くにして下りて小腹に在り

娩隨期の持續は甚だ區々にして分娩の三期中長短最も定りなきものなり但し初產婦に於ては大約十五分時間乃至二時間とす然れども按腹に由て大にこれを短縮し得るものなりまた分娩の全持續は初產婦に於ては大約八時間乃至十四時間を以て通例とすべけれども經產婦に在りてはこれより短きこと著し就中第二分娩期殊に短くして甚しきは只一二次の陣痛を以てこれを終ることあり

○第四章　胎兒の產道を通過する有樣即ち分娩機轉

成熟せる胎兒は產道を通過するに常に縱位を取り且一定の旋轉をなす而して此旋轉に縱橫二樣の別あり

是產道抗抵力の不等なるに由るものにして胎兒其抗抵を避けて產道を通過するに最も緊要の機轉とす分娩機轉とは即ち是なり

縱位とは胎兒の長軸と子宮の長軸と相一致して胎兒の頭部若くは其骨盤部の下向するもの是なり而して其頭部の下向するものを頭位といひ骨盤部の下向するを骨盤位といふ二位共にまた各々小別あり即ち頭位にして頭蓋部の下向するを頭蓋位といひ面部の下向するを顏面位といひ前顱部若くは前額部の下向するを前顱位および前額位といふまた骨盤位にして臀部の下向するを臀位といひ足の下向するを足位といふ但し足位には全と不全とあり即ち兩足の下向するを全足位といひ片足の下向するを不全足位といふまた稀には骨盤位にして兩膝若くは片膝の下向することあり全および不

全膝位是なり○以上の縱位には其頭位たり骨盤位たるに拘らず兒背は常に母體の左側若くは右側に向ふものなり而して其左側に向ふもの多きが故にこれを第一體向といひ右側に向ふものを第二體向といふ已に卷の二第三章の末に記載せしが如し

胎兒の產道を通過するや其位置および體向の如何に拘らず其方向はかならず骨盤誘導線の方向に從ふべきこと勿論また產道抗抵力の平等ならざるが爲一定の旋轉をおこすものなり而して其旋轉に縱橫の別あり　縱の旋轉とは則ち螺旋狀の旋轉にして胎兒の骨盤に入るとき其下向部の最大徑は骨盤上口の橫徑若くは橫徑と斜徑の間にあれども骨盤內腔に於ては稍轉して其斜徑と同じ方向を取り下口に於ては更に轉じて殆ど其縱徑と相一致するが如き是なり是實に上口および內腔に於ては共に其斜徑最も長しといへども下口に於ては尾骶骨の移動するに由て其縱徑最も長きが故に下向部の最大徑もまた骨盤管中狹き所の強き抗抵を避けて自然廣き所の方向に轉ずるを以てなりまた　橫の旋轉とは胎兒の下向部骨盤に入る時と骨盤を出づる時に於てこれをなすものにして其上口に入る時は則ち前方より後方に旋轉して下向部中骨盤の前壁に對する部分は後壁に對する部分より下方に位す是職として骨盤の傾斜あるに由るものなり而してまた下口を撥露するときはこれに反して後方より前方に旋轉し前に向ふ部分は耻弓に支へられて動かざれども後に向ふ部分は會陰を排して漸々く外に顯はるゝものとす是實に骨盤誘導線の彎曲なるに由來するものなり

以上縱橫二樣の旋轉は則ち是諸般の縱位に於てなす所の通則なり

其詳細なることに至ては宜く左に列記せる各般の位置に就てこれを明かにすべし

〔甲〕頭位一名頭産

頭位ハ則ち頭顱の下向せるものにして最も多き位置なり更に頭蓋位、前顱位および顔面位の三者に分たる

、頭位中最も多くして且最も安穏なるものは則ち頭蓋位なり産兒百人中九十五人は頭蓋位にして前顱位は大約一人なりまた顔面位ハ二百八人中僅に一人に過ぎず加之ならず前顱位および顔面位は共に頭蓋位の如く平穏ならずして彼に比すれば産婆若くは醫の補助を要することと多し然れども猶自然に分娩を經過し得ることまた多きが故に本編平常産中に記載すれども産婆は宜く此二様の位置を頭位の破格となし其心してこれを取扱ふべし

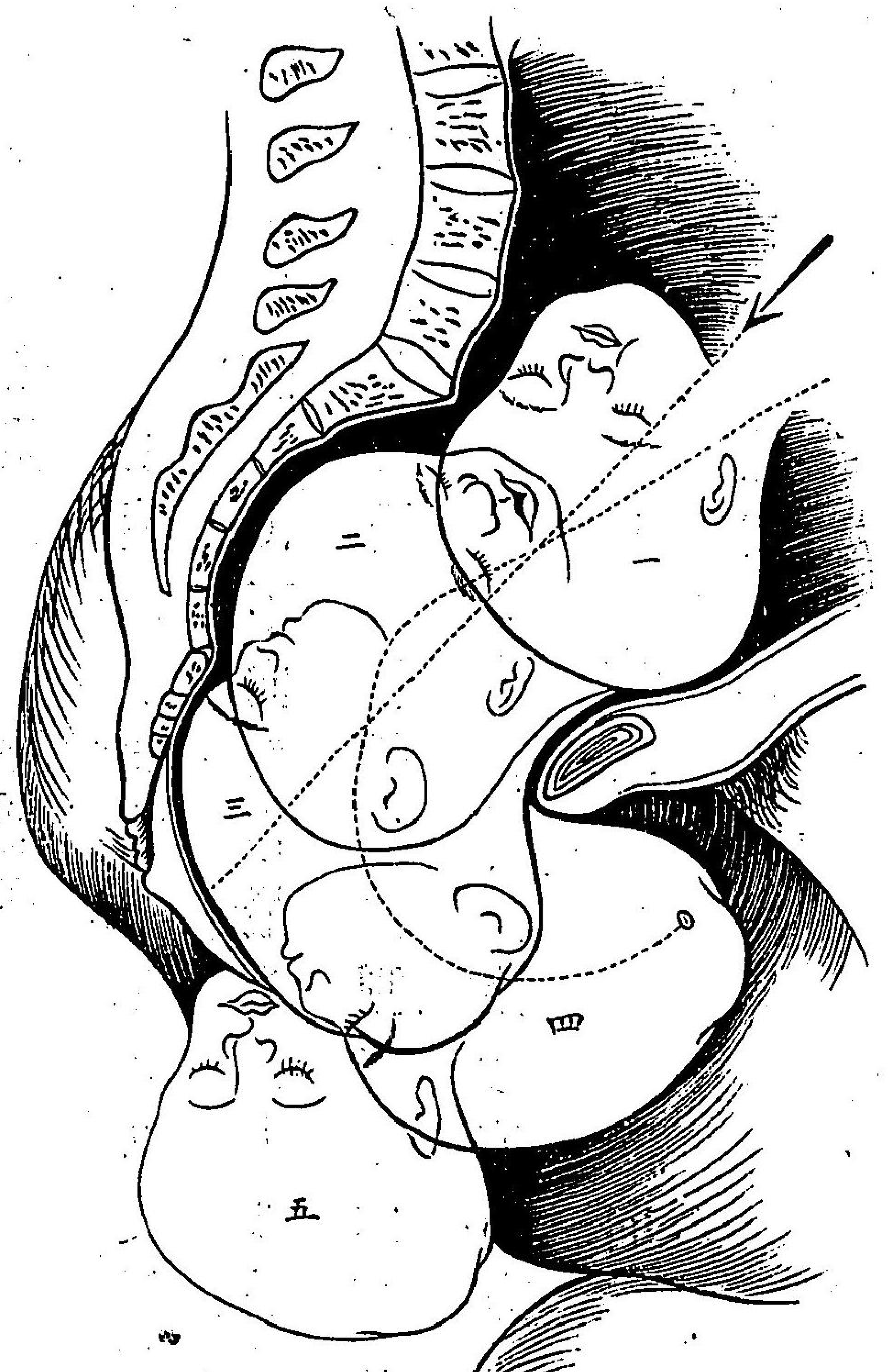
其一　頭蓋位一名頭蓋産

頭蓋位は固より頭蓋の下向するものにして最も安穏なる位置なり而して下向部中最も下方に位する所は則ち後頭部にして最初骨盤の左側若くは右側に向へども骨盤を出づるときはともに轉じて前方に向ふものなり而して其左側に向ふ者を第一體向といひ右側に向ふ者を第二體向といふ

●第一　頭蓋位　即ち頭蓋位の第一體向に於ては外診にて兒背を母腹の左側に觸れ臀部は子宮底の左側に、足は其右側に在りて兒頭を小腹に觸る而して心音は臍と左の腸骨前上棘との間に於

て最も著しまた內診にて觸るゝ所は固より胎兒の頭蓋にして其矢狀縫合の方向は最初骨盤上口の第一斜徑と橫徑との間に在りて小

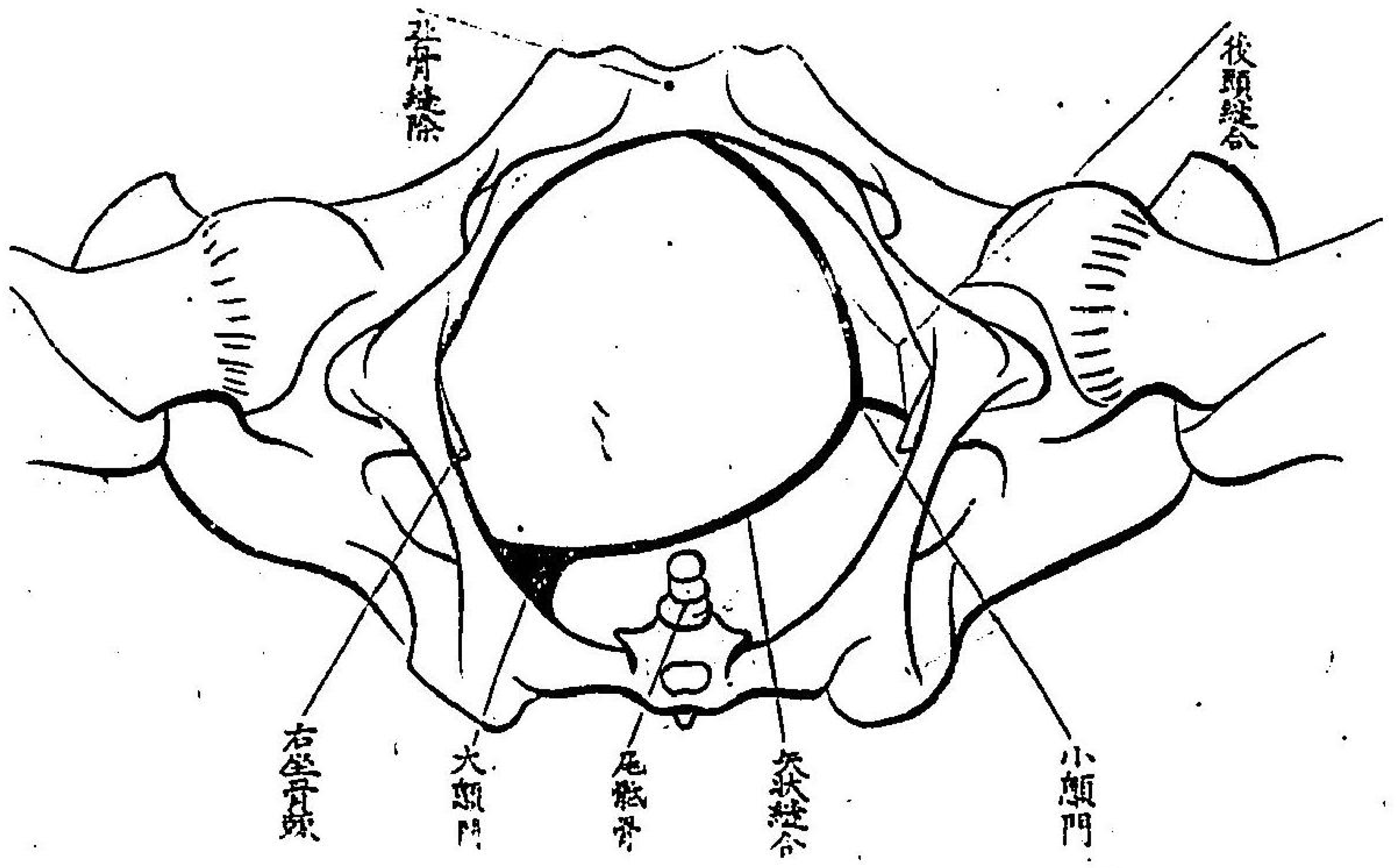
第三十二圖



骨盤を縱斷して其左半分を示し併て第一頭蓋位において兒頭の骨盤を通過する有樣を示す

顖門を左側の稍前方に、大顖門を右側の稍後方に觸る尋で第一の陣痛に由て兒頭は橫の旋轉を爲し以て其前方に向ふ所の右の顱頂骨は後方に向ふたる左の顱頂骨よりも下方に轉じ後頭部もまた轉して前頭部より下方に位すこれに由て小顖門の位

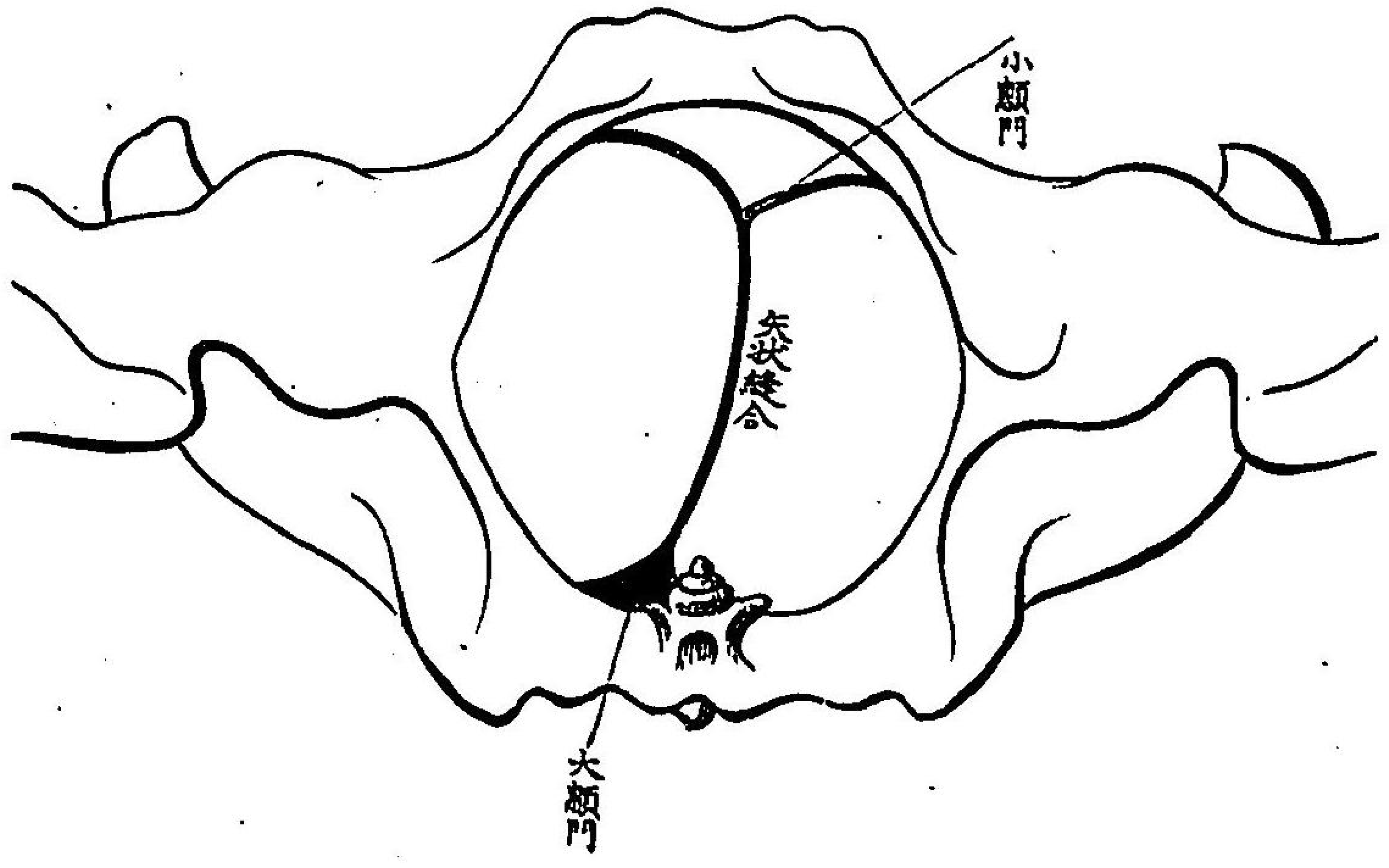
第三十三圖



第一頭蓋位にして兒頭骨盤內腔において占むる所の體向を下方より示したる者

置は低くして觸れ易く大顖門は高くして觸れ難きに至る而して兒頭骨盤腔に至ればまた縱に旋轉して其矢狀縫合は骨盤腔の第一斜徑と同じ方向にあり以て小顖門は以前より稍前方に轉す即ち第三十二圖の一と二は此縱横旋轉の有樣を示すものにして第三十三圖は兒頭骨

第三十四圖



第一頭蓋位に於て兒頭骨盤下口を撥露する時占むる所の體向を示す

盤腔に位する時の方向を示すものなり○兒頭は斯の如き斜なる方向にて骨盤腔を通過し以て骨盤の下口に至れば更に旋りて其矢狀縫合は殆ど骨盤の縱徑と同じ方向にあり小顖門全く前方に轉じて後頭部は恥弓の下に出づること第三十二圖の三および第三十四圖を以て示すが如し此に於て兒頭はまた後より前に向ふて横の旋轉を爲し以て前額および顔面は順次會陰の抗抵を排して先後より出で尋で後頭は恥弓の下を潜りて前より出づるものとす即ち第三十二圖の四は此有樣を示すものなり而して兒頭已に陰門を撥露し了れば其顔面之に轉じて母の右の股に向ふこともた第三十二圖の五を以て示すが如し次に軀幹の陰門を通過するときは後に向ふ所の左の肩先會陰の前より出でゝ前に向ふ所の右の肩尋で恥弓の下より顯れ而して後胸腹共に此方向を以て全く產出し了るものとす

此位置に於て下向部中其最も下方に位する者は則ち頭蓋の右後方なるが故に若し分娩の經過稍長くして頭腫を生ずる場合に於ては其これを生する所もまた則ち右の顱頂骨の後部にして小顖門の近傍とすまた左右の顱頂骨は矢狀縫合に於て互に齟齬重疊して以て右の顱頂骨は左の顱頂骨の上に突出するものなり而して此變形の消散するは產後數時若くは數日の間にして其變化の强弱に從ひ早晚一樣ならず

●第二　頭蓋位　即ち頭蓋位の第二體向は第一體向より罕にして殆ど其半に過ぎす外診にて兒背を母の右側に觸れて臀部は子宮底部の右側に、足は其左側に在り而して兒頭は下方に向ひ心音は小腹の稍右側に於て最も著し內診にては小顖門を骨盤の右側に觸るれども分娩の最初期に於ては右側の稍後方に觸るゝこと多し

故に大顖門の位置は左側の稍前方にして矢狀縫合の方向は骨盤上口の横徑と其第一斜徑との間に在り其他小顖門の觸れ易くして大顖門の觸れ難きことおよび前に向ふたる左側の顱頂骨の後に向ふたる右側の顱頂骨より下方に位することと等總て第一體向に異なることなし只其左右の差別あるのみ尋で兒頭骨盤腔に至れば縱に旋轉して小顖門は右前方に轉じ矢狀縫合は骨盤の第二斜徑と其方向を共にし骨盤下口に至れば更に轉じて其縱徑と同じ方向になり小顖門は恥弓の下に顯る而して此方向を以て兒頭の陰門を撥露する有樣は皆第一體向と毫も異ある所なしといへども已に撥露し了りたる後に於ては彼に於るが如く其顏面は母の右に向はずして左に向ふものとす次に軀幹の陰門を通過する有樣もまた只左右の別あるのみにして餘は第一體向に異なる所なし即ち右の肩胛先づ會陰

の前より出でゝ左の肩胛は恥弓の下より出づるものあり而して頭顱は小顖門の近傍にして左の顱頂骨の後部に坐し左の顱頂骨はまた右の同名骨の上に突出す

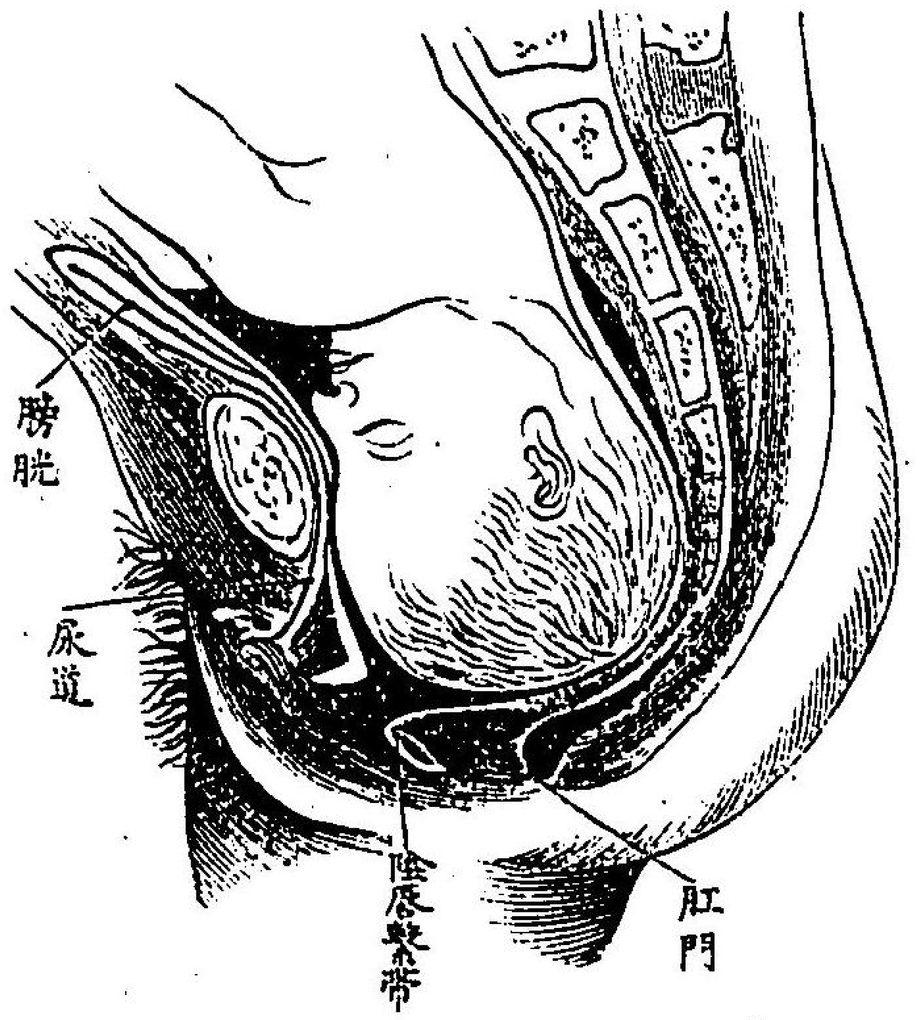
其二　前顱位

前顱位は實に頭蓋位の破格なり兒頭毋の骨盤を出づるとき其前方に轉ずべき後頭部は後方に向ふて前頭部反て恥弓の下に顯る加之ならず前頭部は後頭部より下方に位して頭蓋位に比すれば分娩の經過また大に困難なり

前顱位にもまた固より第一および第二の體向あれども尋常の頭蓋位に反して多くは第二體向なり故に其分娩機轉に就き左に只第二體向を揭げて第一體向は畧してこれを記載せず然れども彼と此とは只左右の差あるのみにして餘は毫も異なる所なきが故に此を知れば他も自ら明かなるべし

前顱位の第二體向は其外診上全く第二頭蓋位に同じといへども內診に於ては兒頭已に骨盤腔に下るも小顖門は尙右前方に轉せずして依然右後方に向ひ大顖門は左前方に在り且頭蓋位に反して前頭部は後頭部より下方に位するが故に小顖門は觸れ難くして大

第三十五圖



前顱位にして兒頭骨盤下口に於て占むる所の體向を示す

顖門は反て觸れ易し已にして見頭骨盤下口に至れば第三十五圖に示すが如く大顖門は更に前轉して耻弓の下に顯れ小顖門は全く後方に向ふ尋で陰門を撥露するときは先後方に向ふ所の後頭部は會陰を排して後より出で次に前頭および顏面は耻弓の下より顯る而して後顏面は正しく毋の左に向はすして其左前方に向ふ○以上此位置に於て其分娩機轉の頭盆位に異ある所にして此より以下軀幹の陰門を通過する有樣は彼此共に異なることとなし

前顱位に於る分娩の經過は頭蓋位に比すれば長くして困難なりといへども尙自然に經過し了るを常とす然れども初產婦に於ては醫の補助を要すること甚だ尠からずまた此第二前顱位に於て下向部中最も下方に位する者は頭蓋左側の後部にあらずして其前部なるが故に頭腫の生ずる所もまた大顖門の近傍にして左の顱頂骨の前

部なり且分娩の經過常に長きを以て產瘤もまた從ふて大なり而して其甚だしき者は顱頂骨の前部に止らずして延ひて大顖門に及び或は尙其前方に蔓延することあり

見頭骨盤內に在りて其小顖門を後方に轉し大顖門を前方に向ける者を以て盡く前顱位となすは非なり如何となれば見頭の尙骨盤內腔に位する間は斯る破格の體向を取るも其骨盤下口に下るに從ふて能く尋常頭蓋位に轉すること尠からざればなり故にこれを前顱位といはずして頭蓋位の第二類といふを以て妥當なりとす例之小顖門の左後方に向ふものを第一頭蓋位の第二類といひ其右後方に向ふものを第二頭蓋位の第二類といふが如し而して所謂前顱位とは則ち見頭已に骨盤下口に至るも依然として尙前の如き破格の體向を取るものの是なり如何となれば其已に骨盤下口に至ては決して

また尋常の方向に轉することあれなければなり

其三　顔面位一名顔面産

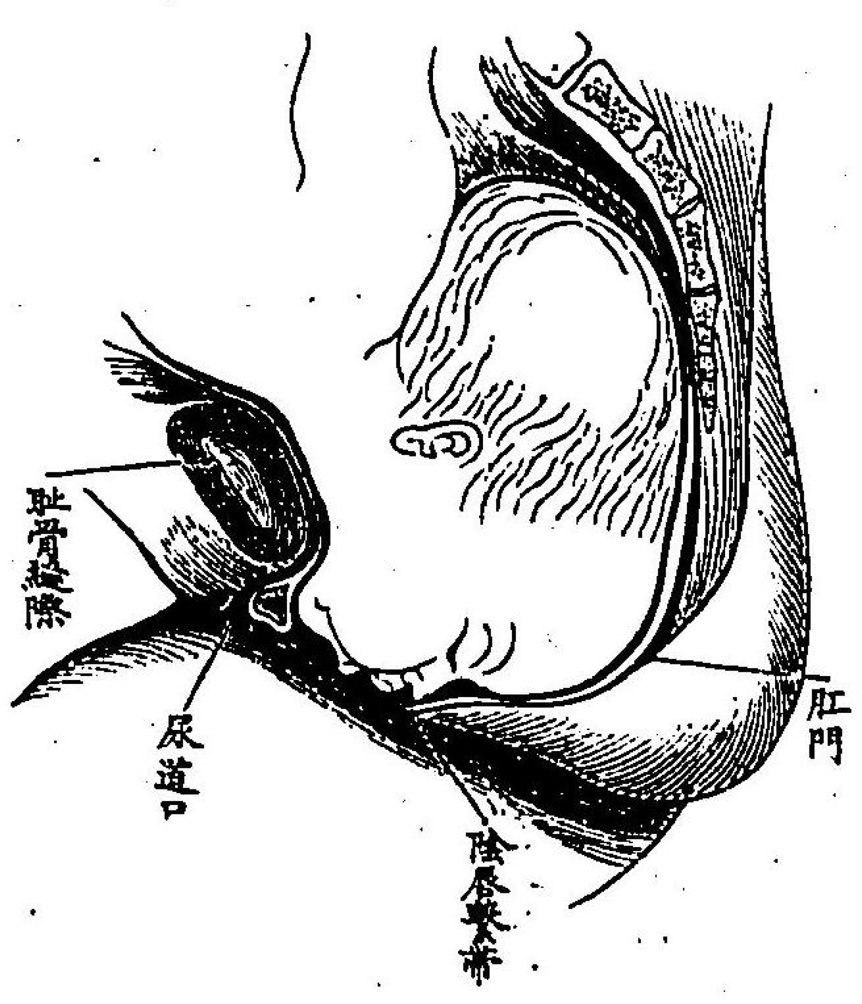
顔面位は則ち頭を強く反らせて後頭を項部に接し以て顔面の下向するもの是なり而して頭部は其體向の第一たり第二たるに從ふて最初骨盤の右側若くは左側に向へども兒頭骨盤を出づるときに當ては共に轉して前方に向ふを常とす但し分娩の經過は頭蓋位に比すれば大に困難なり

●第一顔面位に於ては外診にて兒背を母腹の左側に觸れ足は右側に在りて頭部を下方に觸る但し足は母の腹壁に向ふて

劇く壓迫せらるゝが故に頭蓋位に於るよりも倘著しくこれを觸ることを得べしまた頭部は小腹の中央より稍左方に偏り背と頭蓋との間に深き溝を觸るゝことあり而して心音は小腹の右側に於て最も著し是顔面位に就て外診上最も特別なるものとす如何となれば諸他の縦位に於ては其骨盤位たり將た頭位たるに拘らず心音の最も著しき所は常に兒背の在る所即ち第一體向にては母腹の左側に於るものなれども獨り顔面位に在ては全くこれに反して常に兒背の反對側に於て最も著しくこれを聽き得ればなり○分娩の初期に於て内診すれば骨盤の誘導線中には通例胎兒の鼻を觸れ其左方に前頭縫合右方に口および顋ありて前方に右眼あり故に顔の長徑は殆ど骨盤上口の横徑と其方向を同ふす然れども分娩期進んで兒頭下に降るに從ひ最初右方に向

ふたる顋は第三十六圖に於て示すが如く次第に前下方に旋りて終に耻弓の下に轉ずるが故に兒頭陰門を撥露する時に當ては顔の長徑もまた轉じて殆ど骨盤下口の縱徑と同じ方向にあり尋で前額、顔頂および後頭部は順次會陰の抗抵を排して後方より出で顋は耻弓の下より出づるものとす而して頭部全く陰門を撥露し了れば其出づる時母の前方に向ふたる顔面は轉じて右前方に向ひ續て右の肩胛は耻弓の下より、左の肩胛は會陰の前より出づることと猶諸他

第三十六圖



顔面位に於て兒頭陰門を撥露するさき占むる所の體向を示したる者

の頭位に於るが如し

此位置に於て生ずる所の產瘤は右の顋部および口圍に於て最も著し且分娩の經過長きが故に頭蓋位に比すれば常に大にして甚しきはこれが爲大に顔面の醜形を呈することあり故に斯る場合に於ては產瘤の半ば癒るまで其兒を母に示すべからず

●第二　顔面位に於て發見すべき者は固より皆第一顔面位の反對にして足を母腹の左側に、背部を其右側に觸れ兒頭は下方に在りて少く右方に偏り心音は小腹の左側に於て最も著しまた子宮口の多少開大せし後に於て內診すれば最初前額を右側に、口および顋を左側に、鼻を骨盤の中央に、左眼を其前方に觸るれども分娩期の進むに從ひ前額は後上方に轉じて顋は前下方に旋り以て骨盤を撥露することと第一顔面位に異なることとなし、而して兒頭己に產出し

了れば其前方に向ふたる顏面は轉じて左前方に向ひ尋で左の肩胛は恥弓の下に顯れて右の肩胛は會陰の前より出づるとまた第二頭蓋位に於るが如し但し産瘤は左の顱頂部および口圍に於て最も著し

凡そ内診に依て胎兒の位置、體向等を定めんと欲するには概して其下向部に在る所の軟かなる孔竅に指を加へて長くこれを探らざるを法とす産婆にして若し此心得なきときは或は眼球を傷け肛門を破り陰門を害ふことあり故に若し顏面位の疑あらば宜く先口のある所を探るべし口は即ち上下顎骨の硬き縁を以て圍まれ其近傍には頤の尖りたるあり腔内にはまた間々舌を觸るゝを以て容易にこれを辨じ得べし而して已に口を確認すれば其顏面位たることと固より判然なれども尚診察を確定せんが爲此に至て始て鼻孔、眼窩等を探るは害なし如何となれば産婆已に其鼻孔たり眼窩たるべき考あるを以てまたこれを毀傷する憂なければなり

顏面位は頭蓋位に比すれば分娩の經過大に長く如之あらず胎兒の頭を劇く反するが爲頸の血管は強く緊張せられて斷へず多少の壓を受くるの外尚骨盤下口を撥露する時に臨んでは直に恥骨縫際に向ふて強く壓迫せらるゝが故に頭部より靜脈血の還流するを妨げて腦に鬱血を起し或は出血を來して以て産兒を假死せしむることと甚だ多く時としてはまた眞死に至らしむることありまた母體に於ても産道の軟部殊に會陰の毀傷せらるゝことと前顱位に於るより更に甚し然れども骨盤の造構、軟部の性質、陣痛の強弱、胎兒の大小、下向部の旋轉等諸般の關係總て其宜を得るときは母兒共に害を受けずして自然に分娩を經過し了るを常とす就中經姙婦に於て然り是此位置を以て尚平常産に算入する所以なり

然りといへども顔面位にして若し胎兒の頤常の如く前下方に轉ぜずして久しく後上方に向ふものは決して平常の産にあらず如何となれば斯る體向に於ては胎兒死を免れ産婦危に至らずして自ら産出し了るもの殆どこれなければなり故にこれを此に略し後編異常位置の門に於て詳記すべし

〔乙〕骨盤位一名逆産

骨盤位は則ち骨盤部の下向するものにしてこれに臀位、足位および膝位の別あり而して頭位に比すれば胎兒甚だ危に陷り易し

骨盤位は頭位に比すれば甚だ罕にして出産百人中纔に三人餘に過ぎず而して此位置に於てもまた第一體向は第二體向より多しといへども其差異頭位に於るが如く著しからず○抑も骨盤位に於て胎兒危に陷り易き所以のものは他なし此位置に於て胎兒の臍部已に骨盤內に入れば臍帶強く壓迫せられて血液循環の路を失ふが故に胎兒は其頭部いまだ出でざるに早く已に呼吸運動を試るも只いたづらに羊水、粘液等を吸入して空氣を得る能はず遂に窒息するに由るものあり故に臀部出でゝ後數分時間を經るも尚全く産出し了らざる胎兒は死を免かるゝこと殆どこれなし

其一　臀位一名尾骶位又坐産

臀位は則ち臀部の下向するものにして兒背は固より母腹の左若くは其右に向へども骨盤腔を通過するときは兼て稍前方に轉じて左前方若くは右前方に向ひ

臀部および肩胛部の骨盤下口を出づるときは全く側方に轉じ頭部の出づるときは更に前方に向ふを常とす

●第一臀位に於ては外診上兒頭を子宮底部の右方に、兒背を母腹の左側に觸れて心音の最も著しく聞ゆる所は臍窩若くは其上方にして腹の中線若くは其稍、左方にあり内診に由て觸るゝ所の下向部は頭蓋よりも軟かにして二個の半球形を呈す是即ち左右の臀部なり其間に溝あり溝の中央に肛門あり但し分娩の最初期に於て胎兒の下向部倘母の骨盤上口に在るときは臀部の横徑は骨盤の第二斜徑と其方向を同ふするを以て左の臀部は右前方に、右の臀部は左後方に向ひ肛門の右後方に陰部ありて其左前方には尾骶

骨の尖端を觸れ時にまた薦骨の後面および腰椎をも觸るゝことあり而して骨盤内腔を通過するにもまた臀部の

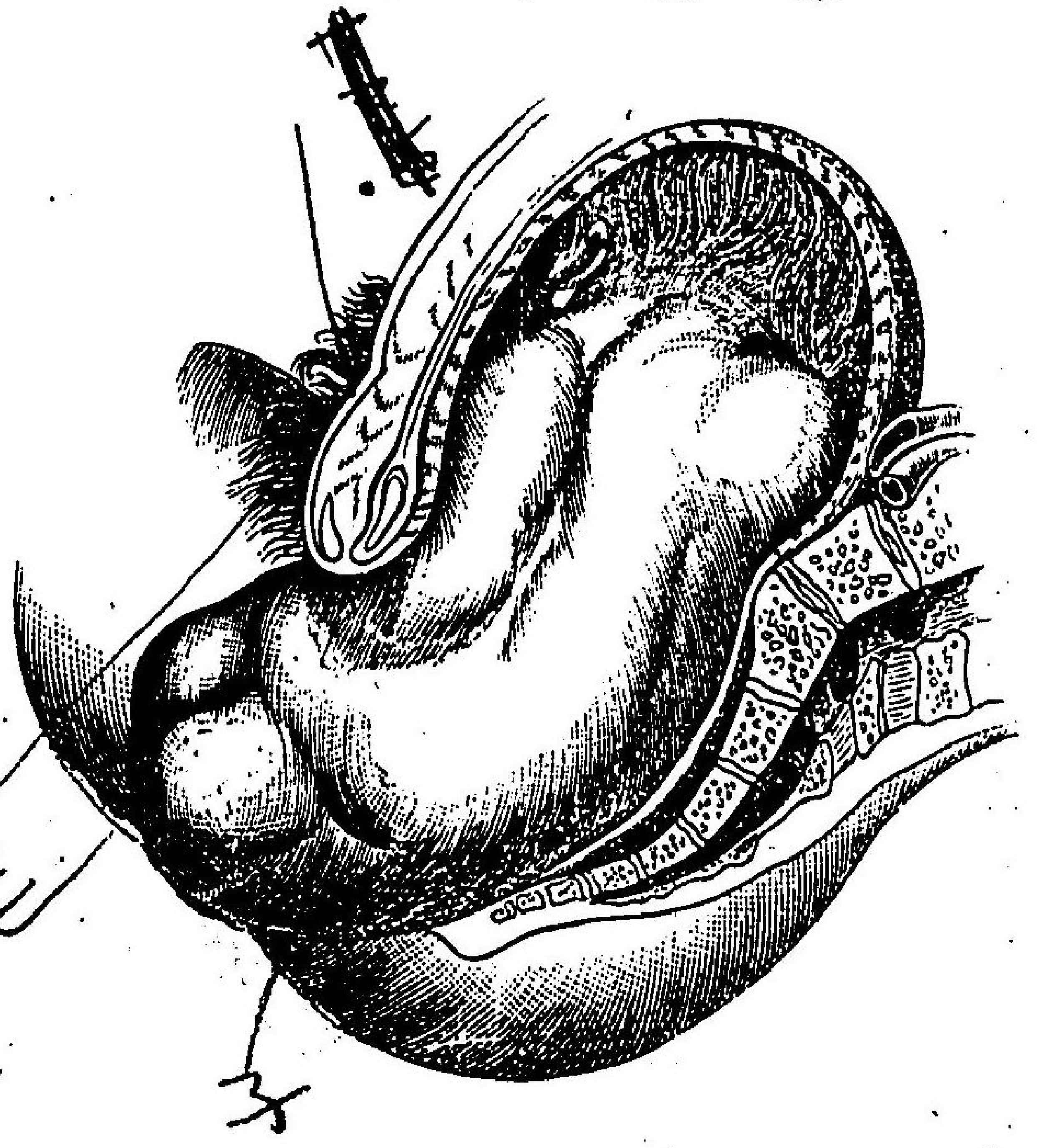
第三十七圖

第一臀位を以て胎兒子宮内に在る所の形を示す

横徑は右の如き斜の方向を以てすれども骨盤下口に至れば轉じて其縱徑と殆ど同じ方向になりて兒背は正左方に向ひ左の臀部先陰門に顯れて恥弓の下に出で右の臀部は會陰の方より顯れ出づ臀部已に陰門を撥露し了れば兒背はふたゝび左前方に向ふて軀幹、四肢

續ひて產出す但し下肢は腹と共に、肘は季肋と共に出で前膊は胸と共に出づ尋で肩胛部出づるときは兒背また轉じて全く左方に向ひ左の肩胛は耻弓の下より、右の肩胛は會陰の前より顯る斯の如くして軀幹全く骨盤を出づれば兒背は更に前方に旋りて兒頭の縱徑は骨

第三十八圖



第一臀位に於て臀部已に陰門を撥露したる形を產婦の左側より示す

盤の縱徑と同じ方向になり後頭は耻骨縫際の後に接して會陰の前よりして顱部、顏面、頭蓋等順次相尋で顯れ以て全く產出し了る○此位置に於て生ずる所の產瘤は左の臀部および陰部に在り然れども通例頭腫の如く甚だしからず

●第二臀位に於ては兒頭は母腹の左上方に在て兒背を右側に觸れ心音は臍窩若くは其上方に於て中線の右側に最も著し臀部の橫徑は骨盤の第一斜徑と同じ方向を取りて右の臀部は左前方に、左の臀部は右後方に向ひ陰部は肛門の左後方に、尾骶骨薦骨等は其右前方にあり其他分娩機轉に至ては第一體向に於て述べし所と異なることなし只左右の差あるのみ

其二　足位および膝位

足位および膝位は則ち臀位にして足若くは膝の脫出

せしものに外ならず而して兩足若くは兩膝の下向するを全足位および全膝位といひ其片側なるものを不全足位および不全膝位といふ分娩機轉は共に臀位と大同小異なれども彼に比すれば胎兒更に危に陷り易し

此位置に於て下向せる所の足若くは膝の方向は胎兒の臀部母の骨盤上口に入たる後に至りて初て定まるものにして其いまだ入らざる前に於ては種々に變じ易し而して膝位は足位に比すれば甚だ罕なり

外診に就ては臀位に異なる所なけれども內診すれば兩側若くは片側の足或は膝を觸知す但し足は手に比すれば其形狹くして長く五

趾共殆ど同じ長さにして手の指より短し而して大趾の足に於るは拇指の手に於るに反して最も長くまた拇指の如く自由に運動せず加之ならず足には手に於てこれに比すべからざる踵部ある等を以て容易に彼此を辨別し得べしまた膝は大にしてこゝに膝蓋骨あるを以てこれを肘と誤認することなかるべし而して此等の識別は胎胞のいまだ破れざる前に於てもまた敢て困難の業にあらず足はまた胎胞の內に於ても間々衝くが如き強き運動をなすが故に一觸して以て其手にあらざることを推察し得べし

足位および膝位に於て胎兒の骨盤を通過する有樣は臀位に於て述べし所と大差なし然れども臀位に比すれば胎兒害を蒙ること多しまた足位および膝位とも其全なる者は不全なる者に比すれば更に害あり